

国立国語研究所学術情報リポジトリ

敬語教育の基本問題(上)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001841

日本語教育指導参考書17

敬語教育の基本問題(上)

国立国語研究所

刊行のことば

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている方々の指導上の参考に供するため刊行するものです。

今回は、その第17編として「敬語教育の基本問題 上」を刊行します。本書の執筆をお願いした方は、次のとおりです。

窪田富男氏（東京外国語大学教授）

本書が教授上，研究上の資料として適切に活用されることを期待します。

平成2年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

はじめに	1
I 日本語教育と敬語	5
1. 学習者の敬語への接近	5
2. 外国語能力とは	7
3. 敬語教育と教師の態度	9
4. 一時間目から敬語を教えている	11
5. 敬語は社会的・心理的なもの	15
6. 敬語教育の目的と方法	18
II 外国人の見た敬語	21
1. アメリカ人	21
2. ドイツ人	23
3. 中国人	25
4. 言語学者	27
5. 「丁寧でない言い方」の重要性	32
III 諸外国における敬語行動	35
1. 世界の敬語の類型	36
2. 日米大学生の対人意識	40
3. 日米大学生の敬語行動	44
4. 人物カテゴリーと表現との対応関係	46
5. 日本と韓国の対人意識の対照	48
6. 日本と韓国の敬語表現	51
7. 敬語行動の国際比較	52
IV 日本人の対人意識と敬語行動	55
1. 敬語の一般的性格と意味構造	55
2. 日本語教育への応用例	63
3. 敬語の使用条件(1)——上下関係を優勢とみる考え——	66

4. 日本語教育での従来の扱い	70
5. 本書の立場——学習者の疑問——	72
6. 敬語使用の条件(2) ——ウチ・ソトの人間関係を優勢とみる考え——	74
7. ソトからウチへの過程	79
8. ウチ・ソトの応用——二次的ウチの形成——	81
9. ウチ・ソトと上下のからみあい	83
10. 学習者の質問例	86
V 敬語のはたらき	91
1. 現代敬語の性格	91
2. 敬語のはたらき(1)	92
3. 敬語のはたらき(2)	94
4. 敬意と敬語	98
5. 「親愛」と敬語	101
6. 「親切」と敬語	102
7. Brown と Levinson の考察	103
VI 日本人の話し方の論理	111
1. 会話のルール	111
2. 丁寧さのルール	113
3. 日本人の話し方の論理	117
4. クッション行動から注釈行動へ	125
参考文献	129

はじめに

これまで自分の使っている日本語を意識的に、あるいは分析的に見つめたことのない日本人に、音声や文法について質問をしてみても、答えられる人はまずない。

ところが、敬語について質問すると、大抵の人が、たとえ印象的にでも、なにかしら答えることができる。丁寧すぎる、この「お」はおかしい、「さん」ぐらいつけるべきだ、二重敬語ではないか、若い人は敬語の使い方を知らない、等々。

これは、敬語というものが日本人にとっても、かなり意識的に学習されるものであることを示している。子どもからおとなへと成長するにつれて、つまり社会化が進むにつれて、親から、周囲の人々から、まねたり、注意されたりしながら、大なり小なり意識的に学びとらざるをえないものだからであろう。そして、他人の敬語の使い方をいくらかでも批判することができるようになる。このことは、また、社会生活における敬語の役割というものが、個々人にことばづかいについてのイデオロギー（期待観）の形成を要求する性質をもっていることを示している。敬語の取り扱いのめんどくささは、母語としてであれ外国語としてであれ、このイデオロギーに基づいている場合がはなはだ多い。

また、敬語法という文法は、ある文を構成する言語要素の統一体としてのヨコの関係（シンタグマティックな関係）と、言語要素の選択の妥当性としてのタテの関係（パラディグマティックな関係）とに、通常の文以上に格別の注意をはらわなければならないというやっかいさがある。おそらく、日本人が自分のものいいでまちがったと意識したり、言いなおしたりする箇所は、敬語表現についてがいちばん多いであろう。しかも、その妥当性や文法性について個々人の判断がかならずしも一致しないという困難さがある。したがって、子どもや外国人のように話者の言語的基盤がよい段階ではなおさら、敬語使用にルール違反があると、目立ちやすい存在となる。

一般に文法というものが、意味の正確さを伝えるための論理的手段であるとするならば、社会的拘束力の強い敬語使用は、場に応じる表現の妥当性を確保するための倫理的手段であるといえるだろう。この論理性と倫理性とが微妙にからみあって切り離しがたいところに、敬語を取り扱う場合のむずかしさがある。いうまでもなく、この倫理性は時代の推移、社会の変化とともに変わる。

敬語とは何かについて、定義的に述べることはむずかしいが、もっとも簡単にいえば、人間関係をスムーズに保つための言語的手段、すなわち、〈円滑なコミュニケーションのためのことばの使い分け〉といえよう。もう少しこまかくいえば、〈話し手と聞き手との社会的・心理的へだたりの度合いを軸にして、素材の内容や状況に配慮しながら変える、話し手の言語行動と言語形式〉ということになるだろう。

この意味では、日本語の通常のことばづかいは、それが丁寧であれ、普通であれ、ぞんざいであれ、ほとんど常に敬語の体系に支配されているという考え方に立つことになる。また、この意味では敬語の体系というより待遇表現の体系と呼ぶほうがふさわしく、狭義の敬語はこの待遇表現の一部ということになる。世界的にみれば、言語行動における〈丁寧さ politeness〉の問題ということになるだろう。

さらに、教育の立場に立てば、敬語はなぜ使われるのか、それを使うことはどのような効果があるのか、どの程度までの指導が必要なのか、という問題が出てくる。伝統的な敬語観が大きく変わってきていることは、だれの眼にも明らかだが、では現代敬語をどのような性格のものとしてとらえたらよいかという問題になると、人それぞれの見解が分かれてくる。けれども、教師にとっては、自分なりの敬語観の確立が要求される。でなければ、体系的な指導はできないからである。この場合、日本文化特殊思考に立つのではなく、できるかぎり言語の普遍性のなかに位置づける試みをすべきであろう。

敬語や敬意表現をめぐる問題はあまりにも多く、その一部しか取り上げることはできないが、この上巻では、主として敬語行動をめぐる、先学の研

究で日本語教育にも直接役立つと思われるものを紹介しながら、教師が敬語指導のまえに知っておきたいこと、特に学習者の無理解を正し、誤解を与えないための基本的なことがらについて述べることにする。

下巻では、敬語形式をめぐる諸問題を取り上げる。

I 日本語教育と敬語

1. 従来の学習者の敬語への接近

日本語の学習者に、日本語のどんなところがむずかしいかと聞くと、その返答は、母語により、学習段階により、さまざまであるが、非漢字系学習者の漢字の問題をのぞくと、もっとも多いのは助詞・助動詞と敬語であると答えるのが一般的であることは、日本語教育にたずさわったことがある人ならよく知っている事実である。これまでの学習者を見るかぎり、音声や文字や語彙や文法の一通りの基礎が身につく、日常的な会話や読み書きに慣れてくるにつれて、つまり、日本人との意思疎通にそれほどの苦労がなく対応できるという自信がつきはじめたころ、学習者が異口同音に指摘するのは〈いわゆる敬語〉のむずかしさである。

いいかえれば、ある程度日本語に上達した結果、日本の社会に積極的に入りこめそうだという喜びを感じはじめたころ、複雑にみえてどう整理してよいかわからないことばの壁にもう一度ぶつかる。この壁がいわゆる敬語である。初級や中級の理解や記憶や慣れへの苦しみとはちがう、日本語らしさを獲得することへの不安である。

つまり、この段階では、基本的な敬語使用の知識はあるけれども、自分のしゃべる日本語が、日本人のそれと比較していやに一本調子であり、直訳的ないし教科書的であって、自然さがなく、なかんずく〈日本人のようなことばづかいができない〉と意識しはじめるのである。日本人の話し方がよく聞き取れるようになればなるほど、そこに現れることばづかいの多様性や、意味の間接性や、自国民との態度の異質性にとまどい、それが主として待遇表現、なかんずく敬語とよばれるものと深い関係のあることに気づくようになる。そして、意識的に敬語なるものの構造や機能を知ろうと努めるようになる。このことは、とりもなおさず、日本人の言語行動に占める敬語の役割を示しているし、日本語教育におけるこれまでの敬語の扱い方を反映しているといえる。

日本に来て初めて日本語を学び、しかも文型・文法中心に集中的に教育を受けた人々を例にとるならば、上記のような日本人のことばづかいに、敬語の観点から、特別な関心をいだくようになるのは、個人差や環境の差のあることはもちろんだが、ふつう1年近く経ってからである。敬語の初歩的なこと、特にその形式と用法の概略については、「敬語」という名のもとにかなり早い段階（初級教科書の段階）で学習する。しかし、ふつう最初の1年ぐらひは、4技能の基本を身につけること、つまり意味の受容や伝達の直接的な手段を身につけることに精一杯で、場に応じてより適切な表現をえらぶだけの言語的な基盤はない。少なくともこれまでの教授法においては、この段階では、日本人のことばづかいの構造や敬語のくわしいことについて理屈として教えても不安を増すだけであった。それを生かす言語的能力に余力がないからであった。というより、これまでのオーディオリンガル法にもとづく教授項目の選択・配列とその練習法からは当然の帰結であった。

敬語の学習価値は理解よりも運用という実践以外にないといっても過言ではないのであるから、話し相手をすべて「あなた」ですまし、教師もそれに干渉しないでいる段階では、敬語要素の選択のやっかいさも、対人関係その他に応じることばづかいの変容のはげしさも、理解できないのも無理からぬことである。とはいえ、4技能が上達するにつれて敬語への欲求が強くなること、そして適切な敬語表現ができるようになることが、学習者の日本語力をいっそう自信のあるものにすることは事実であり、このことは、日本人の母語としての敬語獲得の順序と大差ないことも忘れてはならないことである。

外国で日本語を習い、すでに相当に上達してから来日した者の場合も、日本の言語社会のなかに入ってはじめて、敬語表現、なかんずく待遇表現の複雑さに驚く者が多い。単純なルールでは処理しきれない実例にあまりにも多くぶつかるからである。この場合に、周囲の日本語に影響されて、しばしば、興味ぶかい現象がおこる。来日時、多少たどたどしくても折り目正しい日本語を話していた者が、数か月もすると、流暢にはなったが、ぞんざいで聞きぐるしい日本語に変わることがよくある。この場合の流暢さとは「友だちこ

とば」のそれである。日本人のような話し方をしたいという欲求と、周囲からうまいとほめられることがこの傾向を助長するらしい。この時期に適切な指導が得られた者は、その後飛躍的にきれいな日本語になる。このことは、敬語や待遇表現についての適切な教育の必要性を示唆しているし、教科書にたよるだけの学習や、特定の人間関係（師弟関係や友人関係など）のなかだけでは、実用的な現代敬語の一部しか習得できないことを教えている。

2. 外国語能力とは

ある外国語を、国際的に共有された伝達的手段としての言語ではなく、ある文化を背負ったある民族の言語であると見る立場に立つとすれば、その外国語を理解し運用する能力はつぎの三つの能力から成り立っていると考えられる。

(1) 言語的能力：発音、語彙、文法の力を指し、外国語能力の中核と考えられるもので、いわゆる4技能（聞く、話す、読む、書く）を指すが、ある程度の非言語的技能（態度、身振りなど）もふくまれる。

(2) 伝達的能力：言語的能力を社会行動の能力として使える力を指す。つまりその言語社会でその言語を使って、生活上・仕事上の問題解決がはかれる力を指す。コミュニケーション障害（表現の不適切など）をみずから「修復」する能力もふくまれる。この能力は言語的能力としての正確さとは一致しないこともよくある。

(3) 文化的能力：伝達的能力をその文化の枠組み・脈絡（習慣、作法など）にそった形で、その文化の構成員と可能なかぎり同じようにふるまえる力を指す。その文化についての知識を必要とし、非言語行動の適切さも重視される。

この三つは言語的能力を中核として包摂的な関係にある。これらの能力を統合的にはたらくように訓練するのが外国語教育の内容と方法ということになる。外国語能力をこのように考えると、日本語の敬語あるいは敬意表現は三つの能力のいずれにも深く関わっている端的な例であることがわかる。日本語が母語文化と切り離された国際共通語になれば、この考えも変わっていく

と見てもいいだろう。しかし、近年の外国語教授法におけるコミュニケーション能力重視の思想は、この三つの能力の統合を意味しているはずである。しかし、日本語のような敬意表現形式の多様性とそこに含まれる文法的ルールとを、どう扱うかについての提案はまだなされていない。

この三つの能力の養成は、原則として、この順序で強調されるのが自然であろう。ただこのことは、あるコース全体における順序ではなく、各課・各時間のなかにおいても配慮されねばならないことである。これらの能力は、その一つに指導の比重がかかれば、他はおろそかになりやすいという性質をもっていることにも注意したい。

従来のように、敬語を敬語として取り立てて指導するのではなく、伝達能力の養成を見据えての段階的提出をはかることになるだろう。したがって、日本語全体における敬語の役割を考慮しながら、敬語教育というより〈日本語教育そのもの〉としての構造シラバス、機能シラバス、場面シラバスの有機的な提示のなかに、敬語的要素がどのように組み込まれなければならないかが研究課題となるだろう。

このようにいうことはやさしいが、三つのシラバスのすべてについて、敬語との関連を考慮しながら、過不足なく新しい整理と提示の方法を考えることは決してやさしいことではない。教育である以上、どのような能力の養成のために、いつ、どのような要素を、どれだけ、どのような方法で提出し、訓練するのがよいか、つねに問われることになるのであるから、よくばることは危険である。なぜなら、自然な日本語を重んじれば重んじるほど、そこに網の目のように入り込んでいる敬語的要素のもつ文法・意味・機能と格闘しなければならないからである。日本語の敬意表現のように、語彙的にも文法的にも複雑さをもっている言語においては、表現の自然さと教育的効果を意図する段階づけとのあいだには、あるギャップがあることを認めなければならない。しかも、敬語の〈標準化〉は、これまでの敬語に関する調査・研究からも、初歩的な段階を除いては、かなりむずかしいことと考えられる。

3. 敬語指導と教師の態度

敬語はむずかしいか、という質問を日本人の日本語教師に向けてみると、答えは二通りある。一つはそれほどむずかしくないというものであり、他は相当にむずかしいというものである。前者はどちらかといえば、尊敬語や謙譲語や丁寧語という狭義の敬語に主たる関心が向いているもので、初級段階の教育に自信のある教師に多いようである。後者は敬語を広い意味で解釈するもの、あるいは、形式よりも行動に関心が向いている教師に多いようである。

この二つは、敬語にアプローチする場合の態度のちがいを表していて興味ぶかい。しかし、敬語の形式と敬語による行動とは表裏一体のものとして教育し学習されねばならないものであるから、いずれの一方が不十分であっても望ましい効果はあげえない。

言語の形式はいわば記憶の堆積であり、言語の行動はその記憶の堆積の中から、場に応じて、もっとも適切なものを選び出し組み合わせる作業であるといえる。だから、どれほど多くの敬語形式を覚えたとしても、そのままでは、社会的・心理的に無数といえる人間関係の場にただちに対応できるようにはならない。敬語のむずかしさは、有限である形式を無限の場に応用するかということである。そこに、日本人でも判断のちがいが生まれるし、教師のあいだでも意見がわかれることがよくある。敬語行動の適否の判断を支えるのは、最終的にはその時代の社会通念であるが、その社会通念を形づくる個々人の判断は、具体的な表現の適用にさいしてはかなり差がある。この差は、通常、母語話者よりも、外国語としての学習者に鋭敏に映る。そこから、とまどいが生まれやすい。このとまどいは、成人の学習者にとっては宿命のようなものである。その端的な例は「お／ご」の使用・無使用であったり、本動詞と補助動詞とからなる述語部分（たとえば「来てくれる」）の敬語化の多様性と個人差の大きさであったり、あるいは修飾節や引用節の丁寧化の程度であったりする。

けれども言語教育には、学習者のことばづかいに期待するものとして、教

師のある種のイデオロギー（とくに、丁寧さについての期待観）がつきまとうのが、むしろふつうである。おそらく、程度の差はあれ、どの言語でも同じことであろう。ただ、注意しなければならないのは、敬語はむずかしいと決めてかかる態度や、外国人だからこの程度でよい、とする甘やかし（や子ども扱い）の態度である。この甘やかしは、しばしば、教師だけでなく日本人全体に共通して見られる。その底には日本語はむずかしい言語だという先入観がある。だからといって、日本人が場合によって使う複雑な敬語形式まで使えるようにしなければならない、などというのは行き過ぎである。〈標準化〉は困難だとしても、期待される丁寧さのレベルが中庸を得たものか否か、違和感があつたとしても修正する必要のない程度のものか否か、見きわめる態度が必要である。

この態度は、現代敬語の実態や性格のとらえ方と外国語教育としての理念とからつくられる。つまり教師は敬語についての価値観をもつことが要求される。でなければ、表現の多様性についての学習者の迷いに対処することができない。この場合、相手や状況に応じて変わる敬語の方法を身につけさせることは、日本語の基本を身につけさせることと同義だからといって、あるいはそうしなければ日本人とのコミュニケーションで〈不利益〉をこうむることになるからといって、いたずらに母語話者なみを要求してはならないであろう。

外国語教育は、理解力を養うよりも使用能力を養うほうがはるかに骨がおれる。敬語も使ってみなければ習得の困難さは分らない。理解・受容を主とした教育では、おそらく、観念的にしか敬語のめんどくささは分らない。この使用能力は伝達的能力の養成ということを基盤にして初めて強化されるものであろう。これには時間がかかる。母語でも同じことだと思う。生きたことばの取り扱いはずべてそうだともいえるが、敬語はことに使ってみなければわずらわしさは分らない。話しことばにせよ書きことばにせよ、そこに使われている敬語表現のすべてが理解できたとしても、それだけでは古文の学習と大差はない。

はしがきでふれたように、敬語を現代の言語待遇（待遇表現）という広い意味に解釈すれば、敬語は現代日本語の文表現のほとんどすべてと関連している。日本語の文表現を敬語表現と非敬語表現に二大別してしまうこともできる。しかし、互いに言語的には対立していても、遊離したものではないから、この二つを切りはなして扱うことはできない。もし切りはなして扱うとすれば、それは部分的な研究にはなりえても、日本語の教育実践とは別のものになるだろう。いいかえれば日本人の言語行動という全体的視野のなかに位置づける必要がでてくる。

その意味でも日本語の文表現を発話行為として扱えば、初級レベルと上級レベルとを問わず、いわゆる敬語的観点を除外して扱うことは困難である。しかも、場に応ずる使い分けができるようになるまでには相当の時間がかかる。

4. 一時間目から敬語を教えている

日本語の文表現は、敬語的観点を除外しては扱えない——正確には扱いにくい——ということを、教育の現場に立って少し述べてみよう。教師にとっては、敬語とはなにかを考える第一段階でもある。

1) まず、対人関係に応じる表現の選択である。多くの教科書で、日本語を文として取り上げるとき、いわゆる名詞文から導入しようと、動詞文から導入しようと、

a) (——は) ——です。

b) (——は——を) ——ます。

のいずれかの文末形式をとるのが普通であろう。日本語の文法では、一般により基本的と考えられているダの形でも、ルの形（動詞・形容詞等の終止形）

- でもなく、デスやマスの形を選択すること自体——これを敬語と認めるかぎり——最初から敬語を教えているのだといって、けっして言いすぎではない。現代語の文末形として5種類（ダ、デス、デアル、デアリマス、デゴザイマス）もある中から、まずデスやマスを採用することは、それなりの重要

な意味があるからであろう。(日本人の子どもが最初に身につけるのはダのレベルの言い方である。)これら5種類の文末形式の意味や機能については、別に改めて取り上げることにするが、ダヤルを選ばず、デスとマスを選び、それに対してほとんど異論が出てこないこと自体、日本人の対人関係で期待される言語待遇についての意識を端的に示している。一言でいえば、個別の対人関係や状況を捨象して、〈成人社会一般におけることばづかいの丁寧さにおいて無難〉という実用的効用を優先させているわけである。

いまほど日本語教育が盛んでなかったころは、大学に入ってくる学生でも、次のような応答をする者がしばしばいた。

教師「○○君、いますか」

学生「うん、いるよ」

教師「これは、むずかしいですから……」

学生「なんだ、知らないのか」

いわゆる友だちことばである。どのような言語環境のなかで習得されたものかは、容易に想像がつく。

ところで、ある広く使われている初級の日本語教科書の終わり近くに、タクシー運転手と客との会話例があがっているが、運転手にデス・マス体を使わせ、客にダの体を使わせている例がある(「たのむよ」「ああいよいよ」など)。外国人学習者がサービス業者に対する客のことばづかいはこれが標準的なのだと思いこむとすれば、はなはだ危険なことである。

日本人にとっては、デスやマスの形は無難な社交文体として、言語生活にふかく根をおろし、一般化しているために、それらの使用に特別な敬語意識を感じなくなっているといえる。このデスやマスの形から日本語を導入することは、文法指導上は、実は、便利な面よりもわずらわしさのほうが多いのである。学習者に対してこのデスやマスの意味・機能を、最初から意識させるほうがよいか、させないほうがよいかは、期待する日本語のありようと教

授法の問題である。

2) いま述べたデスやマスは、いわば文レベル（厳密には談話レベル）の問題であるが、語レベルの問題をみても、入門期のそれめかなり早い段階で、すでに困難な問題にぶつかっている。

たとえば、文型指導中心のある教科書に「～は～です」のモデル文として「わたしはせんせいです」がある。日本人の成人どうしでは自分のことに「先生」を使うことはまずないであろう。では「教師」でいいかといえば、目の前の相手を指してはまた使えない。「先生」も「教師」も必要なことばだとすれば、同時提出を考えるべきか優先順位を考えるべきか、教師は迷わざるをえない。「(～を) おしえています」を出すとするば、文法シラバスとの関連が問題になる。

また、同類の練習として「(～は) 男／女です」があることもある。そして、それと前後して「これ、それ、あれ」や「この、その、あの」などが出てくると、知り合ったばかりの隣人を指して、「これは男です」といったり、窓の外にふと見かけた女性を指して、「あの女も先生ですか。」などということもある。

いずれの場合もせまい意味の文法からみれば、まちがいでない。けれどもいわゆる敬語法（待遇語法）からみれば、まちがいである。指導の主眼が文構造の理解にある場合には、このようなことは起こりやすい。

「これ、それ、あれ」についても、「男、女」についても、かなり早い段階で扱われることが多い。語彙としては基本語に属する。日本語の語彙の多くが敬語的対立をなしており、特に人間そのものを表したり、人間と関係して用いられる場合には、辞書的意味は同じでも敬語的意味（待遇的意味）がちがうことが多く、コンテキストによらざるをえない。「これ、それ、あれ」は、「こちら、そちら、あちら」や「こいつ、そいつ、あいつ」などとの対立から、「男」は「男の人、男の方、男子、男性」など、また「女」は「女の人、女の方、女子、女性、婦人」などとの対立から選ばねばならない。こうした語彙体系は日本語の大きな特徴といってよく、誤用の特徴をなす一分

野である。これらのことは、入門期だからといって、あるいは、意味の理解にさしつかえないからといって、敬語的表現と隔絶した立場には立てないことを示している。特に日本で日本語を習う場合には、上記のような語例はほぼ同時に聞いたり見たりすることがあり、学習者をとまどわせる。

3) いま述べたことに関連するが、入門期の最初から敬語と密着しているもっと端的な例、もっと困難な例は、いわゆる人を指すことば（人称詞）である。英語を例にとれば、I や you や he/she に対応する日本語として何を選んだらよいか。I については、成人の場合は「わたし／わたくし（が／は）」がもっとも無難だと考えられようが、幼い子ども、とくに男の子の場合はそうともいえないだろう。you を「あなた」とすることについては一定期間がまんすることを前提としているのだろうし、he や she にいたっては何をあたえたらよいかとまどうばかりだろう。日本人はそれらを使用しなくても文表現ができるからといって、学習者にも同じことを要求することが、言語的能力の養成に有効であるかどうかは疑問である。

人間関係につよく規定されている人呼称は、日本語の待遇表現の核をなしていると考えられ、その形式が表に現れるか否かに関係なく、文の丁寧さのレベルやそこに使用される他の語の性格と深く結びついて、入門期から上級までずっと、学習者のみならず教師をなやます大きな問題である。だからといって、避けて通ることのできないところに、教授法や教科書のなやみがある。

上記のことをいいかえれば、「A は B です」という「デス」レベルの文体の採用は、かりに A や B の位置にどのような語がこようと、その文の〈話し手〉は、言語表現のうえで、聞き手に対して自分を「ぼく」や「おれ」ではなく、「わた（く）し」でさししめす特別な位置に——謙譲的位置に——みずから位置づけていることを暗に宣言しているのである。このことは、たとえば「～は～ですか」という疑問文なら、原則的には少なくとも「はい、そうです」「いいえ、そうではありません」レベルの言語待遇を学習者に要求しているのであって、けっして、「うん、そうだ」「いや、そうじゃない」でもよしとして

いるのではない。

また、談話を重んじ、表現の〈自然さ〉を重んじる最近の教科書は、初級もごく初めの段階から、終助詞の「ね」や「よ」や、接続助詞の終助詞的用法の「～が」「～けれど／けど」や、話しかけ・言いよどみ・言いつなぎなどの「あの一」や「ええっと」や「それに」など、意味・機能の複雑さにはとらわれずに提出する傾向が強くなってきているが、学習者にどの程度強調すべきか、あるいは強調すべきでないかについての議論はまだ少ない。理解できればよいとするか運用まで期待するかは、教科書の作成にも指導法にも大きく関係する。話しことばと書きことばとを問わず、説明的・分析的立場に立てば、辞的要素に近いものほど指導は困難であるが、自然な話しことばや単位としての談話を重んじれば重んじるほど、そのような辞的要素が瀕出する。その辞的要素のなかでも、自然な表現や待遇表現の指導上、はやくから必要なものと、あとでよいものとの区別が要求されているはずである。

以上、あたりまえのようなことをあえて述べたのは、初級だから敬語には関係ない——多くの人がそう考えているらしい——と思うのはまちがいだということと言いたかったためである。くりかえしになるが、敬語あるいは待遇表現というものを、学習者に「いつから、どの程度に」意識させたり練習させたりするかは、教授法上の問題であり、学習者の学習条件や目的や能力等によって異なる。ただ、敬語というものを狭い意味に閉じこめておくと、教育上さまざまなソゴが生じやすいということを、まず知っておく必要がある。と同時に、強調しすぎると学習者に深刻な不安や混乱をひきおこすのもまた敬語的表現である、ということも知っておきたい。このことはまた、伝達能力と言語的能力とのバランスをとることが意外にむずかしいことを教えている。

5. 敬語は社会的・心理的なもの

敬語がどのようなはたらき（機能）を持っているかについては別に取り上げるが、少しだけ触れておきたい。

学習者もまた日本語に上達したり、接触する人間関係が広がってきたりすると、敬語を狭い意味に、特に respect language や honorifics という字面の意味だけに解釈しないほうがよいと気づくようになる。形式の問題にしても、「きみ、いそがしいだろうけど、これ、ちょっとやってくれないか」の「いそがしいだろうけど」や「やってくれないか」も、十分に〈丁重で、親愛な〉表現であることに気づくようになる。この〈丁重〉と〈親愛〉には、そこに敬語要素が使われていなくても、敬語を用いた表現以上に〈敬意〉を感じ取る学習者も少なくない。つまり、言語の形式よりも話者の真意（人柄）を感じ取る。にもかかわらず、〈敬意〉は「敬語」によって初めて表されるかのような印象を与える指導に陥りやすいために、学習者は敬語形式の選択にとまどい、いたずらに緊張感をひきおこす結果を招きやすい。

日本の大学を卒業し、日本の企業などに就職した外国人がしばしばもちあふことがある。「仕事のむずかしさや忙しさなどは、あまり苦にならない。一日の仕事が終わって、きょうは疲れたなと思うのは、たいていことばの使い方に緊張した日である」と。敬語の多さばかりでなく、ずばりと言わない気づかいの表現や婉曲的表現が多く、どのように判断し、どのように応答してよいか分からず疲れるというのである。学生時代の言語行動との差でもあるが、敬語指導にも多くの示唆を与えてくれる。学生時代には反敬語派の立場に立っていた日本人学生が、社会に出て二三年もすると、立派な敬語づかいになっていて驚くことも、めずらしくない。

いま仮に高いレベルまでの指導を考えれば、外国人が日本語にどれだけ上達しているか否かの判断は、いろいろな面からできようが、べらべらしゃべるのではなく、適切な敬語表現や気づかいの表現ができるか否かがもっとも確実な判断材料であるといえる。また、外国語で喧嘩ができれば大したもののだなどとはよくいわれるが、日本語ではこれに、敬語で喧嘩ができたり冗談や皮肉を言ったりすることができれば大したもののだ、ということをつけくわえたほうがいい。敬語を使って喧嘩したり冗談や皮肉を言うためには、言語的能力がしっかりしていなければならないことはもちろん、話し手は落ち着

いていて相手を客観視できる気持の余裕がなければならない。敬語はもともとある程度以上の緊張した場面が要求するものであり、その意味でも話し手の心理と深い関係がある。

このような心理は、社会規範としての敬語をうまく利用する能力となって現れ、しばしば、〈敬して遠ざける〉手段として、人間関係に無用な摩擦を起こさないようにも利用される。敬語は人と人とのあいだの社会的・心理的〈距離〉を表すというかなり普遍的な定義が有効なゆえんでもある。このような相手に対する評価的態度はまた話し手自身にも向けられ、敬語を使うことによってある種の品位や教養や威厳の持ち主であると誇示することもできる。現代敬語はこの傾向がはなはだ強い。

いいかえれば、敬語形式の使用は、コミュニケーションの手段としてよりも〈目的〉そのものに利用される傾向が強い。〈何を〉よりも〈いかに〉伝えるかに多くのエネルギーを使い、わたくし（話し手）はあなた（聞き手）と同次元に存在する者ではないという〈謹み〉や〈わきまえ〉の態度をあらわすと同時に、そのような敬語形式を使いうる能力の持ち主であるという自己の存在価値を主張していることもはなはだ多い。

また学習者は、日本語に上達してくると、敬語的表現と〈親切心〉とは無関係なことが多いことを、敏感に感じとるようになる。敬語なんか使うよりもはっきり言ってくれたほうがはるかに親切なのに、という思いである。つまり〈敬意〉と〈親切〉とは表裏一体のはずである、と解釈している学習者はけっして少なくない。したがって、敬語とは〈うわべだけの敬意〉、〈日本的社交儀礼〉と解釈するようになる。しかし、この解釈は現代敬語の本質をかなりの的確に突いているといえることができる。

もうひとつつけくわえれば、敬語使用はある程度以上の流暢さが要求される、という性質をもっている。まだたどたどしい日本語しか話せない段階で、いきなり「ゴザイマス」がはいったりすると異様に感じる。これは日本人の子どもの場合でも同じであり、小学校に上がったばかりの子どもが名前を聞かれて、教えられたとおりに「〇〇デース」などと答えるのを聞くと、ほほ

えましくもあり、おかしくもある。このことは、日本語教育において、敬語の教育が比較的にあとまわしにされてきたことと、けっして無縁ではない。近年しばしば強調される〈自然さ〉〈流暢さ〉は、けっして早くから身につくものではなく、それを要求するなら十分な学習時間と慣れが必要である。

以上のことは、敬語とは何か、丁寧さとは何か、という本質論と教育の現場とが無関係でないことを示している。

6. 敬語教育の目的と方法

敬語あるいは敬意表現に留意した教育は、なぜ必要なのだろうか。あるいは、どの程度必要なのだろうか。いくつかの回答や主張がありうるだろう。たとえば、

1) 敬語あるいは敬意表現は、日本人の通常のことばづかいそのものであり、それができなければ、日本語を習ったことにはならない。日本人のことばづかいについての価値観は、敬語表現にもとづく場合ははなはだ多く、話し手に対する人格判断に及び、仕事にも影響する。他の外国語でも大同小異だろう。通じればよいだけならば、組織的な教育など必要はない。

2) 敬語の必要性は認めるが、程度問題であり、聞きぐるしくない程度でよい。日本人が使うような複雑な使い方まで要求しても、土台むりなことであり、かえって学習意欲をそぐことになる。

3) 相手によることはもちろんであるが、一般にデス・マスが守られれば、それでよいのではないか。あとは個人の努力にまかせておいていい。日本人だって敬語を適切に使えない者がいくらでもいる。特に、外国人には寛容な態度が必要だ。敬語に対する執着を捨てることが、これからの日本人に要求されているのだ。

4) 高い敬語を要求する必要はないけれど、敬語はむずかしいときめてかかることが問題だ。教授法が未開拓だからだ。敬語使用のルール化がうまくできるようなれば、敬語はあとまわしという必要はなくなるはずだ。むずかしい文法項目、たとえば「ハ」と「ガ」だって、研究の進展のおかげで、ず

いぶんらくになったではないか。敬語についての頭の切り替えが必要なのだ。

5) 日本語教育には、望ましい日本語のモデルを示すという意欲的な未来志向がもっとあっていいのではないか。敬語の簡略化が望ましいものならば、そのモデルを示すとともに、それが現実と多少かけはなれていても、自信をもって教え、むしろ国語教育にはねかえることを期待してもいいのではないか。

ほかにもいろいろありうるだろうが、教師は自分なりの考えをもつことが要求される。こうしたことが要求されるのは、敬語は日本語そのものであると同時に、意味の伝達だけではすまないコミュニケーション上の特殊性も持っているからである。

先に外国語能力の項で触れたが、伝達的能力はその言語社会のなかに入って、その言語を使い、みずからの力で、生活上・仕事上の問題解決をはかる能力であると考えられている。従来支配的であった文型・文法中心の教育ではこの能力を養うのに適していなかったとされる。コミュニケーションの能力を養うためには、形式よりも内容を重んじることが大切であり、文法的誤りをあげつらうよりも通じることが大切だという考えである。したがって、学習者の表現欲求にかなうものを与えることに留意すべきだ、とされる。こうした考え方をもっともだと仮定したうえで、敬語的表現と非敬語的表現がはげしく入り混じっているように見えながら、全体として自然な統一体を形成している日本語はどう扱うべきであろうか。次のような考えがあるだろう。

日本人が日常使う表現ならば、場面を重んじながら、必要なもの、分かりやすいものから、順に出していけばよい。その結果、選択にまよって敬語のルール違反が出てきても、気にしないほうがよい。従来のように、言語的正確さにとらわれたり、長い間デス・マスを強制しているほうが、かえって不自然なのだ。使うことによって不適切な表現は修正していけばよい。

このような考え方も十分に納得できる。おそらく、このような考え方は次第に広がっていくだろうと思う。ただ、言いやすくして成りがたいのは、〈必要なもの、分かりやすいものから順に〉ということと、〈まちがいに〉どこまで寛容な態度をとれるかということであろう。寛容になりすぎれば教師の指導の意味はなくなる。実質的には一つの事柄を、さまざまな条件に基づいて、いくつかの形式によって表現し分けるのが敬語的表現であるとすれば、その〈表現し分ける〉ための語彙や文法や場面の指導がおのずと要求される。

また、成人に対する指導では、いくつかの段階で、指導項目の体系化が要求される。それを現実の用法と対応する形でまとめることは意外に困難である。たとえば、日常会話では先にあげた終助詞的な「が／けれど」や「から」などが頻繁に現れるからといって、むやみに提出するわけにはいかない。また、文末の「～ております」は「～ています」の丁重表現だとしても、連体用法の「～ている」を丁重語化するには「～ておる」にすればよいなどとはいえない。特に補文（埋め込み文）の敬語化は、どのような場合にどの程度必要か、あるいは必要でないかもまだよく分かっていない。敬意表現もまた初級段階から上級段階までの段階づけが必要であるが、敬意表現以外の項目の段階づけとの関係はかなりむずかしいものになると思われる。

母語話者の自然さを最初からそのままのかたちで外国語学習者に提供することには、それが敬語表現であれ普通の表現であれ、慎重でなければならないだろう。

II 外国人の見た敬語

日本語を外国語とする学習者に敬語を指導するにあたって、すでに日本語に上達した外国人は敬語をどのように見ているか、知っておくのは有益なことである。敬語の形式だけに目をうばわれることなく、日本人の表現意識がどのようなものであるかを、少なくとも教師は、日ごろから見きわめる努力が必要である。外国人の眼はこのことに役立つ。

以下に、アメリカ人、ドイツ人、中国人、および言語学者の体験例を紹介し、多少のコメントをつけくわえることにする。

1. アメリカ人：ドナルド・キーン「日本語のむずかしさ」

(梅棹忠夫・永井道雄編『私の外国語』1970)から

この著名な日本文学者は母語と系統の異なる外国語の学習はたいへんむずかしいと述べたあと、次のような例を挙げている。敬語というより日本語そのもののむずかしさである。

正しい日本語を話すという理想を持たない外人は日本語を勉強している学生よりも通じることがある。「アナタ、菓子、食ベル?」とたずねれば、相手の日本人はその発言の意味を聞き取れる。が、こういう原始的なカタコトから正しい日本語まで幾光年の距離があろう。

同じ内容の質問をする日本語の学生なら、いろいろ迷うだろう。「アナタ(しかし、相手が仲が好いからキミにしたらいいか、それとも山田サンのほうがいいか)、ハ(しかし、文章の主語になるからガのほうがいいかもしれない)、カシ(いや、カシヤというが、そこで売っているものはオカシだな)、ヲ(この場合、ガもいえるがどちらにしたらいい?)、タベタイ(いや、いくら友達だといっても敬語のほうがよさそう、メシアガルにしようか)、等々。」しまいに「あなたはお菓子が召しあがりたいですか」ときれいな発音で言えば、相手の日本人はもちろんわかるし、文法上の

誤りもなかろうが、自然な日本語よりも英語の直訳のように聞こえる。

「お菓子はいかがですか」と覚えるまで相当な時間がかかる。

ここには、学習者が日本語の文法・表現を獲得するさいに困難をおぼえる過程がみごとに圧縮されたかたちで示されている。文法中心の古い教授法からくる当然のとまどいだといってすますことはできない。成人の学習者であれば、いずれかの時期に、またいずれかの項目について、このようなとまどいを経験するはずである。教授法がどのようなものであれ、一度にすべてを教えることができない以上、表現の形式が複数ある場合の宿命的なとまどいであるといえる。

またここには、どれほど多くの敬語的要素がかかわっているか、一見して明らかであろう。これが敬語的表現の広さ、やっかいさである。日本語教育の現状は(少なくともこれまでは)、上記の例でいえば、「あなたはお菓子が召しあがりたいですか」の段階で、つまりある言語要素を敬語要素で置き換えることができればそれでよいとする段階で、しばしば止まっていたのではなからうか。「～たいですか」という希求疑問文は、そのはたらきからみると、いわゆる目上を主語としてはほとんど使えないものである。いや、目上にかぎらず、デス・マスのレベルで話しかけるような相手にはすでに使いにくいものである。一方「～はいかがですか」は、便利な文型の一つとして、早くからその意味・機能について指導されているであろうが、「～たいですか」との相互交換の可否についてまで、教師の眼が向いているとはかぎらない。

ある表現の基本的意味と実際の用法との間に大きなずれがあることはめずらしいことではない。説明ぬきで表現の形式とその基本的(辞書的)意味とをおしつけることはやさしいが、学習者の既知の項目と新しい項目とが衝突をおこした場合(その典型は類義語である)、いつ、いかなる場合に、いずれが適切であるかを理解させることはむずかしい。学習者の質問「どちらがいますか」「どっちのほうがいいですか」「どうしていけませんか」に、学習過程の心理的とまどいが如実にあらわれている。

日本語をきちんと勉強しない人のほうが「よく通じる」ことがあるのは、I章で述べた言語的能力と伝達能力の違いの例である。近年、外国語教育において「コミュニケーション」ということがさかんにいわれるが、「よく通じる」と「コミュニケーション」であることとを混同してはならないだろう。

2. ドイツ人：C.フィッシャー：シンポジウム「話しことばと話し方教育」

での発言から（『解釈』26-11、1980）

フィッシャー氏は、ゲルマン系、ロマンス系、スラブ系などの多くの言語を学んだのち、日本語・日本文学を専攻するようになった学者である。20数年日本語を習ってきたが、分からないことがたくさんあるといい、敬語について次のような感想を述べている。

一番の魅力は敬語のこと、そして、全部言ってしまうので相手に察しさせるという文章の省略です。これが日本人の、また、日本語の表現上の特長だと思います。私は、学生時代アルバイトとして通訳をしていましたが、「よろしく」とよくおっしゃるのには困りました。どう訳していいか分かりませんでした。

また、挨拶の言葉で、「今日は」「おはよう」にしても、その使い分けがむずかしい。そこへ「どうも」というのがあります。習慣のこともあれば、場面のこともあって、教科書どおりにはいきません。実際に日本に行ってみないと分からないものだということを体験しました。17年前に留学生として日本に来ました。ドイツでさんざん敬語のことは習っていました。1年間は敬語ばかりでした。しかし、日本に来て使ってみました。1年たっても友だちが全然できないのです。あとで分かりましたが、敬語というシャッターをおろしていたのでした。女の先生から教わった女性語の敬語を使っていて、変り者だと思われたらしいのです。日本語は男性女性両方の先生が必要だと思います。

フィッシャー氏の感想は多くの学習者の述べる感想と同じものである。ことばのちがいが国民性や発想法のちがいを反映していることは、古くから言われてきた通りであろう。「全部言ってしまうので相手に察しさせる」ということも、日本人にとってはごく日常的な経験である。したがって、会話指導などにおいても、一見不完全な文が自然な文として、文法に則ったものとして指導される。話しことばへの関心は、言語研究の進展やコミュニケーション能力の養成という外国語教授法の目的論の台頭とともに、次第につよくなってきている。「相手に察しさせる」や「省略」という説明が妥当なものであるかどうか議論の余地があろうし、今後の研究にまたなくてはならないであろうが、日本人には感覚的に理解されることである。主述関係や因果関係の完全なかたちを重んじるヨーロッパ語と比べれば、「察し」や「省略」という説明は、説明自体としてはむしろ分かりやすいのかもしれない。しかし、「察し」や「省略」のまるでない自然言語もまた考えられないであろう。

日本へきて友だちができなかったのは、敬語というシャッターをおろしていたからだという説明は、おそらく不十分なものだろう。女性語をどのくらい使ったかは分からないが、デス・マスを初めとしてかしこまった言い方ばかり多かったのにちがいない。敬語自体がシャッターなのではなく、相手や場や話題に応じた日本語の使い分けが不十分であったからであろうし、なによりも日本人の人づきあいのあり方に対する理解の問題であろう。丁寧なものいばかりすれば相手との距離が縮まらないのも事実である。しかし、くだけたものいばかりすれば、かえって警戒心をひき起こすことになりかねないのもまた日本人である。親しい間柄＝くだけたことばづかい、と思いこんでいる学習者は意外に多いが、丁寧なものいとくだけたものいとの往復作業が必要なのである。くだけたものいをするれば、はやく友人関係ができあがると思って失敗する例はよく耳にする。一方、ことばづかいのへたさかげんが日本人にご愛敬をもって迎えられるのを、友だちとして受け入れられたと勘違いすることがあるが、気の毒なことである。友人関係や信頼関係の

成立には、ことば以外の他の要素も重要なことはいうまでもない。日本語教育には文化論的アプローチも必要なことをおしえている。

日本語の教師には男性・女性両方必要だという指摘は当を得ていると思う。日本語における男女のことばづかいの差は、ほぼ話しことばに限られているとはいえ、母語話者である日本人の感じるところよりずっと大きく、日本人も互いにものまねでしか扱えないものといって過言ではない。形式のちがいが待遇価値のちがいと同列に論じられないのが、日本語の男女差だといえる。女性の学習者もまた一般に日本語の女性ことばを獲得したいという強い欲求をもっているが、自然なことであろう。デス・マスという文体の採用は、この男女差をおおいかくす制服の役目も果たしている。

3. 中国人：王秀文「敬語よ、くたばれ——外国人の体験的日本文化論——」

(『国際交流基金創立十周年記念論文集』、1982)から

王秀文氏は若い日本語教師である。この論文の冒頭で、氏は中国で敬語を習ったときの経験(「私はお思います」)と、日本語を習い始めて9年目に初めて来日して日本人の言語行動に接したときのとまどい(「すみません」)とを語っている。長くなるが興味ぶかいので引用する。

①「私はお思います」

……私は外国語というものは文法と単語の組み合わせにすぎない、それを一応マスターすれば外国語はこなせるのだ、そう考えるようになった。

それが間違いだと気づいたのは、日本語の敬語を習ったときである。先生は何が尊敬の敬語か、何が謙譲の敬語か、何が丁寧の敬語か、敬語の概念と敬語の文法をまず説明して、それから例文を黒板にあげながら、敬語の接頭語・接尾語、敬語動詞、敬語の補助動詞などについてその種類と使い方を教えてくれた。私は例によって教わったことを丸暗記した。いままでの例では、授業で習ったことはその日のうちに暗記し、練習して次の日の授業で例文を応用して文が作れた。しかし、今度はそうはい

かないのだ。覚えた例文しか話せず、応用がまったくできないのである。

「私はお思います」などのようなとんでもない文を作ってしまうのだ。

その原因は、いうまでもなく敬語の文法が他の文法より複雑なばかりでなく、その使用法がいろいろな社会的人間関係と結びついていることにある。(中略) 敬語ばかりではない。「もし皆さんがよろしかったら……したいと思いますが」、「私は今日……することになっています」というような日本語の文末につく「……が」「……になる」などの表現にもなじめなかった。明らかに自らの意志を表そうとするのになぜ率直に言わずにこんなもってまわった言い方をとるのか理解できなかった。また、「そう思われる」「そう考えられる」のような自発を表す「れる」「られる」の使い方もそうだ。私には何となく責任逃れの言い方のように感じられた。中国語は自分が相手に言いたいことをズバリといってしまう言語であるから、私はこうした日本語の言語行動をとることがなかなかできなかった。……………

②「すみません」

……日本についた翌日の朝、空港前のある食堂で、日本で初めての食事をした。食べ終わって出る時、ウェイトレスがみんな丁寧に「ありがとうございました」と言うのだ。そこで私も丁寧に「ありがとうございました」と同じことばをくり返して礼を返した。店の人が外国人を歓迎する意思表示かと思った。しかし他の日本人の客にもそうしている。どうもそうでもなさそうである。それに他の客は礼を言われても特に気にとめず、だまっただま店を出ていくではないか。中国では、礼を言うのは普通客の方だし、礼を言われれば礼をもって返すのが常識であるのだ。(中略) 当初、道をたずねることがよくあった。迷惑をかけるのだと思って、いつもできるだけ丁寧な言葉をさがして使ったが、相手は意外に私よりも丁寧な言い方をもって答えてくれる。相手も分からない場合、何と「すみません、……」と言って謝りさえするのだ。迷惑をかけられて詫びてくるとは何と不思議なことではないか。私はその後、よく日本人の言動

をみていたが、日本人が実によく「すみません」を使うことがわかった。自分が悪くなくてもそう言う。ことばだけでなく、表情にまで謝る気持が表れているのである。

私はこんなことを何度と経験しているうちに、日本人の言動が少しずつ理解できてきた。道をたずねられて答えられずに「すみません」というのは、おそらく奉仕できない気持から出るであろう。店の人が「ありがとうございました」というのも店を利用していただきたいという気持の表現であることがわかった。日本人の言語行動は他人を中心にして行われることがわかってきた。私は一応こうした言語行動を「他人本位」の言語と呼ぶことにした。

日本語の学習過程における敬語のむずかしさの例と、日本人の言語行動が異文化を背負う人びとに違和感をあたえる典型的な例とが、うまく表現されている。「私はお思います」という誤用例は、一例であるとはいえ、敬語研究(「お～する」の文法と意味・機能)の不十分さが日本語教育に反映している例であるし、「～が」や「～ことになる」や「～(ら)れる」の意味・用法についても、国文法的な記述だけでは外国人に説得力がよわいことを教えていると思う。「ありがとうございました」や「すみません」という日常的な感謝や詫びのことばも、日本の言語社会では、いつ、だれに使うかと、いつ、だれに使わないかを同時に考えて指導に生かす必要のあることを示していよう。王氏とは逆に日本人が中国でショックを受けることもよく知られている。こうした言語行動の研究は、それが無意識的なものであればあるほど、異文化との対比による考察が役にたつものになるのが普通である。

4. 言語学者：J.V.ネウストプニー『外国人とのコミュニケーション』

(1980)から

チェコスロヴァキア出身のこの言語学者は日本語学の専門家でもあり、日本人なりに日本語を使いこなすことができる。敬語についての著作も多く、

教授法にも強い関心をもっている。上記の著作で氏は、外国人の敬語学習の問題点をいくつも指摘している。いずれも教師が知っておかなければならない事柄である。まず、「敬語の役割」という項で、つぎのように指摘する。

初級や中級の日本語学習者のていねいさの問題は、敬称、あいさつ、エチケットなどのルールが基盤になっているが、上級の能力を持っている話し手の場合には敬語の役割も大きくなる。つまり、学習者の能力があがると同時に、それまでは問題にされなかった敬語への違反が目立ってくるわけである。

敬語の使い方から見ると、外国人には、二つの極端なタイプが認められる。一つは、いわゆるデス・マス体さえも使えず、だれに対しても「いくよ」とか「いくの?」としか言えないグループである。いわゆる尊敬語——「いらっしゃいます」「お帰りになります」など——は、まったく使えない。このタイプは、日本で日本語を話せるようになった若い人に特に多い。

もう一つの極端は、敬語を明らかに使いすぎるという外国人である。親しいことは使いをしていいような関係でも、「いらっしゃいますか」をくずさない。あるいは、必要がないのに、非常に高い敬語、たとえば「ございます」「存じあげます」などを使いまくる人がこのタイプに入る。むしろこの二つの極端の間に多くの中間的な段階もあるが。

メルボルンの話である。三日前に日本から帰ってきた若い女性が、パーティで帰ろうとしている日本人の客員教授に「アナタ、モウカエルノ?」と聞く場面があった。この先生は息切れして、椅子をさがし、座ってから、一緒にいた私に「通訳」をもとめた。夢だと思って、信じられないのである。

ちなみに、この教授は、以前、外国人に敬語を教える必要はないという主張をもっている1人であった。このような意見は、教師と学習者の間に、インフォーマルであたたかい人間的な関係を確立したいという気

持から出発していると思われるので、決して悪い意図ではない。しかし、その結果、教室を出た瞬間に学習者はこまる。……

初級から上級まではばびろく、かつ、いろいろな言語文化を担う学習者を長いあいだ扱ったことのある者なら、ここに指摘されたような事例にぶつかった経験もかならずあるにちがいない。上記の引用は、四つのことを教えていると思う。

- ① 初級・中級段階では、デス・マス体をしっかり身につけさせること。学習者の能力が上がり、話す場合でも書く場合でも、流暢の度合いが増すと敬語の適切な使い方が要求されるようになること。これは、日本人の日本語に近づくからである。
- ② 日本で日本語を学ぶさいに、適切な指導を受けないと、特に若い学習者はいわゆるインフォーマルな話し方——友だちことば——ばかり身につけやすいこと。これは、言語環境の影響であり、若い学習者の吸収力を示すとともに、外国人には母語話者が持っていることばづかいに対する価値判断までは、教わらないかぎり、なかなか分からないものであることを示している。
- ③ 高い敬語を使いすぎる学習者もまた、日本語における敬語の役割を知らないからであること。おそらくこれもまた、教授者の説明が適切でなかったか、敬語の美的側面あるいは教養的側面だけの理解からぬけだしていいことを示している。一種の誤解である。
- ④ 教師は学習者に期待することばづかい、特に敬語について、自分なりの考え方をしっかりもっていること。観念としてではなく、現実の問題として、丁寧すぎたりぞんざいすぎたりしないことばづかい、つまり日本語社会にできるだけスムーズに入れることばづかいとは何かを客観的に見る努力が要求されていること。

さらに、ネウストプニー氏は「敬語という壁」の項で、外国人の中には、敬語を社会的不平等のあらわれと考えて使用を拒否する例のあることを指摘した上で、次のように述べている。

……外国人のこのような態度は、敬語を一方的に「目上」という概念で説明し通そうとしている日本語の教材に強く支えられているのである。

キャスリンという私の学生も、このような反敬語派に属していた。日本語がよく話せるが、デス・マスを少しまぜる以外は、敬語を使わないから、「なまいきな若い外国人」という印象が強い。しかし、英語に切りかえると彼女は非常にていねいで、育ちのいい若い女性に変身する。しかも、大学の習慣にしたがい、彼女は私を Professor と呼び、自分自身はキャスリンと呼ばれるが、この明らかに「不平等」な呼び方——自分より大分年上の先生を名前で呼ぶことはもちろんできない——には、彼女はまったく抵抗を感じない。日本語の敬意表現と英語の敬意表現への態度に大きな矛盾があることには気がつかないわけである。(中略)

また、いつも「ていねい体」を使い、相手が普通体を使っても、デス・マス調をくずさない外国人は、フォーマルすぎて、親しくなりたくないのだと思われがちである。

ここにも、敬語について教師にも学習者にもよくありがちな誤解が指摘されている。筆者もまったく同様な経験を何度もしているので、次のようにまとめておきたい。

- ① 敬語は封建社会の遺物であり、これを使うことは人間の不平等を是認することになるから、使うべきではない。このように思い込んでいる学習者をつくりだすのは、教師や教材にその責任の大半がある。
- ② 日本語の敬語について不快感をあらわにする学習者には、自分の母語に日本語のような敬語形式がないからという理由だけで、自分の母語に

ある〈敬意表現(丁寧表現)〉には気がつかない者がしばしばいる。

①についても、②についても、欧米系の学習者に多いように思われる。②については母語に語彙レベルでの日本式敬語をもたない学習者の多くがそうである。歴史と文化をもつ言語なら、人称やタイトルにさえも敬称のない言語はまずないであろうが、そのことよりも、母語においても相手や場によって、丁寧な表現とそうでない表現とを使い分けていることには気づいていない場合が多いことは事実である。学習者にこのことを指摘すると、日本語の敬語の見方が変わってくることもよくある。いたずらに「敬語」ということばを使うのではなく、同じ「丁寧表現」の日-外の差異という観点も大切である。

ただ、①②の学習者の意見について多少割り引いて考えなければならないことは、敬語の習得のしにくさを封建時代の遺物のせいにしている場合もないとはいえないことである。外国人にとって敬語がむずかしいことは事実だが、日本人にとっても人称や数や性や時で形態的にはげしく変化する言語は相当に習得しにくいものであるし、いつ、どの程度の丁寧さがふさわしいかも、かならずしも分かりやすいものではない。

敬語が越えられないほどの壁ではないことは、当のネウストプニー氏自身はもちろん、多くの事実が示している通りである。さきに紹介したキーン氏は、別の著書で、自分にとっては友人同士で使うような、ぞんざいなことばづかいのほうが苦手であり、丁寧すぎると文句をいわれることもあるが、子どもの時から日本語を話してきたわけではないから、かたぐるしい日本語を使うほうが楽であると述べている(キーン1983)。

なお、日本人の英語が、たとえば英米などへの留学生の英語が、教授やその奥さんに対しても友だちことばしか使えず、眉をひそめさせることが少なくないと指摘されることも知っておいてよいことだろう。日本語学習者の場合であれ、英語学習者の場合であれ、外国語教育は通じればよいとだけいってられない面の大きいことも忘れてはならない事実である。

5. 「丁寧でない言い方」の重要性

ここまで敬語ないし丁寧表現について、その必要性のようなことばかりを取り上げてきたが、学習者によってはそれだけでは決して満足しない人のいること、それどころか、いわゆる丁寧な言い方ばかりの教育では、日本語理解に支障をきたすと主張するひとのいることもつけ加えておかなければならない。

日本に長年滞在し、日本語に上達しているアメリカの実業家・作家のJ.スワード氏は、その著『スワードさんの日本語ノート』(1976)のなかの「丁寧か、丁寧でないか」の章で、日本語における丁寧な表現の重要性を十分に認めつつも、日本人は外国人が丁寧でない表現も教えてくれるように要求しても、丁寧な表現しか教えてくれないといって、強い不満を表明している。スワード氏の意見を要約すると次のようである。

- 1) 日本語をむずかしくしている一つの理由は、外国人が日本人とは逆の不自然な順序で日本語をおぼえるからだ。つまり、日本の子どもたちは丁寧でない言い方からおぼえるが、外国人は丁寧な言い方からおぼえる。ところが、一般の日本人はそのほうが分かりやすいだろうと思って、われわれが子どもであるかのように(子どもことばで)話しかけてくる。理解を助けるつもりだろうが、かえって分かりにくい。学校教育では時間がないから日本の子どもがたどる段階をくりかえすわけにはいかないだろうが、語学教育の全時間にわたり、もっと丁寧でない形式に力をいれる必要がある。その丁寧でない言い方を、いつ使ってもよいか、いつ使ってはいけないかを指導すべきである。これがないから、学習者は自分の母語文化に照らして、はやく日本人と親しくなるためには丁寧でない言い方のほうがよいと思い、大失敗をすることがある。
- 2) 日本人は「丁寧」と「丁寧でない」とを、よいとわるいの同義語とみている。外国人が日本語学習の過程で、丁寧でない言い方を覚えたり実行

したりする機会を、善意からであろうが、否定する。そのため、将来丁寧でない表現を聞かされたり自ら使いたいときが生じても(そういう機会 はかならずある)、事実上それに対処できなくなっている。聞いても教えてくれないことが多い。外国人といえども日本人の生活のあらゆる面を理解しようとしているのだから、よいことばもわるいことばも必要なのだ。日本で生活するのに、いわゆる「立派な」人だけに会い、教養ある友だちとだけ「お茶屋」で茶をすすり、「お茶わん」の質と年代とを丁寧につぶやいたりしてはいられないのだ。

ここには、日本語教師はもちろん、一般の日本人が反省すべき点が多々ふくまれていると思う。

1) は、教授法にかかわる問題である。学習の初期から、フォーマルな言い方とインフォーマルな言い方とを同時に提出するのがよいかどうかは、学習の条件や目的や効果についての考えかたによって異なるだろう。しかしすでに、教科書によっては、おぼえて使う表現形式としてデス・マスの体と、聞いてわかればよいダの体(女性特有の表現形式も含めて)とを人間関係に配慮しながら最初から提出しているものもある。とくに日本で日本語を習う場合には必要なことである。けれども、この場合学習者に混乱した言い方が出てくるとは、ほぼ避けられないことであり(日本の子どもの場合も同じ)、それに対する教師の態度や指導方針の確立が要求される。スワード氏が指摘するように、フォーマルな言い方ばかり教えることは、現実から遊離していることであるが、同時に、インフォーマルな言い方にウエイトをおくことは、さきのネウストプニー氏のあげた例のように、つねに危険をとまなう。教授法や日本語についての考え方の確立が要求されるところだろう。

2) は、日本人の対人意識とそこにまつわる言語待遇についてのイデオロギーがよく示されている。これは教授法の基本にかかわる問題である。〈外国人だから〉という理由だけで、ぞんざいな、あるいはインフォーマルな言い方を〈つねに〉認めたがらないとすれば、ここには、日本人どうしの対人意識

の特徴が、たまたま外国人を相手にして(つまりヨソ者を相手にして)、典型的に現れたものとみるべきであろう。日本人どうしは、たとえ初対面であっても、とくに改まる必要のないかぎり、丁寧体と普通体とをかなりはげしく交流させているが、どちらかにウエイトをおきつつ、全体としては自然な統一体をつくっているのが実態である。丁寧さの中庸をとるとき、これが日本人の戦略性なのである。日本人の対人行動とことばづかいの関係を明らかにする必要を教えていると解釈すべきだと思う。ただ、現実には混用されているからといって、指導上もそのままいいとはいえない。教育文法化という整理が必要である。

この対人行動のうえで学習者をとまどわせるもっとも端的な例は、サービス業者の敬語に対する客側のことばづかいである。学習者は、たとえば店員に「ありがとうございました」といわれれば、「どういたしまして」と答えなくなる。あるいはホテルで、「どういう部屋をお求めでございますか」と聞かれれば、「シングル・ルームでございます」と答えなくなる。学習者は、それが礼儀であると理解することが多い。この傾向は敬語を習いはじめた段階にしばしば見られる。いわゆるサービス業にたずさわる人びとの客に対することばづかいは、通常の場合とはまるで遊離したものである。客はそれに合わせる必要はないのだということを、日本における「サービス業対客」の言語行動の特徴ということで具体的に説明しなければならない。

III 諸外国における敬語行動

前章で外国人の敬語体験の例を紹介したが、諸外国の敬語や敬語行動の実際はどのようなものであるか、先行の研究を少し紹介する。

諸外国語の敬語や丁寧表現、あるいは男女のことばづかいの差の研究が次第にさかんになってきていることは、一般言語学や社会言語学あるいは文化人類学等の専門誌から読み取ることができる。諸外国語の敬語のまとまった紹介としては、林四郎・南不二男編『敬語講座⑧ 世界の敬語』(1974)に、朝鮮語、チベット語、ジャワ語、ベトナム語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、スラブ語の9言語が、『岩波講座日本語4 敬語』(1977)には、朝鮮語、中国語、英語がおさめられている。大杉邦三『英語の敬意表現』(1982)は大量の資料にもとづいた有益な大作である。『研究資料日本文法⑨敬語法編』(1984)には小泉保「外国語の敬語」がある。西田直敏『敬語』(1987)の中の「世界の敬語」には以上をふくめて過去の研究の概略がまとめられている。森下喜一・池景来『日本語と韓国語の敬語』(1989)も便利な参考書である。また1988年から刊行が始まった『言語学大辞典』(全6巻)の「世界言語編」(4巻)には、約3,500の言語が取り上げられることになっているが、既刊の第一巻・第二巻だけを見ても、多くの言語に対人関係に配慮したいろいろの待遇表現のあることがわかる。

一方、世界の敬語使用の普遍的原理を追究しようとする研究もいくつか見られる。その代表的なものは、Brown and Levinson Politeness: Some universals in language usage(1987)で、〈丁寧さ〉を人間関係をスムーズに維持するためのコミュニケーションのストラテジーと見て、敬語行動の詳細な枠組みを提供している大著である(すこしくわしくはV章で紹介)。

また、近年は日本語と外国語との対照研究もいくつか見られるようになった。ここでは、日本で発表された対照研究で、日本語教育にも直接役に立つと思われる主な例を紹介することにする。こうした研究を参考にするとき大切なことは、日外の差よりも類似点を見出だすことにつとめることである。

1. 世界の敬語の類型

世界の敬語を分類したものの中で、ネウストプニー(1974)は理論と実際からきわめて簡潔に類型化している。世界のコミュニケーション体系を見ると、日本語の敬語に非常に近いものから割合に遠いものまでいろいろあるとして、まず、狭義の敬語形式の有無から見た場合の比較を表に示しているが、表からたとえば、マズラ語(東ジャワ)には、日本語のような丁寧語、つまり普通体と丁寧体の区別さえあることが分かる。また、日本語、マズラ語、ヒンディ語の敬語の用法は、多くの場合、非相互的 non-reciprocal であるのに、フランス語、ドイツ語、チェコ語の場合は原則として相互的であるという。つまり、話し手と聞き手が目上と目下のような場合、相互に同じ語形が使えるか否かである。しかし、〈親しい〉ことばづかいを始める権利は、いわゆる目上にあり、目下にはないという。

ネウストプニー氏はさらに、「敬意」とは、社会的コミュニケーションのなかで守られるべき距離であることと、その距離にいくつかの種類があることを述べ、表1のように、敬意表現はなにを意味しているかを示している。

表1 敬意表現の意味する種々の距離

1. 特定個人間の距離：尊重～社会層間の距離：礼法	
2. 身分的距離	～連带的距離
(a) 身分的距離しか表現しないシステム	
(b) 主に身分的距離を表現するシステム	
(c) 主に連带的距離を表現するシステム	
(d) 連带的距離しか表現しないシステム	
3. 与えられた距離	～得られた距離
4. 登場人物との距離：尊敬語～場面の人物との距離：丁寧語	
(a) 登場人物との距離しか表現しないシステム	
(b) 場面の人物との距離しか表現しないシステム	
(c) 登場人物との距離も、場面の人物との距離も表現するシステム	

表中の1の「尊重」と「礼法」は、Goffman(1956)の“deference”と“demeanor”の概念に相当し、敬意は実質的な行為ではなく、情報的な目的しかもたない行為であるとする。尊重は一定の相手を前提にしているのに対し、礼法はあるルールが守られたからといって、一定の相手への敬意を表すわけではない場合である。尊重的な敬語とは、たとえば、目上が親しい人への一定の表現を使うような場合であり、礼法的な敬語とは、たとえば、フランスの貴族がだれに対しても、家族に対してさえも、vousを使うこと、あるいは日本の「ごあます夫人」がほとんどだれに対しても特別丁寧体を使うことなどであるという。

2の「身分的距離と連带的距離」、つまり身分の敬意と連带的敬意は、直接的には Brown and Gilman(1960)におけるヨーロッパ語の人称代名詞の研究に基づくものであるが、世界の敬意表現の伝える意味は、上下関係よりはるかに広いものであることを示す。すなわち、ヨーロッパ語の敬語は power(力関係、上下関係)と同時に solidarity(連帯関係)/intimacy(親疎関係)を表現しているが、この見方はひろく諸言語に应用することができると見る。身分的敬意と連带的敬意とが同じ社会システムの中であらわれるのは、共に〈社会的距離〉に関係しているからだとする。

モンゴル語は、身分的距離を表現し、連带的特徴を表現しないシステム(a)に属し、マズラ語は、おもに身分的特徴を表現するが、ある程度連带的特徴も表現するシステム(b)に属する。日本語は、おもに連带的特徴を表現するが身分的特徴もまざっているシステム(c)に属し、現代ヨーロッパ諸語は、連带的特徴を表現するシステム(d)に属する。ただ、いずれの場合も、親しさや連帯感の考え方は各言語によって異なると見る。

3の「与えられた距離と得られた距離」は、出身にもとづく帰属的身分と、業績の結果にもとづく獲得的身分による敬意表現の違いである。帰属的敬意はいわゆる〈絶対敬語〉として現れやすいが(たとえば、国王と臣下)、本人がその場にいないなどの場合には、敬意表現も変わりうる。反対に獲得的敬意は、同一人物であっても獲得された社会的身分や役割に変動があれば、敬

意表現も違ってくる。

4の「登場人物との距離(尊敬語)と場面の人物との距離(丁寧語)」とは、主に話し手と聞き手との関係による丁寧さと、登場人物の関係にもとづく尊敬とを示す。丁寧さの基本は、言語行為そのものの参加者と場面などにより、尊敬の基本は、登場人物としての参加者と場面などによる。主語が二人称の場合は、しばしば、聞き手と登場人物が一致する。聞き手が登場人物になる場合は、その限りにおいて、尊敬の対象になるが、登場人物でない場合は、尊敬の対象にはなれない。

以上のような考察から、ネウストプニー氏は世界の敬語を次のような4種に分ける。

- (a) 相手敬語しかないことば：多分存在しない。(ただし、タイ語のうち王族に対する特別な語彙使用はこの性格をもつといえるかもしれない)
- (b) 登場人物敬語しかないことば：あったとしてもきわめて少ないだろう。モンゴル語はその一例かもしれないが、たしかではない。
- (c) 登場人物+相手敬語のことば：日本語、朝鮮語、ジャワ語など。
- (d) 相手=登場人物敬語のことば(相手と登場人物が同一の場合だけ)：ほとんどの現代のヨーロッパ語。

ネウストプニー氏は、さらに、世界の諸言語の敬意表現の意味を歴史的にみると、表2が仮定されるという。この表にしたがえば、日本語の敬意表現のありかたは、世界の敬語のなかで、より伝統的でもより近代的でもなく、その中間段階、あるいははげしく混ざりあっている段階であると考えられる。

表 2

←より伝統的	より近代的→
言語的表現	非言語的表現
尊重	礼法
身分	連帯
帰属	獲得
登場人物	相手

(この中間に種々の程度の組合せがある。)

しかし、後で見るように、現在の日本人の敬語行動は、敬語形式に伝統的な制約を多く残しながらも、その意識は相当な程度まで近代的な傾向を示していると考えられる。

ところで、日本語による敬語行動に違和感をもつ学習者は、自分の母語ではどのような敬語行動を行っているのだろうか。母語による敬語行動には気づかない場合のあることを第II章で紹介したが、どの言語においても、対人関係や場面に応じて、ことばづかいに〈丁寧さ politeness〉の差異があることは、指摘すればすぐわかるはずである。

ただ、通常、日本語の敬語や敬意表現を、「敬」の字にとらわれて、狭義に解釈する傾向が強いので、語彙的に敬語形式をもたない言語の出身者には、たとえば英語などの “polite expressions”、あるいは言いまわしによる敬意表現との異同に注意させる必要がある。どのようにオーバーラップしているか、あるいはしていないかに、目を向けさせることは有効である。この場合も、まず対人関係とことばづかいの差に注意を向けさせることが分かりやすい導入となる。

以下に、これまでの研究にもとづいて、アメリカ人および韓国人の場合を中心に簡単に紹介する。英語は日本語とかなり離れている言語であり、韓国語・朝鮮語は日本語とかなり近いと考えられている言語である。敬語行動においても果たしてそうであろうか。

2. 日米大学生の対人意識

くわしくは次章で取り上げるが、日本人の対人行動はウチ・ソトの境界が比較的にはっきりしていて、そのそれぞれに上下、親疎等がからみあっており、それが敬語の使用・不使用と密接に結びついていると考えられているが、一般に日本人とかなり違う行動様式をもつといわれるアメリカ人の場合は、対人関係とことばの使い方との関係をどのように理解したらいいのであろうか。

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子『日本人とアメリカ人の敬語行動——大学生の場合——』（1986）では、日米の敬語行動の比較研究のため、両国の大学生それぞれ約500人にアンケート調査を行い、表現の丁寧度からみた話し相手の人物カテゴリーの位置づけを試みている。この調査では、表3のような各種の人物カテゴリーを提示して、「最も改まった態度で接する人／the person to whom your attitude is “most careful”」と、「最も気楽な態度で接する人／the person to whom your attitude is “most uninhibited” (most relaxed)」とを回答するよう求めている。

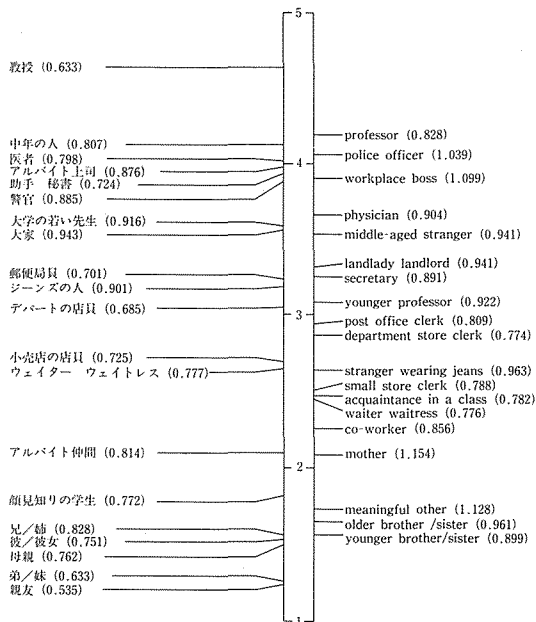
表3 話し相手の人物カテゴリー

(井出、他 1986より)

日 本	アメリカ
A. 指導教授(あるいはよく接する教授) [研究室で]	A) The professor who is your academic adviser, in his/her office
B. きちんとした服装の中年の見知らぬ人 [郵便局の行列であなたの後に立っている]	B) A middle-aged, well-dressed stranger standing behind you in line at the bank
C. 医者 [診療室で]	C) A physician in his/her office, after an examination
D. 大きなデパートの店員	D) A clerk in a large department store
E. 下宿やアパートの大家さん [家賃を払う時]	E) Your current landlady/landlord presenting a lease for renewal
F. 色あせたジーンズをはいた人 [郵便局の行列であなたの後に立っている]	F) A stranger wearing faded-blue jeans, standing behind you in line at the bank
G. 警官 [交通違反で捕まったとき]	G) A city police officer issuing you a parking ticket which you know you deserve
H. 研究室の助手または秘書 [教授の都合をきく時]	H) Your department secretary giving you an appointment with a professor
I. よく行く小売店の店員	I) A clerk in a small store at which you shop regularly
J. 弟/妹 [家で話をしている時]	J) A younger brother/sister with whom you're talking at home
K. 顔見知りの若い大学の先生 [図書館のロビーで]	K) A younger professor with whom you have a small class, who is sitting with you in the department lounge
L. アルバイト先の仲間	L) A person who works with you at your regular/parttime job
M. よく行く喫茶店のウェイター/ウェイトレス	M) A waiter/waitress at the place where you go most often to have coffee
N. アルバイト先の上司	N) Your workplace supervisor/boss on the job
O. 兄/姉 [家で話をしている時]	O) An older brother/sister with whom you're talking at home
P. 顔見知りの学生 [授業前の教室で]	P) An acquaintance in a small class you attend, while you're waiting for class to begin
Q. 郵便局の窓口の人	Q) A clerk in a post office
R. 親友 [あなたの部屋で話をしている時]	R) Your "meaningful other" (spouse, lover, etc.), talking in your room / apartment
S. 母親 [家で話をしている時]	S) Your mother with whom you're talking at home
T. あなたの彼/彼女 [あなたの部屋で話をしている時]	

また、もっとも気楽な態度で接する相手を丁寧度1、もっとも改まった態度で接する相手を丁寧度5として、そのあいだを4等分して回答させた結果にもとづいて、丁寧度の点を平均して図表化した図（図1）を掲げている。

図1 相手の人物カテゴリーの丁寧度の平均値の標準偏差



この比較研究から、丁寧度から見た各人物カテゴリーの分布の特徴について、「日本では「親友」から「教授」まで、5段階の目盛り上に幅ひろく分布しているが、アメリカでは分布の幅が比較的せまい。これはアメリカ人の間で各人物カテゴリーに対する接し方がまちまちである（個人差が大きい）からであろう」と指摘している。

また、両国の人物カテゴリーを丁寧度の低いほうから高いほうへ配属すると、日米ともに、

家族や親しい友人 → 友人 → サービス業 → 目上
→ 社会的地位の高く力のある人

と「ほぼ同じような順序」で並んでいるとしている。この並行性の指摘はたいへん興味ぶかい。

では、日米で異なる点はなにか。調査グループはつぎのような解釈を示している。

- (1) 日本では「母親」が「彼／彼女」「兄／姉」と同じくらい気楽な相手に入っているが、アメリカではそれほど気楽ではない。これは一つには日本の母子関係の親密さに原因があらう。
- (2) 日本では「中年の人」には「医者」よりも丁寧度が高く、全体で二番目に丁寧に接する相手であるが、アメリカでは“police officer”“workplace boss”“physician”に対するほうが丁寧で、丁寧度の順の五番目である。一方アメリカでは“police officer”が二番目だが、日本では「警官」は「中年の人」に次ぐ三番目のグループに属する。この逆転は、アメリカ人はその場その場に応じた力の関係で丁寧度を決める傾向があるので、交通違反でつかまっているという自分が弱い立場であることが明確な“police officer”に対しては丁寧度が高く、力関係が不明の“middle-aged stranger”には低くなるからであろう。一方日本では、たとえ見知らぬ人でも

自分より年配であり、かつ「きちんとした服装」ということから「中年の人」は「改まった態度」で接する相手とみなしていると考えられる。一般にアメリカは動的關係、日本は静的關係で丁寧度を決定する傾向があるのではないか。これはまた、日本語の「改まった」と英語の“careful”という用語の違いにも一因があるのかもしれない。

3. 日米大学生の敬語行動

前記の日米大学生の対人意識の段階づけの基となったことばの使い方については、その丁寧意識はどのようなものであるか。引きつづき、井出、他『日本人とアメリカ人の敬語行動』（1986）の内容を紹介する。

だれから「ペンを貸してもらいたい時」の表現を例として、「もっとも改まった態度でいる時に使う表現／when you were being most careful in your speech and behavior」と「もっとも気楽な態度でいる時に使う表現／when you were being most uninhibited(relaxed) in your speech and behavior」として選ばれた表現を、その回答数の多い順に示したのが表4と表5である。

表4 最も改まった態度でいる時に使う表現（井出、他 1986より）

日 本	アメリカ
お借りしてもよろしいでしょうか	May I borrow
貸していただけますか	Would you mind if I borrowed
貸していただけますか	Would it be all right if I borrowed
お借りできますか	I was wondering if I could borrow
貸してもらえませんか	Could I borrow
貸していただきたいんですけど	Can I borrow
貸してくださいませんか	Do you have a pen I can use
貸してください	Do you mind if I borrow
貸してくれませんか	I wonder if I could borrow
ペン	Would you lend me
貸して	Can I use
いいですか	Do you think I might borrow
使っていい	Is it all right if I borrow
貸してほしいんですけど	Could you lend me
貸してくれる	Can you lend me
借りていい	Let me borrow
貸してよ	Can I bother you for a pen
	Gimme
	Lend me
	Can I steal
	Got a pen I can use

表 5 最も気楽な態度でいる時に使う表現 (井出、他 1986より)

日 本	アメリカ
貸して	Gimme
いい	Can I use
ある	Can I steal
ペン	Can I borrow
貸してくれる	Let me borrow
借りるよ	Could I borrow
借りていい	Lend me
貸してよ	Got a pen I can use
使っていい	A pen
貸していただきたいんですけど	Do you have a pen I can use
いいですか	Can you lend me
貸していただけますか	Would you lend me
お借りしてもよろしいでしょうか	May I borrow
貸してほしいんだけど	Can I bother you for a pen
貸してください	I wonder if I could borrow
貸してくれませんか	I was wondering if I could borrow
	Do you mind if I borrow
	Would it be all right if I borrowed
	Could you lend me
	Is it all right if I borrow

さらに、これらの表現を先と同様の5段階評価にもとづく丁寧度計算により分類した上で、井出氏とそのグループは、日米の差をつぎのように指摘している。

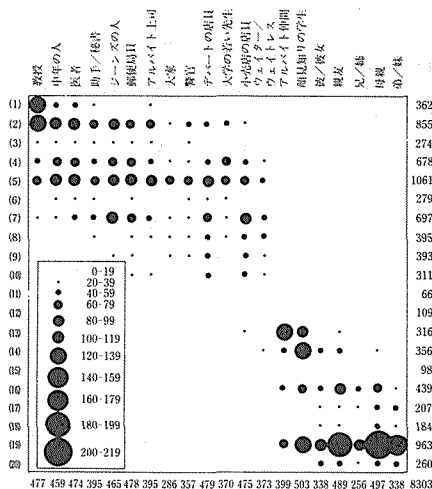
- 1) 大きく見ると、日本では5の丁寧なほうに「です・ます」や「ください」などのいわゆる敬語の形態素を含むもの、1の丁寧でないほうには、それが含まれていないものが集まっている。「です・ます」の存在は丁寧度に非常に大きく関与していて、「いいですか」と「いい」では格段の差がある。動詞の丁寧度も「貸していただけますか>貸してもらえませんか>貸してくれませんか」、また「借りていい>使っていい」などのようにはっきりしている。
- 2) 英語のほうは、「です・ます」を含むなどというような明らかな形態的特徴から見られる丁寧度の差は見られないが、やはり、丁寧な極のほうに集まるものと、丁寧でない極のほうに集まるものがある。比較的丁

寧でないと考えられているものには、命令形、省略形、steal のようなふざけた言い方が含まれ、丁寧なほうには、if 節などの埋め込み文のある疑問文や、may, would, could を使った疑問文などが入る。

4. 人物カテゴリーと表現との対応関係

井出・他 (1986) では、日米の人物カテゴリーと表現との結びつき、つまり、だれに対してどの表現を使うかを、回答数を丸の大きさに示した図 2 のような表現方式で分析している。

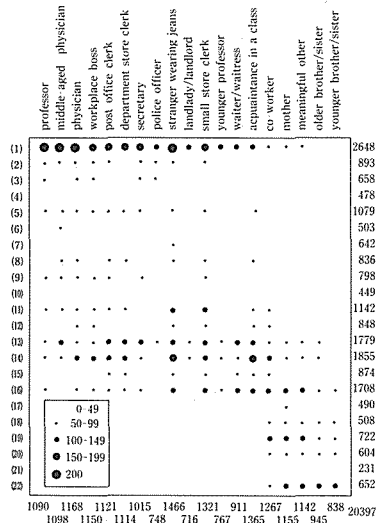
図 2-1 相手に応じた表現の使い分け
(日本：実数)



注：(1)～(20)は次の表現を示す。

(1)お借りしてもよろしいでしょうか (2)貸していただけますか (3)貸していただきたいんですけど (4)お借りできますか (5)貸していただけますか (6)貸してくださいませんか (7)貸してもらえませんか (8)貸してください (9)貸してくださいませんか (10)いいですか (11)貸してほしいんだけど (12)使っていい (13)借りていい (14)貸してくれる (15)貸してよ (16)いい (17)ペン (18)借りるよ (19)貸して (20)ある

図 2-2 相手に応じた表現の使い分け
(アメリカ：実数)



注：(1)～(22)は次の表現を示す。

(1)May I borrow (2)Would you mind if I borrowed (3)Would it be all right if I borrowed (4)I wonder if I could borrow (5)Do you mind if I borrow (6)I was wondering if I could borrow (7)Do you think I might borrow(8)Do you have a pen I can use (9)Is it all right if I borrow (10)Can I bother you for a pen (11)Could you lend me (12)Would you lend me (13)Could I borrow (14)Can I borrow me (15)Can you lend me (16)Can I use (17)Got a pen I can use (18)Can I steal (19)Let me borrow (20)Lend me (21)A pen (22)Gimme

アメリカでは一つの人物カテゴリーに対していくつもの表現が使えるという併答が多く、延べの回答数は日本の約2.5倍であったという。こうした図か

ら日米を比較して、つぎのような特徴が指摘されている。(要約引用者)

- 1) 日本は丁寧に接する相手には丁寧な表現を、気楽に接する相手には気楽な表現を使うというように、相補的にはっきり二分されているが、アメリカでは日本ほどはっきりした傾向は見られない。また丸の大きさを見ても、日本はどこかに丸がかたよることが多く、アメリカは小さい丸が点々と散らばっている。日本は、表現と人物の対応がはっきりしており、アメリカは、回答にばらつきが多く、どれがどう対応しているのかははっきりしていない。

このような全体的パターンを一言でいうと、日本は表現と人物カテゴリーの相関がくっきり見える「クッキリ型」で、アメリカはぼんやりと見える「ボンヤリ型」といえる。

- 2) アメリカは「ボンヤリ型」だが、気楽に接する相手には気楽な表現を使うという点では、かなりはっきりした使い分けがある。そして丁寧な表現のほうは、“Would it be all right if I borrowed” などのように丁寧に接する相手のみに使われるものと、“Could I borrow”や“Can I borrow”のように、だれにでも使えるものとの二種類がある。日本とちがって、だれにでも使える中間的な丁寧度の表現が存在している。
- 3) 日本の場合、丁寧な表現は三種類ある。第一は「お借りしてもよろしいでしょうか」「貸していただけますか」「貸していただきたいんですけど」で、相当に改まった相手向き、第二は「貸してください」「貸していただけますか」「いいですか」で、やや改まった相手向き、第三は「お借りできますか」「貸していただけますか」「貸していただけますか」「貸してもらえませんか」で、相当に改まった相手とやや改まった相手の両方に使えるものである。また、「お借りしてもよろしいでしょうか」は「教授」に極端に集中し、教授向きの表現といえる。
- 4) 丁寧でないほうの表現は、大別すると「母親」や「弟／妹」向きのものと、それ以外のものとがある。前者の表現は「ペン」「借りるよ」「貸し

て」「ある」で、改まった態度で接するような「ウェイター／ウェイトレス」「小売店の店員」などに対しても、ほとんど使われない気楽な表現である。後者の表現のなかでは「借りていい」は「アルバイト仲間」と「顔見知りの学生」の丸が極端に大きく、特にその両者向きの表現であるといえる。

- 5) 回答の実数ではなく、どの人物カテゴリーにどの表現が一番多く使われるかという使用率からみると(これは別に図示されている)、日本は実数の場合と類似の傾向を示すが、アメリカの場合は、気楽な表現以外は丸の大きさがみな小さくなる。つまり、気楽な相手に向く表現はあるが、他の表現はどういう相手に向くということがいえない。しかし、たとえば、“May I borrow” と “Could/Can I borrow” を比べればどの人物カテゴリーにどちらが多いかということはいえる。また、丁寧度が低ければ低いほど、日本では「貸して」が多くなり、アメリカでは “Gimme” が多くなる。「顔見知りの学生/acquaintance in a class」と「アルバイト仲間/co-worker」は日米ともに中間的な存在で、「借りていい」「貸してくれる」「貸して」、「Could I borrow」「Can I borrow」「Can I use」などが使われるが、これらの表現はどちらかといえば、アメリカでは丁寧度の高いほう、日本は低いほうに属している。

以上の分析は男女の平均で、性別による微妙な差のあることはもちろんであるが、こうした指摘は、日本語の待遇表現あるいは敬意表現の指導にも多くの有益な示唆を与えてくれる。ただ、この研究は話し手が日米の〈大学生〉という限られた範囲の研究であることを忘れてはならない。聞き手が話し手にまわったとき、どのような言い方をするかが分かって初めて日米の敬語行動の異同が分かってくるからである。

5. 日本と韓国の対人意識の対照

日本語と似ていると一般にいわれる韓国語における敬意表現は、どのよう

な対人意識にもとづいて行われているのだろうか。

金東俊「朝鮮語の敬語」(金田一・林・柴田編『日本語百科大事典』、1988)によれば、朝鮮語の待遇法は、年齢の差・地位の違い・親疎の度合い・利害関係・場面の雰囲気・話者の生活環境・性などのさまざまな要因によって変わってくるが、これを大きく分けると、

- ① 対者を上位者として待遇する(尊称)か
- ② 下位者として待遇する(下称)か

であり、もう一つ特別な形として、

- ③ 上下関係をあいまいな形にして表現する方法(略待形)

があるという。さらに、①は「丁重尊称」「普通尊称」「親愛尊称」の3段階に、②は「丁重下称」「普通下称」の2段階にわかれるが、③は表現手段が「略待形」一つしかないという。

このような待遇法の特徴は実際にはどのように現れているか。荻野綱男・他(1988)は日本と韓国の大学生の敬語使用の状況についてアンケート調査を行い、使用された表現形式の丁寧さを基にして聞き手の段階づけを試みている。

これは、大学生が日常接する人物をリストアップし、それぞれの人に対して、「これからあなたはどこへ行くか」とたずねるときの「行くか」と「道をおしえてくれ」というときの「教えてくれ」に当たる敬語表現の選ばれ方に基づくもので、この結果を先に紹介した日米の大学生の場合と比べると、たいへん興味ぶかい。日米間では相手の段階づけにかなりの並行現象が見られたが、日韓の場合は相手により相当大きな開きが見られる。つまり、日本と韓国とでは待遇表現の使い分けの基準点がかなり違うということになる。この図から読みとれる日韓の丁寧度の違いを、調査者はつぎのように指摘して

いる。〈 〉内はその違いに対する解釈である。

(1) 韓国は親(特に父親)にきわめて丁寧接するが、日本は親友などと同じような低い丁寧度で接する。

(2) 兄弟姉妹を比較すると、日本は誰に対しても同じように接するが、韓国は、兄・姉に対しては弟・妹よりも丁寧に接する。

〈年上の兄・姉と年下の弟・妹に対して、韓国では丁寧度に差を付けるが、日本では同じ家族の一員と見なして差を付けない。〉

(3) 「大学の上級生」と「大学の年上の同級生」に対する丁寧度の差をみると、日本では両者がまったく違って、上級生にはきわめて丁寧に接し、年上の同級生には丁寧でない接し方をするが、韓国では日本ほど大きな差はなく、上級生のほうが年上の同級生よりもやや丁寧なだけである。

〈「上級生」と「年上の同級生」は、大学生の間で考えれば、年齢差はほとんどなく、学年差(社会関係の差)だけがある。日本では学年差を重視して両者をはっきり区別するが、韓国では年齢差を重視して両者が小さくなる。〉

(4) 日韓ともに、最も丁寧なランクに入るのは「大学の先生」と「50歳の初対面」だが、それをさらに細かく見ると、日本では最も丁寧に待遇する人が「大学の先生」だが、韓国では「50歳の初対面」である。

〈「大学の先生」の年齢はさまざまであろう。一般には30～60歳と考えられ、被調査者の学生から見れば年上にあたる。日本では、「先生」という被調査者との社会関係を重視して最も丁寧に接するが、韓国ではそうではない。これは、韓国では先生に対し敬意とともに親密感も表していると考えられる。〉

(5) 50歳くらいの人に対して、日本では初めて会った場合とよく知っている場合とである程度差を付けた待遇をするが、韓国ではそれほどの差はなく、いずれの場合も高い丁寧度で接する。

〈日本では、同じくらいの年齢の人でも、相手との親疎関係によって

丁寧度が変わる度合いが大きいのに対し、韓国では、親疎関係の影響が少なく、年齢で決まる度合いが多い。〉

こうした分析にもとづいて、調査グループは、「韓国では敬語の使い分けの基準として「聞き手との年齢差」が大きく働くのに対し、日本では「聞き手との社会関係」が大きく働く」と結論している。

6. 日本と韓国の敬語表現

荻野氏のグループは、前述の聞き手のカテゴリーとそれぞれに対して用いられる言語表現との対応関係を、「行くか」「教えてくれ」を例として、先の井出・他（1986）における図2と同様の方式で表現しているが、これによると、韓国は、日本とはまた異なる「クッキリ型」となっている。

これらの分析から、韓国語の場合、上下関係をあいまいにして広く使うことが可能な形式の存在が、日本以上にきびしい対人関係の段階づけをソフトなものにする役割をはたしているように思われる。日本語においても、相手の位置づけと表現の対応がきびしいとはいえ、談話単位の表現においては、敬譲語の有無や「です・ます」の有無のみで、丁寧か否かを2分するわけにはいかないのと似ているかもしれない。このことは、コミュニケーションの在り方の普遍的特徴を考えさせるものをもっている。

なお前掲の金東俊(1988)では、朝鮮語の敬語法の日本語との主な相違点をつぎのようにまとめている。

- ① 絶対敬語がある：上位者についての敬語表現の絶対性。ただし、最近では相対的表現をする（相手により第三者についての敬語をひかえる）傾向が出てきている。
- ② 上位者認定の条件：年齢が最大の条件であり、子どもには、上位者の子どもであっても敬語や尊称は使わない。つぎに地位、親疎、利害関係などの順で決まるが、諸条件が総合的に考慮される。

- ③ 接頭辞による敬語がない：「お～」「ご～」のような造語法がない。「お手紙」は「手紙」としか表現できず、用言で尊敬表現とする。
- ④ 助詞の敬語：「～におかれましては」の「は」のような表現は、朝鮮語のほうが種類も多く、日常口語体のなかでも使われる。
- ⑤ 形容詞・指定詞の敬語：動詞同様の敬語表現を用いる。
- ⑥ 「～ていただく」の敬語形式がない：日本語の「～ていただく」「～(ら)れる」「なさる」「される」のような敬語形式は朝鮮語にはないので、すべての敬語表現は上位者を主語にし、敬語接辞^ㄸ(si)を付加して表現する。
- ⑦ 敬語の男女差：女性は男性よりいくらか敬語を多用するが、日本語に おけるほどではない。女性特有の敬語形式もなく、美化語もない。

7. 敬語行動の国際比較

前述の井出祥子・他(1986)では、日米の敬語行動の比較研究をするに当たって、その前提となる理論的枠組みを Brown and Levinson(1978)や Lakoff(1973)、その他に求め、敬語行動とは politeness の原則にもとづいた言語行動であり、人間関係をスムーズに保とうとするストラテジーであるという立場に立っている。そのストラテジーは、ある場合には、目上の人には特別な語形を使わなければならない、という社会的に規定されたルールに従う「わきまえを示す敬語行動」であったり、ある場合には、話し手が積極的に相手に敬意を示したり、相手との距離を保つために「働きかける敬語行動」であったりする。このような「わきまえ方式」と「働きかけ方式」は、日本にも欧米にも見られる敬語行動であり、そのどちらも、一方だけでは敬語行動を説明しつくすことはできないが、日本人の敬語行動は「わきまえ方式」の比重が大きく、欧米は「働きかけ方式」の比重が大きいと見る。

井出氏とそのグループは、その後、この日米の比較と同様な観点に立つ研究を他言語(韓国語、タイ語、中国語、スウェーデン語)にも広げ、井出祥子・他(1988)で6言語の国際比較を試みている。まず、敬語行動を「円滑なコミ

コミュニケーションのためのことば使い」と規定し、世界の敬語につぎのような二つのタイプがあると仮定する。

- ① 日本型の敬語：円滑なコミュニケーションのためのことばの使い分け
(狭義の敬語——尊敬語・謙譲語・丁寧語——や丁寧な表現の相手や
場面に応じた使い分け) → 「わきまえ方式」
- ② 西洋型の敬語：円滑なコミュニケーションのためのことばのストラ
ジーの使用 (Brown and Levinson その他の敬語行動の枠組み、すなわ
ちストラテジーの体系に基づく) → 「働きかけ方式」

このような前提に立って、日本型の「わきまえ方式」のうち、人間関係の
わきまえ方に焦点を当て、日米大学生の敬語行動を比較した場合と同じ内容・
方法により、6言語の敬語行動について、相互の遠近関係を対照している。
その結果、相手の人物カテゴリーに応じた表現の使い分けは、つぎの型に分
けられるという。

「クッキリ型」：日本、韓国、タイ、(中国)

「ボンヤリ型」：アメリカ、スウェーデン

中国は二つの型の間数的存在である。これを相関係数(相手と表現の相関の
度合)の大小にしたがって、わきまえ方式の敬語の程度を順序づけるとつぎの
ようになる。

日本 > 韓国 > タイ > 中国 > アメリカ > スウェーデン

相手人物に応じる表現の使い分けについて、6か国を総合的にみるとつぎ
のような特徴が指摘できるという。

- ① 日本・韓国・タイは、敬語体系があるため使い分けが安定している。
(回答者一人ひとりの回答の種類数が少ない)
- ② 中国は、表現の使い分けが不安定である。(一人ひとりの回答の種類数、および表現・人物に対する丁寧度にはばらつきが大きい、同一人物に対する表現の併答数は小さい)
- ③ アメリカ・スウェーデンは、「働きかけ方式」によるストラテジーが使われていると推測される。(同一人物に対する表現の併答数と一人ひとりの回答の種類数は大きい、表現・人物に対する丁寧度のばらつきはあまり大きくない)

言語間の比較対照研究から得られたこれらの成果は、日本に近い型から遠い型に向かうほど敬語表現や丁寧表現の指導にきめ細かさが要求されることを教えている、といって過言ではないと思う。概して、欧米系の学習者は簡潔で論理的な表現に得意であるが、持ってまわったような言い方には不得意であることも、このことと関係があるように思われる。

しかし、「きめ細かな指導」とは、差異の強調よりむしろ、学習者の表現したい丁寧さは日本語ではこれこれの表現形式が適当だと教えることである。そこに尊敬語や謙譲語がふくまれていても、〈尊敬〉なり〈謙譲〉なりの語彙的な意味あいを強く意識させてはならない。

IV 日本人の対人意識と敬語行動

前章で紹介した日一外の敬語行動の比較研究から、日本人の対人意識と敬語行動もある程度明らかになったが、日本人の敬語行動に焦点をあてて、もう少しくわしく見ておきたい。同時に本書の立場についても述べることにする。

まず、日本人の言語行動のうちのとくに敬語行動が、どのような条件に支えられているかを、敬語要素の現れ方を中心にしておく。

1. 敬語の一般的性格と意味構造

敬語の現れはさまざまな条件に支えられているが、どのような条件を基本的なものとして学習者に示せばよいか。異文化を背負う外国人に対する日本語教育の分野では、この面に関する研究はまだあまり進んでいない。従来の敬語研究の成果を参考にして、学習者にとって有効な方法とは何かを考えてみる。

現代敬語の研究は、国語研究の一分野として、明治以来着々と発展し、その研究文献はおびただしい数にのぼるが、とくに1970年代以降の進展はいちじるしい。狭義の敬語の分析から、日本人の対人意識とそこでの言語行動を、待遇行動や待遇表現といった面から、言語随伴の行動、非言語行動をもふくめて、〈全体的に〉ないし〈社会的に〉とらえようとする態度が一般化しつつあるといえる。

その代表的研究といえる南・林・林・芳賀(1974)、南(1987)では、敬語の意味は複合的性格のものだという立場に立ち、「敬語の一般的性格」として、つぎの三つをあげている(主として南1987に従う)。

(1) 送り手の、なんらかの対象についての一種の顧慮があること。

気にする、気をくばることで、たとえば、送り手(話し手)がデスやマスを使うか否かは相手(聞き手)に対する顧慮であり、「お〜になる」

や「(ら)れる」を使うのは、相手や第三者に対する顧慮である。

- (2) そうした顧慮は、つねに送り手のなんらかの評価的態度を伴っていること。

たとえば、相手は自分より目上か否か、親しいか否か、話の場があらたまった場合か否か、ある表現は上品か否か、などについての評価的態度をさす。

- (3) そうした顧慮、評価的態度に基づく、なんらかの対象についての扱い方の違いがあり、その扱い方の違いを反映した表現の使い分けがあること。

たとえば、「机」か「お机」か、グ、デス、(デ)ゴザイマスのどれを選ぶか。ヨーロッパ語なら二つある人称代名詞の使い分けなど。

この三つは、敬語の意味の構成要素として、次のようにまとめられている。

〈顧慮、扱いの対象、扱い方の特徴〉

これらは、それぞれ、待遇行動の社会的、文化的、心理的な構成要素に対応しているとする。この三つの組み合わせが敬語の意味の一般的構造を形成しているとし、さらに、これら三つの構成要素を基にして、つぎの要素を考慮する。

- 1) 参加者：送り手、受け手(マトモの受け手、ワキの受け手)、関係者(動作主、被動作主)
- 2) コミュニケーションの内容：素材的内容(動作主・被動作主そのもの、その動作・状態・過程・関係するものごとなどの扱い。尊敬語、謙譲語、美化語が深く関わる)、表現的内容(送り手の、言語表現についての態度。丁寧語がその典型例)
- 3) 状況：コミュニケーションが起こる際の周囲の状況

以上の諸要素を考慮し、顧慮、扱いの対象、扱い方の特徴を精密化して、敬語の意味構造を分析したのが、つぎの表6、表7、表8である。「顧慮の対象」では、送り手、受け手、動作主、被動作主の四者と状況が対象化される。送り手の顧慮は、性、年齢、身分、役割などに及ぶことになる。「扱いの対象」では、コミュニケーションの素材的内容や表現的内容が対象化される。「扱い方の特徴」では、顧慮や扱いの対象に評価を与え、待遇態度を決定する。

表 6 「扱い方の特徴」の表示

	+	±	-
上 げ	上 げ	中 立	下 げ
はなれ	はなれ	中 立	近づき
あらたまり	あらたまり	中 立	くだけ
負わせ	負わせ	中 立	負 い
弱	弱	中 立	強
美	美	中 立	醜
間 接	間 接	中 立	直 接

表7 敬語の意味構造①（狭義の敬語）

		美化語	ていねい語 ²	ていねい語 ¹	謙讓語B ²	謙讓語B ¹	謙讓語A ²	謙讓語A ¹	尊敬語 ³	尊敬語 ²	尊敬語 ¹
		美 化 語	ていねい語 ² ～ございます	ていねい語 ¹ ～です、～ます	謙讓語B ² 弊～、拙～、愚～	謙讓語B ¹ ～いたす、存ずる	謙讓語A ² ～させていただきます	謙讓語A ¹ ～申しあげる、～てさしあげる	尊敬語 ³ 貴～、玉～	尊敬語 ² ～てくださる	尊敬語 ¹ ～になる ～さま、～（ら）れる、お
顧慮の対象	送り手→送り手-受け手	±	±	+	+	+	±	±	+	±	±
	送り手→送り手-動作主	+	+	-	+	+	+	+	-	+	-
	送り手→送り手-被動作主	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-
	送り手→動作主-被動作主	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-
	送り手→受け手-動作主	±	±	-	±	±	+	+	-	-	-
	送り手→受け手-被動作主	-	-	-	±	±	-	-	-	-	-
	送り手→送り手	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
	送り手→素材的内容	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	送り手→状況	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
扱いの対象	動作主にかかわる内容	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
	被動作主にかかわる内容	-	-	-	+	+	-	-	-	-	+
	素材的内容一般	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
	表現的内容	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-
扱い方の特徴	上げ	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+
	はなれ	+	±	+	+	+	+	+	+	±	±
	あらたまり	+	±	+	+	+	+	+	+	±	±
	負わせ	±	-	±	+	-	±	±	±	±	±
	弱	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±
	美	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	間接	±	±	±	±	±	±	±	±	±	±

表 8 敬語の意味構造②(一般的言語表現)

		軽卑のことば いやがる、いくさる、	間投詞・ 応答詞 ¹ もしもし、はい、いいえ	間投詞・ 応答詞 ² こちら、おう、いや	語彙 ¹ 漢語 (和語に対して)	語彙 ² 幼児語 (成人語に対して)	要求表現 ¹ いなど いなさい、いらっしゃ	要求表現 ² いんですけれどなど いしていただけるとうい
顧慮の対象	送り手→送り手-受け手	±	+	+	+	+	+	+
	送り手→送り手-動作主	+	-	-	-	-	+	+
	送り手→送り手-被動作主	-	-	-	-	-	-	-
	送り手→動作主-被動作主	-	-	-	-	-	-	-
	送り手→受け手-動作主	±	-	-	-	-	+	+
	送り手→受け手-被動作主	-	-	-	-	-	-	-
	送り手→送り手	-	+	+	-	-	-	-
	送り手→素材的内容	+	+	+	+	+	+	+
	送り手→状況	+	+	+	+	+	+	+
扱いの対象	動作主にかかわる内容	+	-	-	-	-	+	+
	被動作主にかかわる内容	-	-	-	-	-	-	-
	素材的内容一般	-	-	-	+	+	-	-
	表現的内容	-	+	+	-	-	+	+
扱い方の特徴	上げ	-	±	+	±	±	±	+
	はなれ	-	±	-	±	-	-	+
	あらたまり	-	±	-	+	-	-	+
	負わせ	±	±	±	±	±	±	±
	弱	-	±	-	±	±	±	+
	美	-	+	-	+	+	+	+
	間接	-	±	-	±	±	-	+

「顧慮の対象」と「扱いの対象」では、+でその項目が問題になることを、-でその項目が問題にならないこと、±はどちらでもないことを表している。「扱い方の特徴」の+・-・±は、表6の内容を表している。

表中のたとえば「顧慮の対象」の「送り手→送り手-受け手」は、「送り手が、送り手自身と受け手との関係を顧慮している」場合と読む。また、表7の丁寧語「ございます」の意味構造を知りたいければ、+-のマークに注目して、「送り手が、送り手と受け手の関係、素材的内容、状況を顧慮した結果、送り手の表現態度を、下げ(上げ-)、はなれ(はなれ+)、あらたまり(あらたまり+)、美(美+)の特徴を持つように扱う」と読む。

こうした立場に立つと、いわゆる狭義の敬語だけに目を向けていることは、必然的に不可能になることが分かる。敬語は敬語でないものとの対立において初めて存在理由があるからである。

表7、8の意味構造は、外国語としての敬語教育に興味ぶかい事実を提供している。というのは、学習者にとって、表中の+や-でマークされた特徴は概して理解しやすく、±でマークされた無標の特徴を持つものについては、概して分かりにくく、とまどったり誤解したりしやすいということである。

こうした意味の構成要素は、敬語指導のうえで総合的に扱われなければならないものであるが、指導の技術として重要なのは、まず、「顧慮の対象」と「扱いの対象」である。なぜなら、対象の顧慮のしかたと対象の扱いかたの関係の理解が敬語習得の第一歩だからである。学習者の質問は敬語について本質的な関心を持ちはじめた当初は「だれについて、どの程度の丁寧さの表現を使うべきか」ということに集中する。この「だれについて」は目の前の聞き手であったり、話題の人物であったりする。「どの程度の丁寧さの表現」とは、「デス」のほうがよいと思うがなぜ「グ」を使っているか、「お~になる」がよいか「~られる」がよいか、などの疑問である。状況についての疑問は、むしろその後にくるのが一般的である。

杉戸清樹(1983)は、上述の考えなどを参考にして、待遇表現を〈気配りの言語行動〉とみて、その気配りにもっとも適した表現を選択するさいのし

くみを、仮説として、つぎのような二つの例で説明している。

- (1) 入学試験に失敗した子供のことで、父親が母親にくぎをさす。

「あいつのほうがつらいんだから、今日のところは何もいわないでおい
てやれよ。」

- (2) 会社で、朝、課長が部下に念をおす。

「今日いらっしゃる加藤さんは大切なお客さまだから、くれぐれも失敗
のないように頼むよ。」

この場合、話し手（行動主体）が気配りの対象とした話し相手には、つぎ
のものがあるとみる。

父親からみた母親（～だから・やれよ、が選ばれる条件として）

課長からみた部下（～だから・頼むよ）

母親からみた子（何もいわないでおく）

部下からみた加藤さん（失礼のないよう行動する）

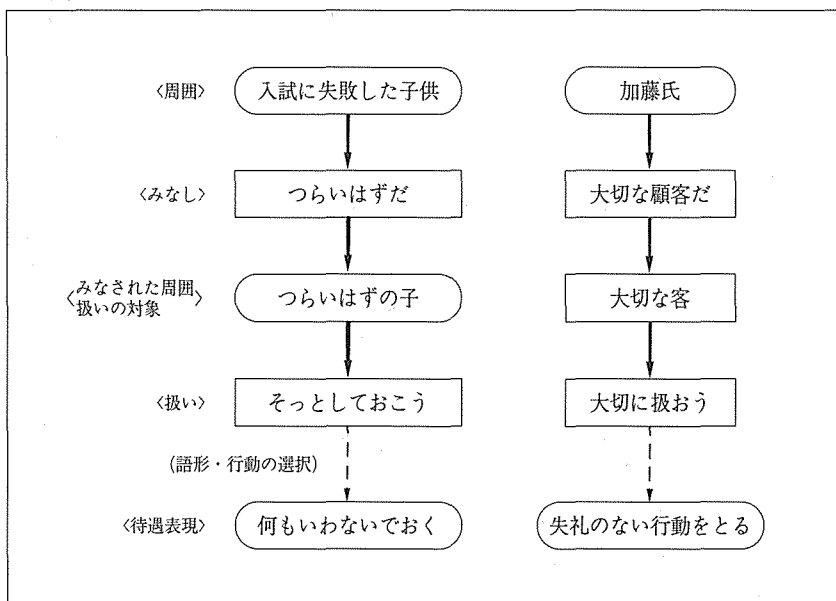
一方、話し手からみた話題の人物には、つぎのものがある。

父親からみた子（あいつ・やれ）

課長からみた加藤さん（いらっしゃる・加藤さん・お客様）

気配りの対象となる中心は、この場合、上記の各人物である。これを待遇
表現全体のなかに位置づけてみれば、人物のみならず状況をふくめた周囲へ
の気配りの段階で、まず「みなしの段階」、つぎに「扱いの段階」のあること
を想定し、気配りを一定の手続きの過程（プロセス）としてとらえる試みを
提唱している。上例の二つについての気配りのプロセスはつぎのように図示
されている。（原文は縦書き）

図 3



上図に示された「みなしの段階」は、南氏の「顧慮」の概念にほぼ相当し、杉戸氏によれば、「表現行動主体のとらえた周囲の人物や状況の様子や属性への、何らかの評価をあらわす、形容詞的・修飾語的な内容の情報をもたらすという特徴がある」とする。「扱いの段階」は、南氏の「扱い方の特徴」にほぼ相当し、「それが表現行動や表現形式の選択にそなえて主体自身の姿勢を準備する段階であることから、主体の意志のこもった動作とそれを修飾する副詞的な内容の情報をもたらす」とする。

このような「みなし」「扱い」の内容を、具体的にどう整理して提示するかが、日本語教育に求められている問題だといえよう。

2. 日本語教育への応用例

上述のような研究例に基づいて、日本語教育への応用を試みた例がある。「敬語」だけに視点を置いたものではないが、国立国語研究所『日本語教育映画基礎編・総合文型表』（1987）では、映画30巻にあらわれた全ての発話を文型の観点から分析・整理するにあたって、利用者の便を考え、表現形式（文法）の観点から整理した「文型」と、それぞれの文のその場面での機能の観点から整理した「発話機能」との二部に分けて一覧表を作成している。

ここでは、「発話機能」についてその分析・整理のしかたを紹介する。「敬語」の機能（はたらき）については別に取り上げるが、ここでは一般的な発話すべての分析法として見ていただきたい。著者によれば「それぞれの文は何を言うために使えるか」「ある種の場面に対してどんな種類の文で対応することができるか」を明らかにするための資料を提供しようとする試みである。

すなわち、表9に見られるように、文と文脈との関係を分析するために、まず大きく「文末の表現意図」と「場面を形成する要因」とに分類し、後者はさらに〈発話の動機（場面メアテ）〉〈働きかけの種類（聞き手メアテ）〉〈発話内容に対する態度（素材メアテ）〉に分けられ、ある発話の意味（はたらき）はそれらの組み合わせとして実現されているものとして示している。

表 9 発話機能の要因

文の形式上の特徴	場面を形成する要因		
文末の表現意図	(1)発話の動機 (場面メアテ)	(2)働きかけの種類 (聞き手メアテ)	(3)発話内容に 対する態度 (素材メアテ)
1. 叙述要素文 2. 伝達要素文 21. 終助詞 ネ 22. その他の終助 詞 23. ノダ 3. 疑問要素文 31. 質問 32. 納得・詰問 4. 要求要素文 41. 命令 42. 依頼 5. 意志要素文 6. 単語文 7. 言いさし文	1. 自律的 2. 非言語的文脈へ の対応 21. 事態の推移に 対する反応 22. 他の動作・行 為に対する反応 3. 言語による文脈へ の対応 31. ワキ的文脈 32. マトモ的文脈	1. 没対者性 11. 独語 12. 聞かせ 2. 対者性 21. 要求 211. 情報要求 2111. 質問 2112. 同意要求 212. 行為要求 2121. 単独行為 2122. 共同行為 213. 注目要求 22. 非要求 221. 情報提供 222. 意志表示 223. 注目表示	0. 中立的 1. 肯定的評価 2. 否定的評価

表 9 に示されているような分類に基づき、映画にあらわれる実際の発話の機能を、「使用場面順機能分類」「文末の表現意図による分類」「聞き手に対する働きかけによる分類」の 3 つに分けて一覧表を掲載している。その一部を紹介すると表 10 のようである。

表10 発話機能による型の一覧表（部分）

(A) 使用場面順機能分類

		文末	場面 メアテ	聞手 メアテ	素材 メアテ	
第30巻 9-086	きよし	6	1	223	1	どうも。
第30巻 9-087	木村	31	1	2122	1	じゃあ、行きましょうか。
第30巻 9-088	きよし	6	32	223	1	はい。
第30巻 9-089	木村	22	1	222	0	ちょっと 行って くるよ。
第30巻 9-090	夫人	6	32	223	0	はい。
第30巻 9-091	きよし	6	1	223	1	どうも、ごちそうさまでした。
第30巻 9-092	夫人	7	32	223	2	いいえ、何も おかまい いた しませんで……。
第30巻 9-093	きよし	6	1	223	0	失礼 いたします。
第30巻 9-094	夫人	6	32	223	0	ごめんくださいませ。

(B) 文末の表現意図による分類

		文末	場面 メアテ	聞手 メアテ	素材 メアテ	
▽文末の表現意図 2. 伝達要素文 23. ノダ／ノデスで終わる文						
第16巻 9-086	まさこ	23	32	223	2	ええ、ときどき、おくれる ことが あるんです。
第28巻 5-034	まさお	23	32	223	0	いいえ、いいんです。
▽文末の表現意図 3. 疑問要素文 31. 質問						
第20巻 2-067	おばあ さん	31	1	223	1	おいしい。
第15巻 5-044	森	31	22	223	0	なんですか。
第19巻 3-040	まさこ	31	31	223	0	そう？
第13巻 4-089	田中	31	32	223	0	そうですか。
第22巻 1-015	はるこ	31	32	223	1	ごめいわくで なければ、お じゃましても いいかしら。

(C) 聞き手に対する働きかけによる分類

▼文末の表現意図 3. 疑問要素文 32. 納得・詰問

▽働きかけの種類 1. 没対者性 12. 聞かせ

第26巻 5-036	課長	32	21	12	0	きょうのか。
第12巻 8-016	伊藤	32	22	12	1	なーんだ。きみか。
▽働きかけの種類 2. 対者性 21. 要求 211. 情報要求 2111. 質問						
第19巻 1-005	まさこ	32	1	2111	0	やまださんが 待って いる んですか。
▽働きかけの種類 2. 対者性 21. 要求 211. 情報要求 2112. 同意要求						
第25巻 4-059	課長	32	1	2112	2	この 前も 言ったのに、だ めじゃないか。
第27巻 2-017	父	32	22	2112	1	まさお君も この 列車だっ たのか。

このような分類・整理は、一般的な言語行動の理解に役立つことはもちろん、敬語指導の方法を考える際の基本的な枠組みを与えてくれている。いうまでもなく、指導の現場ではほとんど説明を要しない箇所とをもって細かく説明を要する箇所とがでてくる。とくに場面を形成する要因のうち「発話内容に対する態度（素材メアテの条件）」として分類された〈中立的〉〈肯定的評価〉〈否定的評価〉は、その典型的なものであろう。「敬語」のもつ意味・機能をこれらの評価の態度で判断するのが困難な場合が多いからである。

3. 敬語使用の条件(1)——上下関係を優勢とみる考え——

前々節1.の「顧慮(みなし)」や「扱い」、前節2.の「場面を形成する要因」と関連して、日本語教育上の敬語指導の第一条件と考えられるのは、簡略化していえば、対人関係の把握のしかたと表現の対応のしかたである。ここでは敬語使用に焦点をしぼり、それがどのような条件から成り立っているか、全体的に見ておく。

南不二男・林大・林四郎・芳賀綏(1974)および南不二男(1987)では、敬語要素選択の条件を、大きく「外的条件(ことばの世界の外の人間関係な

ど)」と「内的条件（言語体系内の文法など）」の二種に分け、さらに次のような条件を考慮する必要を説いている。南（1987）にしたがい、項目だけを列挙する。前節の杉戸（1983）の例は、以下の内容に基づく具体例であり、モデル化の試みである。

I. 外的条件

- ①人間関係の条件：（後述）
- ②ことがらに関する条件：送り手側か否か、あらたまった物事か否か、日常的か否か
- ③状況に関する条件：あらたまった状況か否か、一対一か一対多か、直接か否か

II. 内的条件

- ④談話関係の条件：不特定多数めあて、談話構造中の位置、書きことばか否か
- ⑤文の構造に関する条件：従属句内、引用のトの前、連体修飾句内、文の末尾
- ⑥単語の構造に関する条件：オ／ゴがつくか否かおよび使い分け

敬語使用に対して「敬語不使用」あるいは「敬語回避」も考えなければならない。慣習的不使用、意図的不使用、敬語に習熟していない場合の不使用がある。これについてはネウストプニー（1983）、大石初太郎（1983）、南不二男（1987）などを参照していただきたい。

以上のような使用条件のなかで、狭義の敬語指導と表裏一体をなすのが「人間関係」の条件である。敬語指導は敬語にあらざるものとの対比において行われることはいうまでもない。この人間関係の条件を南（1987）は以下のように細分化してくわしく考察しているが、ここでは簡略化して紹介する。

人間関係の条件

- (a) 本人か、本人でないか(送り手、受け手、動作主、被動作主が、それぞれ同じ人物であるか否か。たとえば、マトモの相手と動作主、マトモの相手と被動作主、ワキの相手と動作主・・・などが、それぞれ同一人であるか否か)
- (b) 性別 (主として送り手自身の性別による敬語選択の差異)
- (c) 所属階層、地位、立場その他(主として社会階層のちがいによることばの差異。現代ではその特徴は薄れている)
- (d) 上下関係
 - (1) 身分的上下関係(おおよそ社会階級のことで、社会体制と密接な関係にある。現在の日本では皇室の存在)
 - (2) 生得的上下関係(年齢の上下がもっとも基本的。各種の社会集団や個人間の年齢差による扱いに反映する)
 - (3) 経歴的上下関係(職歴の長短、経験の先後関係。先輩・後輩など)
 - (4) 役割的上下関係(たとえば、会社などの職階。社長、重役、部長、・・・)
 - (5) 差別的上下関係(合理的な理由は見出しにくい価値観から、人または人の集団を区別する。白人・黒人問題、男尊女卑、その他)
 - (6) 能力的上下関係(指導力の有無など。役割的上下関係と区別がつけにくい)
 - (7) 立場的上下関係(心理的力関係。客－店員、貸す側－借りる側、頼まれる側－頼む側、教える側－教えられる側、など)
 - (8) 絶対的上下関係(神仏などの宗教的超越者あるいは超自然的存在)
- (e) 親疎関係
 - (1) 心理的親疎関係(対象について親しい感情をもつか否か。友人間、同僚間、近所の者どうしの間など)
 - (2) 社会的親疎関係(血縁的なものと、社会的なもの。身内か否か、同一の職場・所属グループ・地域社会か否かなど)

上記のいずれもが、現実には、典型的なかたちで出てくるとは限らないことは、南氏が指摘しているとおりである。いくつかの特徴が共存して敬語行動を支えていることは経験的にも理解することができる。

さらに南氏は、現代ヨーロッパ諸語の敬語使用の原理——Brown and Gilman(1960)の二人称代名詞の使われ方の研究に基づく——が、「力」(power 上下関係)の原理から「連帯」(solidarity 親疎関係)の原理に移りつつあるとしても、全面的にとってかわったわけではないようだし、日本でも平行的な現象が見られないこともないと述べている。そして、「日本語では全体的に見ると、依然として上下関係の原理がかなり優勢であるようだ」と、その見方を表明している。上記の人間関係の条件の細分化も、この見方を反映しているように見える。上下関係の原理の強さは、おそらく、日本人の実感にもっともぴたりくる敬語使用の条件であろう。

教育の現場では、研究から得られた理論を、それが複雑なものであればあるほど、簡略化する必要に迫られる。そうした場合「上下関係」の原理は、普遍的な事実として分かりやすいだけに、学習者に強く印象づけられ、敬語使用に関係する他の条件（日本語的条件）が無視されがちである。たとえば学習者は、医者に対する場合と看護婦に対する場合、父親とその子どもに対する場合、店員やタクシー・ドライバーに対する場合等々、自国の上下関係や階層や習慣にとらわれて、ばか丁寧になったり、反対にぞんざいになったり、両極端におちいりやすい。

一方「親疎関係」は、学習者それぞれの母語文化における親疎の概念と日本人の親疎の概念とのずれに気づくまでは、敬語使用においてしばしば間違いをおかしがちである。さきに「外国人の見た敬語」の章で紹介したジャック・スワード氏は同じ著書で、ある善意のアメリカ人のセールスマンが、日本での取り引きの効果をあげるために、取り引き相手の日本人社長と早く仲がよくなるのが大切だと考え、アメリカ的発想から、親愛の情を示すにはくだけたことばづかいが必要だと考え、英語を基にしたかなり下品な直訳日本語で話しかけ（「おい、土井、たくさん助べい班長さんね」）、日本人社長を

ひどく不愉快にさせ、あげくの果て帰国させられてしまった例を紹介している。

日本語のかなり達者なオーストラリアからの留学生は、ある酒の席で、普段から親愛感をいだいており、その場でますます親しくなっていた担任の教師と、ほとんど友だちことばで話し合っていたが、普段から当人を知っている周囲は多少ぞんざいな感じを受けただけで、格別な違和感を感じなかった。ところが、たまたまその席にその教師の奥さんが現れたとき、「先生、家内が来たよ」といって、周囲を苦笑させた。この場合の「家内」は単純な誤解・誤用であり、ご愛敬のようなものであるが、それが「来たよ」という表現といっしょになって、ぞんざいさを増幅させた。

日本語のような狭義の上下関係や親疎関係では律しきれない場合の敬語使用の実態に触れると、学習者にさまざまな疑問ととまどいが生まれるようになる。

4. 日本語教育での従来の扱い

敬語行動の基盤となる人間関係をとらえることは、日本語教育でも従来からいろいろの用語（概念）を使って試みられている。代表的なものは、上・下、親・疎であり、ついでそれと関連させた恩恵・被恩恵、強・弱などであった。実際の指導は、用例に応じていずれかの特徴にウェイトが置かれるか、それらの組み合わせとして行われてきた。とくに、教室という現場の便利さから、教師と学生との対話をモデルにした場合が多かった。しかも、教室外での応用の安全性を考えて、学生どうしの対話でもデス・マス体をくずさないことが多かった。

近年はウチ・ソトの概念がよく利用されるようになった。しかし、それぞれの用語の概念もかならずしも厳密に規定されたものではなかった。そこから安易な応用がなされたり、誤解が生まれることがあった。

安易さや誤解の典型は、敬語の研究者がひろく用いる〈上・下〉という概念についてである。上記の用語がかりに研究者によってよく用いられたとし

ても、人間関係と敬語の用法との対応からみて、く上：下＝ソト：ウチ＝疎：親＝恩恵：被恩恵＝強：弱> という考え方にもとづいて、記述の都合上、二項対立的に〈上・下〉で代表させ、社会的関係も心理的關係もふくませていたと見るべきであるが、これを単純に現実的な目上・目下と思い込む不注意が教師にも学習者にもあったといえる。しかしこれは、日本語教育の安易さであるばかりでなく、日本人のための一般的な国文法（学校文法）の記述の安易さに影響されていることも事実である。

そうはいっても、日本語教育の初級段階では、指導のしやすさやてっとり速い効果を考えて、目上・目下を意味する〈上・下〉や、ユニバーサルな丁寧さとして理解されやすい初対面などのエチケットに合致する例文ばかりが扱われてきたとしても、非難することはできない。問題はそのあとであり、狭義の敬語の指導・訓練だけで途切れて、その後のひろい意味での敬語（待遇表現）の指導がおろそかにされる傾向が強かったことである。

生きた実践的な日本語が多く要求されるようになると、上・下や初対面の場合だけの指導では不都合なことに気づかされるので、〈親・疎〉などが加味されるが、これも学習者には、表面的・直訳の意味は分かっても、上・下との関連や、母語文化における親疎意識の干渉で、前節であげた例のように誤解を招くことが多かったように見える。つまり、教師や周囲の者が親しみのあることばづかいで学習者に接すると、学習者もすぐに親しみのあることばづかいで応対するのがよい（母語に相互的用法をもつ）のだと判断する「誤解」を生みがちであった。

近年は〈ウチ・ソト〉の概念が多く用いられるようになったと述べたが、本書でもこの概念の有効なことを基本的に支持する。文化庁（1971）では、ウチ・ソト、上・下を基本とし、これに、親・疎、恩恵・被恩恵を加えた八つの概念を応用している。けれども、「顧慮」や「みなし」に関わる対人意識のひとつひとつに、社会的・心理的両面から適切な用語を与えることは、待遇表現の複雑さからみてはなはだ困難である。

しかし、日本語の語彙を、丁寧さを基準として、普通語（対等語）・敬語・

軽卑語のように、またそのなかの敬語を意味的に尊敬語・謙讓語・美化語……のように分類することが学習上の効果に添うものであるとすれば、それらが使い分けられる〈人間関係の分類〉もまた必然的に要求されていると考えるべきであろう。その場合、ことばでも人間関係でも、実用的効果を考えた分類では、おおざっぱすぎても、細かすぎてもいけない。とくに対人的人間関係も(かりに無限であっても)また有限なものとして、ある枠組みを設定し、提示することが大切である。

5. 本書の立場——学習者の疑問——

この場合、日本人の敬語行動の特徴を対人意識との関係で分類するとすれば、敬語研究者の多くが上下関係の原理が優勢であると認めているとしても、教育上のストラテジーとして有効な第一の原理は〈ウチ・ソト〉の概念であると考えられる。なにをもってウチ・ソトとするかは、次節で述べる。

日本人の対人行動をコントロールする基本原理をまず〈ウチ・ソト〉の関係と見て、ウチ・ソトの各々に〈上・下〉その他の関係がからみあっているとするほうが、誤解や違和感を与えることも少なく、指導もしやすいと思われる。つまり、もっと端的に言えば、〈ウチ・ソト〉を主、〈上・下〉を従とする見方に立つことになる。いうまでもなく、現代の敬語は主として〈ソト〉に対するものであり、その〈ソト〉のなかで〈上・下〉が強く生きており、〈ウチ〉では極めて弱いものになっていると考えることになる。これは日本語の敬語の見方に大きく関係するが、日本語教育の最初からデス・マス体の表現を与えて、上・下、親・疎にかかわりなく、実用的安全性をはかっていること自体、意識的にしろ無意識的にしろ、このことを証明しているように思われる。単に外国人だからという理由だけでなく、ユニバーサルな丁寧さの問題がその根底にあるはずである。むろん、外国人が日本語を使って話す相手は、大部分が日本人(ソト)であるという単純な事実も無視してはならない。

このような考えは、ヨーロッパ諸語の敬語行動の原理に近づけて解釈した

結果ではなく、現代日本語の敬語の性格のとらえ方の問題である。

東洋語圏、西欧語圏の学習者を問わず、こんな質問がある。

①「先生はどうして学生に敬語を使いますか」

教師は無意識のうちに、多い少ないの差はあれ、学生にもいわゆる敬語を使っていることがあるはずである（たとえば「みなさんもお存じのように」、「前回すでに申し上げましたが」など）。教室のような公的な場あるいは一対多の場のみならず、私的な場においても、相手の学生が成人であったり教師が女性であったりすれば、かなり日常のことである。まちがっているとか、好ましい態度ではないとか、だれもいえないだろう。また、こんな質問もある。

②「先生とはもう親しいから、敬語を使わなくてもいいでしょう?」(ニュージーランド)

③「日本人は家族でも、親が子どもに対しても、敬語を使うんですか」(中国)

④「日本に来たばかりのころ、道に迷ったので、だれかに聞こうと思ったが、周囲には子どもしかいなくて、どんなことばを使ったらいいか分からなくて……」(韓国)

⑤「物売りがきて、しつこいので、帰りなさい、っていったんですけど……」(アメリカ)

⑥「2年もいっしょに暮らしている下宿のおばさんに、そんなことだめよ、と言ったら、ことばづかいがわるいって叱られました。それなら、テレビの外人タレントのことばもわるいことばですか」(シンガポール)

⑦「日本人の家に行ったら、奥さんがご主人の前を通るとき、失礼します、なんて言ってましたけど、あれはお客に対するポーズですか」(台湾)

これらは主として上・下や親・疎にとらわれたところから起きる疑問である。このような質問に答えることは、容易なようで決して容易ではない。日本人の待遇表現行動を映しだす鏡になっているし、その疑問解消のためには、敬語の意味・はたらきを初めとして、日本人の言語行動についての具体的知識を提供しなければならないことを教えている。

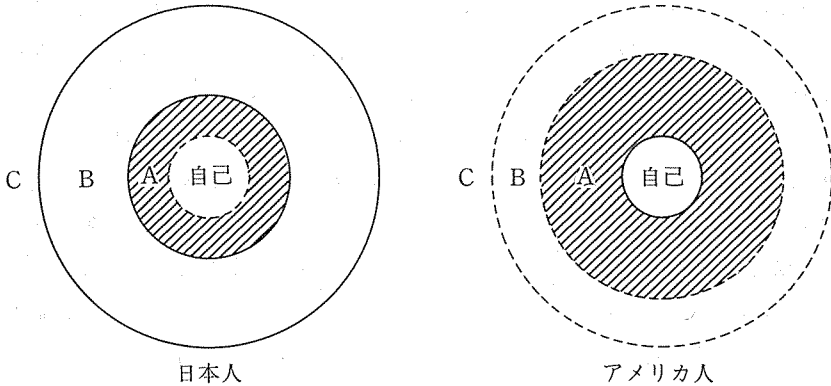
6. 敬語使用の条件 (2) ——ウチ・ソトの人間関係を優勢と見る考え——

日本人の行動様式の把握に〈ウチ・ソト〉の概念が相対的に有効であると述べたが、どのような説明をすれば、基本的に敬語の使われる人間関係、基本的に使われない人間関係の理解に有効なのであろうか。

井出祥子 (1977) には、日本人とアメリカ人の敬語行動のちがいを述べるにあたって、それが両国民の「人格構造」のちがいに基づくものとし、そのちがいを自己を中心とする三重の同心円として図示し、行動様式の違いが述べられている。類似の、あるいはもう少し詳しくした図示は、社会学や文化人類学その他で日本文化の構造の説明によく用いられる。井出氏は敬語使用にあたってウチ・ソトの原理が優勢だと主張されているわけではないが、その簡略化された図示と、そこに述べられた井出氏の説明とは、ウチ・ソトの概念に合致していると解釈される。学習者に対する日本語の待遇表現の説明にも応用しやすいので、少しくわしく紹介させていただく。なお下に引用した図に付した記号A・Bは原図のA・Bとは位置が逆にしてあることをお断りしておく。また、Bの外側にも世界はあり、これをCとしたのも引用者のつけ加えである。

外側の円および自己をかこむ円の大きさは同じと考える。実線か点線かに注意する。実線は境界がはっきり区別されていること、つまり壁が高く越えにくいことを示し、点線は境界があいまいなことを示す。出たり入ったりがしやすいか否かと考えてよい。A (斜線) の部分が〈ウチ〉に当たり、Bの部分が〈ソト〉に当たる。Bは「人格構造」から見れば表層構造であり、ふだん他人に見せる人格はこの部分である。Bは日本人のほうがるかに広い。むろ

図4 「人格構造」



ん、現実にはウチとソトの境界線が常に明瞭なわけではなく、ソトに近いウチもあれば、ウチに近いソトもある。この境界線に近い部分には敬語・非敬語が入りまじり、これによって学習者の敬語体系の理解を困難なものにしている。

日本人の場合を中心に述べる。まず、ウチ・ソトの区別がはっきりしている。A、つまりウチとしてつき合える人間関係とはどんな場合なのか。井出氏は次の三つをあげる。

- ① くつろいだ時の家族間
- ② 仲のよい友人間のつき合い
- ③ 酒の席での男のつき合い

三つのうち③は臨時の場であり、かりに精神的にリラックスするとしても程度問題ということがあり、日常の関係が持ち込まれやすいので、①②ほどには、恒常的・固定的には考えにくい。また③の人間関係は、教育上もとても誤解されやすい性格をもっているので（前節の学習者の質問例②もこれに

相当する)、除外するか、南(1987)の「状況」の例として扱ったほうがよい。

井出氏によれば、「このAの世界では、インフォーマルな表現、強くすすめる表現、親愛な表現が好まれ、ホンネがいえる世界、グチをこぼすことが許される世界、甘えられる世界である。自己はしばしばこのウチ全体の世界に埋没して、自他の区別がつけにくくなる。つまり日本人の自己はウチの世界と融合し、そのグループの中で自己が認識されていると見ることができる。これに対してアメリカ人は、人間を平等にとらえる傾向がつよく、個人主義の個がしっかりしており、自己のプライバシーはしっかり守るが、相手がだれであっても人格の深層にまで引き入れてつき合うことをよしとする価値観を持っていると考えることができる」という。日本人の場合でいえば、いわゆる「ウチワことば」や「友だちことば」、あるいは「グことば」が際立つ世界である。

一方、日本人のBはどんな世界か。井出氏によれば「A以外の友人・同業者・知人などで、社会的にも心理的にも、なんらかの利害関係があり、義理のつき合いやタテマエを大切に、和と秩序の保持に意識的に努力し、自我をおさえて表面をとりつくろふことの多い世界である。いいかえれば、論理よりも相手の心を傷つけないことに気を使う世界である。したがって、深入りしてつき合うとホンネが出て人の和がくずれる危険がある。この世界では、フォーマルな表現、婉曲な表現、つつしみ深い表現が好まれる。「敬語」はこの世界で精巧に発達している。」

日本人の成人(社会人)は、家庭を一步出れば、一日の大半をこのBの世界で過ごすといえる。つき合う相手を目上としてとらえるか否か、改まった姿勢でのぞむか否か等が狭義の敬語や婉曲な表現によって細かく表現し分けられる。第I章の5.で紹介した「日本人とのつきあいではことばに疲れる」という外国人の述懐はこれに相当する。

これに対して、アメリカ人は境界がはっきりしない点で日本人と大きく異なる。井出氏が述べている通り、「地位が上、初対面というフォーマルなつき

合いがないわけではないが、日本人にくらべずっと少ない。地位や職業よりも中身でとらえることにウエイトがおかれる。したがって、フォーマルな表現にとらわれず、Aと同様に強くすすめる表現、親愛表現が好まれる。はっきり話すことをよしとするのは、相手がだれであれ、相手との心理的距離を縮めて話すことをよしとし、自分のいうことをよく理解してくれるようにとのこころづかいから生まれる。」

以上のように、日本人のAの世界のことばづかいとBの世界とのことばづかいは、かなり顕著に対立している。井出氏によれば「A（ウチ）の世界のことばづかいでB（ソト）の人びとと接すれば、横柄で、不作法で、無教養と判断されがちである。反対に、Bの世界のことばづかいをAの世界に持ち込めば、水臭い、他人行儀だ、お上品ぶっていると非難されやすい。」このAとBの差異は、日本人にとっては成長するにつれて、つまり社会との関係が密になるにつれて、他律的にも自律的にも習得される。外国人にとってはこの境界の理解にはふつう適切な指導か、各種の人間関係とことばづかいのあり方を体験してみる努力が要求される。対教師、対友人というような限られた対人関係のみでは、限られたことばづかいしか身につかないことはいうまでもない。

上記のA・Bの差をひとことでいえば、Aはダの世界であり、Bはデス・マスの世界である。

なお、上図についてつけ加えておかなければならないことは、Bの外側にも世界Cがあることである。見知らない人、行きずりの人、しかも利害関係のない人の世界である。この世界の人に対することばづかいは、エチケットを守る意識はあるが、個人差が大きい。井出氏によれば、この世界の人に対する待遇行動は「無視・無言・つけんどん」が基本であるという。初めての人に話しかけるのは、日本人一般に、たいへん苦手であるといっている。日本人に知人・友人を持たない外国人はつねにこのCの世界の者として待遇されることになる。日本人どうしのこの場合のことばづかいは、一般的に、デス・マス体が基本であるといつてよいが、相手の外観等から即座に判断してデス・マス体を守るとはかぎらない。この事実は学習者のことばづかいを混

乱させる。

日本に來た外国人は、對日本人との言語行動において、かなり長いあいだ、この三重構造のBまたはCの世界の位置づけられているのが普通である。上図のアメリカ人にかぎらず、アメリカ人の場合と類似の人格構造や言語行動の様式をもった学習者は、その者が積極的な行動をする性格の持ち主であればあるほど、日本人の行動様式とのあいだにギャップを生じやすいことになる。この場合、無教養で無作法と判断されるよりも、水くさい、他人行儀と判断されるほうが、はるかに安全なのである。ある程度の丁寧表現を主体として教える教育の基本はこんなところにある。

ただし、一般の日本人が、外国人なるがゆえに、つまり日本語はよくできなくて当たり前だという先入観のために、外国人がどのようなことばづかいをしても寛大な態度をとる傾向は大いにある。この寛大な態度は、かえって、近づきになる意志もなければ、その必要も感じない場合の〈ヨソ者扱い〉の態度を示していることになるが、日本人はこれに気づいていない。意識的にも無意識的にも外国人をBまたはCの世界に追いやっていることを意味している。日本語のうまいヘンナ外人とは、おそらく、BまたはCにいるはずの者にAの世界(この場合は日本人全体の世界、つまり仲間うちの世界)に入りこまれたような気がする意識の表れである。

一方、アメリカ人のAの世界は広い。井出氏によれば、「知っている人、知らない人をあまり区別することなく、自己に引きよせて、親しくつき合う傾向がある。そこでは、はっきり話すことをよしとし、相手がだれであっても、心理的距離を縮めて話すことをよしとする。これは自分のいうことをよく理解してくれるようにとの心づかいから生まれる。しかし「自己」のプライバシーはしっかり守る」という。また、「外国へ行った日本人が、交際べたあるいは無礼だと思われるとすれば、身についた日本式ソトのパターンで行動するからだ」という。このことは、パーティーなどで日本人は自己の知人がいないと壁の花になりやすいことによく現れている。

日・外の違いについて、筆者の学生も興味ぶかい体験をしている。小学校

の低学年まで日本で育ち、子どもことば—インフォーマルな言い方—を身につけたまま、その後オーストラリアで教育を受け、留学生として来日した女子学生は、来日当初かつての日本の友人に親しく話しかけると「あなたはもう大人なんだから、そのことばづかいは…」となんども注意されたり、オーストラリアの考え方で日本人に接し、なんどはねかえされたかしれない、と述懐している。

7. ソトからウチへの過程

では、アメリカ型の人格構造を持つ外国人は、いつ、日本式Aの世界でのことばづかいが許されるのだろうか。これは、日本語にある程度上達し、日本人とのつきあいをできるだけ深いものにしたいと望んでいる学習者のもっとも大きな関心を示す事項である。

Aの世界のことばづかいがゆるされるのは、酒の席などの特殊な雰囲気や、一時的な珍客というもののめずらしさや、子どもを相手にする場合などを別にすれば、日本人がソトからウチに移行する場合と基本的に同じと考えてよいだろう。つまり、長いつき合いが必要である。相手の職業や地位や経歴や性格を見極めないと不安がつきまとう。むろん、相互の人となりによって親しくつき合えるまでの期間には長短の差はあるが、一般的に、同じつき合いのくりかえしがあったり、人を介しての紹介で互いの背景をよく知っていたり、偶然のできごとで心理的に強く結びつけられる経験があったりしなければならぬ。一言でいえば、日本人は相手の背景とくにプライバシーに関することまで知らなければ、親しくつき合うことは不安なのである。逆にいえば、プライバシーに関することまで知って、はじめてウチ扱いの対象とすることができるのである。「どこの馬の骨か分からない」のでは困るのである。欧米人のように、出会ったばかりの他人を自宅に招いたり宿泊させるといようなことは、日本人にはなかなかできない。だから、外国人がしばしば、日本人はプライベートなことまで聞いて失礼だ、という感想をもらすが、この日本人の対人意識を説明する必要がある。相手のプライバシーに関することま

で知ろうとするのは、相手をウチに引きよせるための日本人的な無意識の入門儀式であるといえないこともない。

しかも、この場合、ことばづかいはフォーマルからインフォーマルへと「徐々に」変化しなければならない。つまり、フォーマルな言い方を基調としながら、話題や雰囲気に応じて少しずつインフォーマルな言い方を混ぜていくことが必要なのである。急激な転換は聞き手に不安感を起こさせる。日本人にとっては、はじめから「Mio amico! わが友だちよ」のような話しかけは不可能なのである。さらに、インフォーマルが基調になったと思われる段階では、時と場合に応じて、またフォーマルな言い方を混ぜる配慮が必要なのである。これは日本人の人間関係保持の在り方であるといえると思う。「親しき仲にも礼儀あり」は現在でも日本人に好まれる心情なのである。このことは異文化をもつ学習者にならずしも分かりやすいことではない。

学生どうしが比較的はやくから、時によっては出会いの最初から、インフォーマルな言い方をするのは、いわゆる社会人になりきっていないこと、年齢や学習目的など、類似の基盤をいくつも持ち合わせているので、ウチ扱いが早くしやすくなるからである。一般社会人のように、成人であるうえに、付き合いの相手が多様ではないという対人関係の均質性のためである。とはいえ、学年がちがったり友だちでもなければ、相当にフォーマルな話し方をする場合の多いのもまた実態である。

日本人の人間関係がかなり固定的であることは、言語的には人称詞にその特徴を見ることができる(鈴木孝夫1973)。二人称代名詞に二種類(以上)あるドイツ語やフランス語やその他いくつかのヨーロッパ語の話者が、初対面からかなり早い時期に、たとえばイタリア語で、Lei(あなた)ではなくtu(きみ)で呼んでよいかと提案し、同意すれば(一種の契約が成立すれば)、それが一生涯つづくのと比べれば、日本人との差異がよくわかる。日本人の場合は、ある臨時的な場で互いに親しいことばづかいをしたとしても、ひとたびその場をはなれば、またもとのことばづかいにもどらなければならない。

日本における一少なくとも成人を対象とする学校などにおける一教師と学

生との通常の関係は、互いに相手をソトに位置づけているといつてよいものであろう。むろん、対個人の場合と対多数の場合とで、あるいは状況や話題によって、差があることは事実であろうが、教師側の学生に対するデス・マスだけではなく敬語使用の実態は、学生をソトに位置づけているとしなければ、説明がつけにくいと考えられる。また、家族と友人（親友）とを日本人のウチ扱いの典型とする井出氏の考えが妥当なことは、たとえばウチとソトのちょうど境界に位置するような「親戚」や「義理の親族」間のことばづかいが、下位の年代の相手に対してさえも、一般に相当に丁寧であることを見てもわかる。

8. ウチ・ソトの応用——二次的ウチの形成——

三重構造の図はまた、A(ウチ)の位置に、話し手の所属する組織や団体や地域を置き、相手側をB(ソト)に置いて、応用することができる。直接の上司のことに言及するのにソトに対しては敬語を使わないのは、家族や友人をウチ扱いすることの援用である。

Aを本来のウチまたは〈一次的ウチ〉（または絶対的ウチ）とすれば、この援用されたウチを〈二次的ウチ〉（または相対的ウチ）と呼ぶことができる。この二次的ウチは、いわば、ソトに対する一時的な仮面である。したがって、この二次的ウチを一次的ウチと同一扱いすることは、話し手個人にとってかなり心理的抵抗があるとされるが(国立国語研究所1957)、現在ではそれがことばづかいの規範意識になりつつあるように見える。人事管理や社員教育のきびしい団体・会社ほどこの傾向は強いようであり、それによって自己の団体・会社の品位を示そうとしていると見ることができる。ただ、「学校」の教師のあいだでは、この二次的ウチは概して構成されにくいように見える。教育機関としての人的構成の特殊性(教師と弟子という各種上下関係の強固さ)は、ソトの関係者(父兄など)に対しても仲間うちの扱いの変更をしにくいものなのであろう。さらに「先生」という便利なことばがこの変更を抑制しているのかもしれない。

二次的ウチの構成に価値観をおく団体等が広がっていることは、敬語の用法を相対化させる傾向をいっそう強めていると同時に、日本人の敬語意識(価値観)を伝統的なものから大きく変化させていると見ることができる。一言でいえば、「敬語」ということばが急激に古くさいもの、あるいは形骸化したものとなり、礼儀・作法あるいはエチケットとしてのことばづかいであるという意識が一般的になりつつあるといえる。

しかしまだ、この場合のウチ・ソトは日本人の言語行動の社会的規範として定着してしまったといえる段階ではなく、なお不安定な状態であるから、現実には敬語使用に関してかなりむずかしい問題が(場合によっては悲喜劇が)起きることがある。たとえば、社長の家族や友人から社長のことで電話がかかってきた場合、応対する社員はどのようなことばづかいをしてよいかわからず、とまどったり、失敗したり、あるいは周囲の者に不快感を与えたりすることがある。

学習者のなかには、この応用された二次的ウチとソトの関係を絶対的なものと誤解している場合があり、ソトの聞き手に対しウチの者についての敬語が出てくると、強い疑問を抱いたり、みずからその場面にぶつかると、どういってよいかわからず口をつぐんでしまうことがある。現代小説にソトの聞き手に対して身内敬語が出てくる場合(たとえば親子間や夫婦間の敬語)にも、同様な疑問を抱くことがよくある。

また、たとえば、学習者が通訳として自国の複数の上司を案内してくる場合、案内者は自国側に立つべきか目の前の自分の教師側に立つべきか、つまりどちらをウチ(あるいはソト)扱いにすべきか、仮に自国側をウチ扱いにしたとしても目の前にいる上司についての敬意表現はどの程度にすべきか、という質問をよく受ける。これは、通訳者の熟練の問題ではあるが、現実にはどちら側の人物でもない(どちら側からもソトの人物)という中庸の立場には立ちにくいことを示している。さきの南氏のマトモの相手とワキの相手とのカテゴリーに属する。

上・下の原理に基づく伝統的な用法(絶対的用法)とウチ・ソトを基本と

する現代的用法（相対的用法）とは混在しているのが現実であり、規範的指導をいっそうむずかしくしている。

9. ウチ・ソトと上・下のからみあい

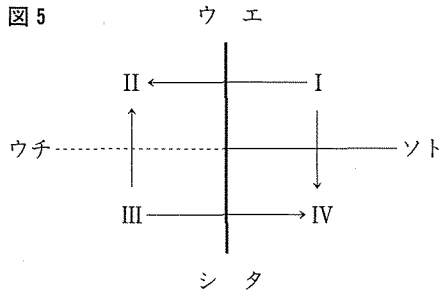
現代の敬語使用が階級等と結びついた固定的な使用ではなく、場面によって変動する敬語使用、つまり社会的・心理的へだたりに応じて使い分ける敬語であることは、ほぼ常識になってきている。柴田武(1988)では、この社会的・心理的へだたりを規定する条件として、次のように大きく二つに、細かくは五つに整理している。

- | | |
|----------|--------------|
| 1. ウエ・シタ | 1) 年上・年下 |
| | 2) 性（男・女） |
| | 3) 社会的地位の上・下 |
| 2. ウチ・ソト | 1) 親疎 |
| | 2) 集団の内・外 |

この場合、社会的・心理的へだたりは「ウエ」と「ソト」が遠く、「ウチ」と「シタ」が近いという関係にあり、敬語使用と深く結びついているとしている。

本書の立場も基本的にこれと同じであるが、すでに述べたように、敬語指導のストラテジーとしては「ウチ・ソト」を使用条件の最初に持ってきたほうが有効であると考えている。異文化を背負う学習者も「ウエ・シタ」は分かりやすいが、日本的「ウチ・ソト」の概念と言語行動は相当に理解しにくいものだからである。日本語の待遇表現を全体としてみれば、ウチ・ソトとウエ・シタとは相乗的であるが、個々の話し手と聞き手とが作りだす言語場面は、一次的ウチとソトの別を第一の選択とし、ウチの世界での上下・親疎等、ソトの世界での上下・親疎等に支配されていると考えたい。この考えは文化庁（1976）と基本的には同じである。図示すれば、つぎのようになる。

図 5



まず、ウチとソトが太い実線で分割され、ウチにおける上・下は細い点線で、ソトにおける上・下は細い実線で区別される。したがって、敬語使用との関係は次のことを意味する。

ウチ：上下関係無視と敬語無使用が原則

ソト：上下関係配慮と敬語使用が原則

したがって、家族と友人（親友）を一次的ウチ扱いの典型とすれば、それ以外の知人・同僚・上司などはソト扱いになるわけであるから、知人・同僚などに対する言語行動は原則的に丁寧になる。これを丁寧さから見たことばの使い分けの基本線と考えるわけである。ただ、このソトには、さらに「親疎」がくわり、話し手の相手に対する心理的な〈ひきよせ〉〈ひきはなし〉が行われる。これが敬語表現を複雑なものにしている。また、人間関係を第I象限と第III象限のみで処理できるならば絶対敬語的であろうが、第II象限と第IV象限の存在が敬語使用を複雑にしている。II（ウチで上）には、I（ソトで上）とIII（ウチで下）に対することばづかいと類似のものが、IV（ソトで下）にも、IとIIIに対するものと類似のものが流れ込み混在しているといえることができる。人間関係の多様性に比べてことばの有限性からくる相克といえることができる。ただし、IIとIVでは、ウエ・シタよりもウチ・ソトの区別を優勢として扱う。前述の三重の同心円にあてはめれば、IIはソトに近い

ウチであり、IVはウチに近いソトである。

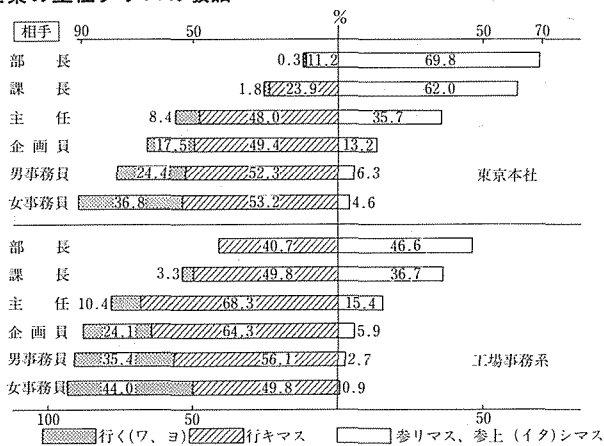
II（ウチ＋上）：敬語無使用が原則で状況により敬語使用

IV（ソト＋下）：敬語使用が原則で状況により敬語無使用

ただ、同じウチ扱いだとしても、現実には家族どうしと友人どうしとはつねに同じことばづかいであるというわけではない。家族どうしのほうが、くつろいだ時以外は、生得的上下関係や役割的上下関係が持ち込まれやすいであろう。これに対して、友人は友人になること自体、各種の上下関係が超越されなければならないという性質をもっているので、言語待遇の変容の差も小さいといえると思う。若い学習者が「友だちことば」をはやく身につけるのはこのためである。現実には公私の場面差やワキの聞き手の有無などによる制御が大きいので、日本語に上達し対人関係の幅が広がると、かえって、ことばの基本的な使い分けがわかりにくくなっていくようである。

このわかりにくくなる主たる理由は、同一の場面であっても多様な表現形式が現れるためであるが、どのように多様か、多様のなかにもどのような傾

図6 企業の主任クラスの敬語 (杉) 清樹「職場敬語の一実態」(1979)



向があるかについては、国立国語研究所の各種の敬語調査や、柴田武監修・荻野綱男・他『都市の敬語の社会言語学的研究』（1980）がよい参考になる。特に後者はウエ・シタとウチ・ソトのからみあいの観点からも調査がなされている。

また、ソトと関係ない場合の「集団の内」では、上下関係がきわめて優勢にはたっていることが、国立国語研究所『企業の中の敬語』（1982）で詳細に分析されている。図6は杉戸（1979）に収められたその分析結果の一部である。

10. 学習者の質問

ウチ・ソトと上・下等に関連して、学習者からよく出される質問がある。話し手と聞き手と話題の人物との関係についてである。この三者の関係については、別にくわしく扱わなければならないが、教師は次のような質問にいつもさらされている。

- (イ) ふだん敬語を使わない親しい後輩に電話をかけたが、電話口に出た人が母親か父親であるとき、後輩のことをどう表現するか。
- (ロ) ふだん敬語を使わない親しい先輩に電話をかけて、電話口に出たのが、その弟か妹であるとき、先輩のことをどう表現するか。
- (ハ) ふだん敬語を使わない親しい後輩に電話をかけて、電話口に出たのが、弟か妹であるとき、後輩のことをどう表現するか。

日本人からも類似の質問がある。ウチ・ソトと上・下のからみあいからくるとまどいの質問である。いずれも、現実には、いくつもの条件が前提となるから、表現は一樣とはいいがたい。たとえば、電話の主（話し手）と相手（聞き手：親や弟妹）とが、これまでどのようなつき合いがあったか、どのようなことばづかいをしていたか、など。いまこれを考慮に入れず、はじめての相手として原則的な結論をいえば、次のようになろう。原則的とは、相手

に不快な思いをさせないということである。

(イ)〈先輩(話し手)→後輩の親(聞き手)、話題後輩〉

聞き手が〈ソト+上〉である。したがって、父親や母親に合わせた言い方、つまり初対面の相手としての言い方がふつうであろう。親ばかりでなく、ふだんはウチ扱いの後輩も〈ソト〉扱いすると同時に、相手の家族内では〈上〉、つまり親に焦点を合わせる。ただし、話し手が自分の子どもの先輩であることを分からせれば、後輩(話題の人物)に尊敬語を多用する必要はない。

この問題について、大学3・4年の日本人学生26人(うち女性14人)にアンケートを試みた結果は次のようであった。先輩・後輩はいずれも男性と仮定した。(例「〇〇君／さんはいるか」の「いる」の部分をどうか、について。派生形などを含める)

「〇〇君／さんはいらっしゃいますか」……………22人(うち女性14人)

「〇〇君はいますか」……………4人(男性のみ)

(ロ)〈後輩(話し手)→先輩の弟／妹(聞き手)、話題先輩〉

弟・妹は〈ソト+下〉であるが、初めての話し相手だとすれば〈ソト〉が優勢にはたらく。したがって、ふだん敬語を使わない先輩も弟・妹側として〈ソト〉扱いをする。ソト扱いされた先輩に焦点を当てて、そのものいいを弟・妹にも適用する。ただし、弟・妹が小学生以下ぐらいの子どもであれば、丁寧度は高くなくてもよいし、親愛の表現が出てくる可能性も十分にある。

(相手が小学生ぐらいと仮定して)

「〇〇さんはいらっしゃいますか」……………12人(うち女性10人)

「〇〇さんはいますか」……………10人(うち女性4人)

「〇〇さん、いる?」……………4人(男性のみ)

(イ)〈先輩(話し手)→後輩の弟／妹(聞き手)、話題後輩〉

(イ)や(ロ)に比べれば、改まり(フォーマリティ)の度合いは低くてさしつかえないが、弟・妹が成人であれば、相手側すべてが〈ソト〉扱いであり、後輩は相手側(弟・妹)の〈上〉として扱わなければならない。(相手は小学

生ぐらいと仮定)

「〇〇さんはいらっしゃいますか」…………… 10人 (女性のみ)

「〇〇さん、いらっしゃるか？」…………… 4人 (女性のみ)

「〇〇さん／君はいますか」…………… 8人 (男性のみ)

「〇〇さん／君、いる？」…………… 4人 (男性のみ)

このような少人数では一般的傾向をうんぬんすることはできないが、ある傾向は示していよう。ただ、「いる／いらっしゃるか」という使いなれたことばであること、大学生でしかも女子学生が多いということは考慮しなければならないだろう。

上記(i) (ii) (iii)のいずれの場合も、聞き手の扱いは、年齢の上下にかかわらず、最低限デス・マス体は守るべき世界の相手と見ていることを示している。学習者は、一時期、たまたま接する日本人の言い方を傍聴することだけで適否を判断しがちであり、異なる言い方を体験すると、強い疑問を抱くことがよくある。

次のような表現の例は、学習者がしばしばaかbの一方を間違いだとしてしまいがちである。

〈平社員 → 課長〉「では課長、社長によろしく { a.おっしゃって
b.申し上げて } ください。」

この場合、現実にはa・bの両方が使われているだろう。ただし、若い人ほどaが多く、bについては判断できない人が多い。つまり、現代の敬語の用法では、直接の聞き手に配慮が集中し、第三者(話題の人物)は無視される傾向が強いことは、しばしば指摘されるとおりである。これに対し、従来の説明はおおよそ次のようなものであった。

aの場合は「おっしゃって」で課長を上げ、「ください」という直接的な依頼で再度課長を上げているから、社長はまったく無視されることになり、適

当ではない。一方、bの「申し上げて」を使用すれば、課長をいったん下げて、社長に配慮を示し（相対的に社長を上げ）、「ください」で課長を上げているから、双方に配慮したことになり、bのほうが妥当である（大石初太郎1975参照）。これは、尊敬語と謙譲語の用法を上下関係に結びつけた伝統的解釈である。これに対し、ウチ・ソトを基盤にして、次のような説明も可能である。

平社員から見て、聞き手の課長は同一社内であるとはいえ家族でも親友でもないから、ソト扱いが妥当である。そこにさらに職階上の上下関係が加わり、上の課長を動作主としての表現であるから、尊敬語が妥当である。社長も当然ソトであるが、社長を動作主とする表現が必要でないかぎり、課長と社長との上下関係に配慮する必要はない。従って、

「社長がそうおっしゃっていましたから、課長からよろしく申し上げてください」

では、話し手は課長を相対的にウチ扱いにして（ひきよせて）、社長のソト扱いを際立たせているということもできる。この場合、「社長がそうおっしゃっていましたから、課長からよろしくおっしゃってください」では、かえって不自然であろう。つまり、ソトどうしの二者の扱いで区別が必要な場合は、話し手により近いほうをウチ扱いにしてさしつかえないといえる。課長は話し手より上位者だから謙譲語を使ってはならないと理解している者も少なくない。このことは、「やり・もらい」の表現でいっそうはっきりする。一例だけ挙げておく。

〈学生 → 教師〉「先生、これをばっちゃんにさしあげてください」

（プレゼントの依頼）

これが誤用でないかぎり、あるいは、「さしあげる」を「謙譲語」と規定し

ているかぎり、「先生」（動作主）の行為に「謙讓語」を使った理由を説明しなければならない。（この「やり・もらい」の問題については、下巻で取り上げる）

V 敬語のはたらき

1. 現代敬語の性格

敬語が基本的に対人関係のちがいに応じて使い分けられることを理解したとして、学習者がつぎにいただく疑問は、敬語の意味・機能についてである。

現代の敬語をどのような性格のものとしてとらえるかは、人それぞれの敬語意識によって異なると思われる。第二次大戦終結前まで存続したとっていいであろう一般的な敬語観（つまり、目上を尊ぶ日本人の醇風美俗をそのまま反映したもの、という敬語観）は、現在どれほど残っているかわからないが、「敬語」という字面やその説明に影響されて意識されるものとは相当に異なっているはずである。

宮地裕（1983）には、つぎのように述べられている。

現代敬語は「敬の言葉」というよりは「礼の言葉」というほうが、より適切のように思われる。敬語を使う意識を内省すると、「うやまう気持ちから使う」とか「尊敬をあらわすために使う」とかいうよりも、「礼儀として使う」というほうが、よほどぴったりする。見知らぬ人と話すときのことをかんがえても、教師と学生との話の場面をかんがえても、たがいに礼儀として、多くは「です・ます」調の敬語を使っているのであって、別に、うやまうとか尊敬するとかいう意識を持って使っているわけではない。『これからの敬語』（昭和27年、国語審議会建議）の「各人の基本的人格を尊重する相互尊敬」という表現は、当時としては精一杯のものだったろうが、これを、相互に尊敬しあうとか相互に敬讓の意をあらわすとかという意味よりも、相互に人格をみつめあうとか、相互に礼儀正しくするとかいう意味のほうに解すれば、三十数年後の現在では、望ましいことという段階を越えて、実情に合ったことになってきていると言えるのではないかとおもう。（引用者注：『これからの敬語』については、下巻の付録参照）

こうした見方は現代敬語の性格を適切にとらえていると思われるが、これに反対する見方もある。たとえば、荒木博之（1983）では、これまでの敬語研究は言語論の立場からばかりで、「人間行動」としてみる文化論の視点が欠けており、日本の「敬語」は、単なるエチケットや形式的な礼儀といったレベルを越えたダイナミックな行動論と積極的にかかわっているもので、それが日本文化の繁栄を支える原動力になっているとして、宮地氏の見方に反対している。

両氏は敬語へのアプローチの方法がちがうわけであるが、いずれの立場に立つかは、実際の言語指導に微妙に影響する。むろん、両氏の見解は日本語教育のことまで考慮にいたしたものではないが、教師の敬語観の形成にとっては大切なことである。宮地氏の見方に立てば、礼ないしエチケットのことばとして、学習者の言語行動のうえで最低限守らなければならない敬語表現は何か、の追究が重視されることになろうし、複雑な敬語表現は要求しない立場に立つことになろう。これは他人のことばづかいには比較的に寛大な態度をとることになるかもしれない。一方、荒木氏の考え方に立てば、日本人の敬語的行動様式を重視して、日本人らしさや、比較的高度な敬語表現の使用も要求することになるかもしれない。両氏の差は、当然、敬語的随伴行動や非言語行動の重視のしかたにもかかわる。筆者は宮地氏の見解に大きく傾くが、教育の現場では文化論の説明が学習者の関心をひくことも事実である。

2. 敬語のはたらき (1)

尊敬語、謙譲語、丁寧語というような伝統的な分類は、「語」の基本的な意味による分類であるが、それらが統合的に、「談話」のなかで用いられたとき、どのような作用をするだろうか。敬語の「はたらき」ということを考えるとときの興味ぶかい例があるので、すこし古い例ではあるが、紹介する。奥山益朗（1969）につぎのような記述（体験談）がある。

私が大学を卒業する直前、つてがあってある華族さんの奥さまに会っ

たことがあった。こちらは就職依頼の一学生である。しかし、その奥さまは、実に美しいことばで、一介の書生を扱った。

「……お話のこと、よくわかりました。主人に申して、なるべく早くお目にかかるように伝えましょう。だんだん世の中が厳しくなって、大変でいらっしゃることもね。わざわざお運びいただいて、恐れ入りました」

である。この流暢な美しいことばに、私はものすごい卑屈感を感じたのである。

この体験は昭和十年代後半のものと推測されるが、これについて奥山氏は、「分析すれば数多い敬語の連続である。恐らく、自家の使用人には使わないことばだろう。しかし、この丁寧語（引用者注：「ます」のこと）が、決して真の意味で丁寧ではないことも明かである。自分より目下の客ではあるが、自分の上位さを、いいことばで押しつける「いんぎん無礼型」である」と述べ、さらに、ここに使われている尊敬語や謙譲語や丁寧語は、「ワン・セットのことばとなると、たとえば「自尊心語」とでもいっていいことばになっている。むしろこの敬語は、相手を恐縮させ、むしろ下位に置く役割を果たしている」と述べている。

これはいろいろなことを意味している例である。現在この夫人のような話し方をする人は、いたとしてもごく一部にすぎないであろうが、相手を尊敬するはずの敬語表現が、相手を見下す印象を与えていることは、敬語のはたらきの一つの特徴を示している。話す本人に見下す意識がないとしても、受け手がそのように感じる場所に特徴がある。この特徴を敬語のはたらきの持つかなり大きな側面としてとらえるか、特殊な側面としてとらえるかは、現代日本人の敬語意識のとらえ方に影響する。

もし、同一の例が現在もあるとすれば、夫人の学生に対する位置づけは、前章で述べた敬語使用の条件の〈ソト＋シタ〉に相当する。ただし、ソトにおける上下の認識は無視され、もっぱらソト扱いで、女性の立場から、一定

の社会階級に属する者としての「品位」や「教養」が誇示されていると見ることができる。しかし、みずからのことばを品よくすることによって、属する階層や品位や威厳や、時として尊大さをも誇示することは、日本語だけにかぎった問題ではない。しかも、この例は一定の丁寧さのレベルで統一されているので、学習者にとっても、敬語のはたらきについての基礎的な知識があったり、母語を反省することができれば、見下されたという印象も分かりにくいものではない。

しかし、現代の敬語使用は、原則的にウチ・ソトにウエ・シタがからみ合うかたちで行われているうえに、より公的な場かより私的な場かという状況がおおいかぶさっている。しかもそうした人間関係や状況に表現形式が一对一で対応しているわけではないから、日本人はどのような意識や意図で敬語を使用しているか、学習者は理解に苦しみ不安をいだく場合が多い。

3. 敬語のはたらき(2)

不安の端的な例は、すでに触れたが、ウチでシタと考えられる対象（たとえば、家族や仲間うち）に対して敬語が用いられたり、ソトでウエと考えられる対象、たとえば、テレビの若いタレントなどが視聴者を意識するはずの公の場（と学習者は考える）で、お笑い番組でなくても、年配の司会者に対して、くだけた、あるいはぞんざいな、ものいいをしたりする場合である。これは、敬語を上下または親疎で一義的に理解している場合の疑問である。簡単にいえば、敬語形式と非敬語形式の原則的な用法と現実の用法との差異からくるとまどいである。

言語行動のなかに占める敬語行動の役割を、つまり日本人の敬語使用の価値観を、学習者に納得のいくかたちで説明することは、個々の例にあたり、かならずしも容易ではない。個人差が大きいという実情もある。したがって、敬語とは何か、という本質論に立ち帰らざるをえない必要にせまられる。本質論とまでいわなくても、敬語が現にどのような意味あいでも用いられているか、どのようなはたらきや効果を持つものとして存在しているか、について

の基本的知識を与える必要にせまられる。

敬語のはたらき、あるいは敬語意識、または敬語の目的について、第二次大戦後の主な解釈としては次のものがある。前章に紹介した南氏の「扱い方の特徴」も、待遇態度を示すという意味で、敬語のはたらきに深く関係する。

1) 辻村敏樹氏の五つの分類（辻村1956）

- ①上下の識別による慣習的敬語 ②恩恵者・優位者に対する敬語
- ③親しくない者に対する敬語 ④品格保持のための敬語
- ⑤自己に用いる敬語

2) 山崎久之氏の五つの分類（山崎・三宅1957）

- ①身分上下の関係による敬語 ②恩恵者・優位者に対する敬語
- ③敬遠の敬語 ④品格保持のための敬語 ⑤親愛の情を表す表現

3) 大石初太郎氏の五つの分類（大石1975）

- ①あがめ ②へだて ③あらたまり ④威厳・品位・軽蔑・皮肉
- ⑤親愛

4) 北原保雄氏の五つの分類（北原1988）

- ①尊敬 ②あらたまり ③疎遠 ④品格保持 ⑤優しさ

5) 柴田武氏の「敬語の目的」（柴田1988）

- ①相手を尊敬する、あるいは敬遠、疎外する ②表現を美化する

いうまでもなく、これらの諸特徴は主として談話レベルの分析から出てくることである。辻村氏と山崎氏、および大石氏と北原氏の分類はおなじであるといってさしつかえないと思われるが、大石氏は「軽蔑・皮肉」という敬語の応用的なはたらきもふくめている。柴田氏は分類の方法は異なるが、その内容は他の四者とほぼおなじとといっていい。以上の五氏のうち、現代敬語の〈使い道〉をもっとも具体的に説明しているのは大石（1975）である。

五氏に共通している現代の敬語意識の構成要素は、「尊敬（あがめ）」「敬遠（へだて）」「品位（品格保持）」「あらたまり」「美化」であり、三氏はこれに

「親愛」をつけ加えている。ただし、この「親愛」という用語を立てていなくても、「美化」や「品格保持」にふくめる場合も多いから、五氏の分類は大体において同じものということができる。これらはいずれも独立的に存在しているわけではなく〈敬意〉を伝統的基層として派生した複合的なものであり、相手や場面に応じて、つまり表層において、いずれかの側面が優勢にはたっている（はたらかせている）とみるべきであろう。

しかしおそらく、戦後育ちの世代の大部分の者にとっての敬語意識は、「あらたまり」「へだて」が中心的なものであり、「品位」「美化」「親愛」がそれにつき、「あがめ」は〈敬語〉ということばかりくる、与えられた感覚にすぎないものになっているのではなかろうか。実態調査が必要なことはいうまでもないが、思い切って段階づけをしてみれば、

あらたまり > へだて > 品位 > 美化 > 親愛

という順序が現代敬語の使用意識を構成しているのではなかろうか。ヒエラルキーを構成しているとまではいえないあいまいさや複合性はあるとしても、若い世代ほどこの意識はつよいように見える。これは、前記五氏の挙げた順序とは一致しない。またあえていえば、デス・マスなどのいわゆる丁寧語が「あらたまり」「へだて」を表明するもっとも基本的な手段であり、いわゆる「尊敬語」「謙譲語」が「品位」「美化」「親愛」を表明する手段と化しているように見える。「あがめ」はもっとも弱い存在となっているのではなかろうか。

これはまた、非敬語表現（対等語、軽卑語などによる）がつぎのようなはたらきを持っていることと対比させてみれば分かりやすいであろう。

近づき > くだけ > ぞんざい > 見下し > 軽蔑

いわゆる対等語（普通語）は、待遇上の基本的なはたらきは「中立」であ

るが、敬語と対比的に用いられれば、とたんにマイナスに転化する。いわゆる軽卑語は敬語と逆の方向に〈距離をおく〉ものとして作用する。

事実、前記五氏の挙げたはたらきのうちでは、学習者にとって、「あらたまり」と「品位」と「美化」とは一種の教養を示すはたらきとして納得しやすい傾向がある。わかりにくいのは「親愛」（優しき、近づき）である。これは「あがめ（尊敬）」や「へだて（敬遠）」と互いに矛盾しているように見えるからであるし、「親愛」はむしろ非敬語表現の持つ基本的なはたらきであることを知っているからである。その意味で敬語の「親愛」は非敬語の「近づき」とほとんど同義に解釈する。敬語のはたらきに「親愛」を加えるとすれば、大石氏のように「軽蔑・皮肉」と同時に挙げなければならないものであろう。敬語形式と非敬語形式とは、その待遇態度において、この「親愛」を軸としてつながっているように思われる。

敬語のはたらき → 親愛 ← 非敬語のはたらき
(遠ざけ) (近づき) (遠ざけ)

このことは、敬語も非敬語も互いに逆方向にむけて〈距離をおく〉作用になるものであると同時に、言語行動意識の一側面としての「親愛」と「近づき」という価値観を大きな〈求心力〉として、敬語形式と非敬語形式とは互いにつながっているといえる。つまり、敬語形式と非敬語形式とはともに「親愛」「近づき」の作用をセーフティー・ゾーン（安全地帯）として共有し、その両側を構成していると見られる。したがって、〈適度な〉敬語使用は聞き手に好ましい感覚をあたえ、話し手に対する信頼と親愛につながり、音調等に配慮した非敬語の使用もまた信頼と親愛にとってなんらの障害とならないのであろう。同様に〈遠心力〉としてはたらく尊敬語・謙譲語や軽卑語は、現代の言語使用の価値観から次第に遠ざかるものになっていると考えられる。

なお、南氏の「扱い方の特徴」は、以上のようなはたらきの基本にあるも

のを〈語彙レベル〉で理論化し体系化したものといえる。この意味特徴のなかでは、学習者は〈負わせ〉と〈間接〉にわかりにくい傾向を見せる。〈負わせ〉がわかりにくいのは、授受表現の複雑さ、特にその心理的用法のわかりにくさと関係している。たとえば、「～します」でよいところを、なぜ「～させていただきます」というのか、など。〈間接〉がわかりにくいのは、あいまい表現や婉曲表現の真意のわかりにくさからである。したがって、この「扱い方の特徴」は、ある形式のもつ待遇上の基本的意味を理解するには大いに役立つが、談話レベルの理解には、上述のような各種のはたらきの観点を付加する必要がでてくる。

以下、学習者に最低留意させたいことについて述べる。

4. 敬意と敬語

まず、〈敬意〉と〈敬語〉とは直接の関係はないということである。

前述のような敬語の持つはたらきをくわしく知るまでは、学習者は敬語を字義どおりに解釈しがちだからである。敬語が敬意に基づいて使われるものならば、心理的にはともかく、社会的には絶対敬語的であろう。

すでに第Ⅰ章の5でもふれたが、敬語は日本人の存在証明の方法とふかかかわっている。さきの華族の夫人の例はわかりやすい例であろう。また、さきに挙げた荒木(1983)では、敬語使用の本質を、文化論の立場から、「自己不在」「他律」としている。つまり「相手に合わせる」こと、「相手の立場を思いやる」ことが〈敬意〉の具体的あらわれの出発点となり、集団主義形成の基となるとしている。しかし、〈敬意〉とは何かについて一義的に答えるのは困難であるので、さしあたって「丁寧さ」の特徴的な一面と考えておく。

日本における社会的拘束力としての敬語使用が、〈敬意〉なるものの言語的表現、あるいはその変容のすがただと仮定すると、この〈敬意〉なるものは、まず、子ども(11、2歳までと仮定)と成人(社会人)とではかなり異なるものと考えられる。

子どもどうしの世界では敬語は必要のないものであるが、その子どもも未

知の相手や大人に対しては、敬語の知識があるかぎり使用する。その使用意識は、上下意識にもとづくというより強弱にもとづく〈恐れ〉であると考えられる。しつけ（とくに小学校入学後の教育）によって獲得されたものであることはもちろんであるが、未知の者や強者に対する恭順の態度を示す本能的自己防衛の現れとして使用されたい。

成人になるに従い、この態度は社会行動上の拘束力として習慣化され、さらにその使用意識は恭順の応用としての、ひろい意味の〈品格保持〉に変質すると考えられる。あいさつ行動とおなじように、相手に敵意のないことの表明と見られる。あえていえば保身術でもある。現代日本人の成人の敬語意識は、時代の推移とともに、この〈品格保持〉が中核になっているといえると思う。この品格保持は、形式的にせよ、相手尊重の態度あるいは礼儀としての態度に直接つながるものであろう。

このことは、狭義の敬語語彙（尊敬語・謙譲語）が、文法的制約のもとにあるとはいえ、その使用意識において、はなはだしく〈美化語化〉ないしく〈丁寧語化〉してきている、つまり聞き手尊重の〈対者敬語化〉してきていることからわかる。かつての階級語・身分語ともいえる敬語が、〈平等〉をめざし、個人の〈独立〉を重んじる社会思想的な人間関係の変化により、階級や上下関係から脱却して、各人の品格保持に移行してきていると見ることができる。

したがって、字義どおりの〈敬意〉と〈敬語〉とは、少なくとも、表層においては、直接の関係はないと見るべきものであろう。いうまでもなく、敬意はあってもそれを表す言語的手段（とくに標準語的手段）を持ちあわせない人びともある。逆に、敬語を多用する人は敬意をつよく持っている人だなどといえないことももちろんである。外国人で敬語を使いまくる者は（敬語理解の不十分さからきているとはいえ）、この敬意と敬語とは直接の関係がないことの端的な証明だといって過言ではないと思う。

筆者自身の経験でいえば、子どものころいわゆる敬語はデス・マスぐらいしか使えなかったと思う。そして学校の教師はたいへん「えらい」人だと信

じきっていた。中学に入学したてのころ、都会の子どもが何人も疎開してきた。かれらは、しばしば、教師の陰口をたたいたが、教師の前では田舎の子がとうてい使えないりっぱな敬語をよく使った。筆者はかれらに、異種の人間であるような恐怖心をいだいたことをよくおぼえている。

ところで、大石（1975）では、「あがめの表現」を敬語の使い道の第一のものとして、〈地位・能力などをあがめる〉〈優位者をあがめる〉〈恩恵を与える者をあがめる〉〈人間の尊重〉の五つをあげている。つまり、いわゆる商業敬語もふくめて、ひろい意味の上位者に対する敬意である。これらの場合に敬語が多用されるのは事実であるが、現代日本人にとっては「あがめる」というより、相手あるいは周囲との円滑な人間関係の保持のために、相手との距離の調節をはかる言語的手段であろう。このことは相対的にみずからを〈下位者におく〉と解釈するよりも、みずからをも〈有利に〉扱おうという戦略であると解釈される。

尊敬語や謙譲語という狭義の敬語が存在する以上、話者の他者に対する何らかの差異の認識の表明であることから逃れられないであろうが、その差異の表明は、上下関係とはあまりかかわりのない人格尊重表現の習慣化といったほうがよいものであろう。「うやまい」や「あがめ」は、伝統的な敬語意識として否定できないとしても、「品格保持のことば」あるいは「礼としてのことば」への変化は、近代以降における〈個〉や〈私〉の確立と平行的な歩みを持つものであろうし、同時に社会全体の都会化や高学歴化がその確立に力をかしているといえよう。このことは、日本の都会化や国際化がすすめばすすむほど、民族語としての敬語もまたその性格を変えていくであろうことを想像させる。第三章で紹介したネウストプニー氏の「より伝統的」な敬語と「より近代的」な敬語との対比的考察が妥当なこともわかる。

こうした考えに立つと、日本語教育における敬語指導も、現実を重んじることを第一としながらも、現実そのものの受容と期待される表現を獲得させるための指導とを混同してはならないことを示していると思う。

5. 「親愛」と敬語

前記3でふれた敬語のはたらきの一つである「親愛」の情の表現は、これまで、子どもに対する敬語使用が主たる例（ちゃん、くん、あげる、ちょうだい、など）として挙げられ、しばしば「親愛語」や「親愛の用法」と名づけられてきたが、学習者は敬語のせまい意味（上下や親疎など）から脱しきれないでいる段階では、この場合にも、なぜ敬語を使う必要があるのかという疑問をいただく。

あいさつ語として早くから教わる「行って（い）らっしゃい」や「お帰りなさい」についても、敬語の知識がふえてくると、命令形としての語形・意味と、実際の使い方との離反に関心をよせるようになる。文脈によっては文字どおり丁寧な命令法であるし、あいさつ表現として使われれば、むしろ「親愛」（または「愛情」）の表現だろうと解釈する。この解釈は正しいだろう。敬語の命令形（なさい、おっしゃい、など）がいわゆる目上には使えないものであることと無関係な用法だからである。定形表現（慣用句）だからということにとどまらず、尊敬語は親愛の表現にも使われるということで納得する。多くの学習者にとって、「親愛」という価値観は「敬意」という価値観と隣り合わせの存在として、理解しやすいようである。

さらに、「あなたも、いらっしゃる？」「めしあがる？」のような表現を、親しいはずの友人や先輩等から、あるいは初対面の年長者から聞くと、敬語の用法について強い疑問をいただく。話し手のおおくは女性である。この場合、初対面の年長者から「いらっしゃいますか」「めしあがりますか」等の語形で聞かれれば、自分にたいして丁寧すぎるという印象はもっても、敬語の使い方にそれほどの疑問はもたない。

尊敬語や謙譲語という狭義の敬語動詞が、マスを伴わないはだかの形（終止形）で用いられるときの日本人の表現意図は、学習者にとってもっともわかりにくいものの一つである。いくつかの理由があるが、まず上で述べたような敬語のはたらきについての理解が不十分だからであり、実際の用法も比較的かぎられているからである。使用者は主に女性であり、親しい間柄や下

位の者にたいする場合、およびフォーマリティーの低い場面での使用がほとんどである。もうひとつの理由は文構造の理解が不十分だからである。敬語動詞を用いた一語文であっても、動作主待遇の部分と聞き手待遇の部分から成り立っているが、動作主が二人称のときは、この部分どうしが相矛盾するように見えるからである（下巻参照）。

親しい者や下位の者に対して用いられるこの〈はだか敬語〉は、おおくの場合、美化語的用法であり、敬意の形をかりて、「品位」や「親愛」の情を示していると見ることができる。

6. 「親切」と敬語

母語に狭義の敬語をもたない学習者の多くがいただくもうひとつの疑問は、「親切」という価値観と敬語との関係である。結論を先にいえば、これも直接的には無関係である。

学習者は、敬語が敬意なり丁寧さなりを表しているとすれば、それは「親切」ということと直結しているはずである、敬語のもつ「へだてをつくる」や「距離をおく」は、むしろ「不親切」や「冷淡さ」の表れなのではないか、と解釈する。この解釈は研究者としてのそれではなく、敬語を獲得しようとする過程での直感である。この直感はかなり程度まで「敬語」の本質をついていると思う。相手を自己に引きよせることが相手の人格を認めることであり、それこそが本当の「敬意」であり「親切」であるという価値観に立てば、敬語はそれに相反するはたらきをする面が大きいからである。日本人の敬語否定派もこれに近い考えをもっているかもしれない。

こうした学習者の疑問は、上下や謙譲の概念が日本人の「卑屈さ」の表れという解釈を生みやすいように、敬語を「人間の平等の原理を犯すもの」というとらえかたを生みやすい（第II章4参照）。これを短絡的な思考とみることはたやすいが、一面の真理がふくまれていることも事実であろうし、そのように見える学習者の指摘は貴重である。ただ、長い伝統を背負う現代の敬語が、その伝統の重荷のある部分を捨てある部分を残し、それと格闘しながら

ら、現代社会の構造に合うように性格を変え、さまざまなはたらきを派生させてきたものであることを理解させる必要はある。これは敬語だけでなく、言語一般の性格と同じものであろう。

敬語は「親切」と相反するものではなく、だれに、どんな状況について使うかであり、むしろ意味の伝達だけではない「思いやり」や「優しさ」の情をきわだたせる要素となっていることもしばしばある。さきの「美化」というのはたらきに付随するものであろう。「お疲れさま」というようなあいさつ表現や、「お利口ね」というようなほめことばだけでなく、「ちょっとこっちへいらっしゃいよ」や「お手伝いします」という表現にも、「親切」はふくまれているといってさしつかえないであろう。おなじ場面で敬語要素をふくまない表現（疲れたろう・ちょっとこっちへこいよ・手伝うよ、など）とのあいだには、ある距離があるといわざるをえないであろうが、敬語要素をふくませないことだけが、相手との距離をとりはらうものではなく、敬語要素の有無にかかわらず、相手に厚意を表すことは可能なのである。

親切な行動と親切な言語表現とはおなじものではないが、日本人の場合、長いつきあいでないかぎり、あるいは全くウチ扱いが可能になっていないかぎり、適度の敬語要素をふくむほうが、安心をもって迎えられるという事実を知らせる必要がある。学生が親しいはずの下宿のおばさんに「そんなこと、だめよ」といったたしなめられた例はこれである（IV章5）。

「親切」と相反するはたらきは「皮肉・軽蔑」であるが、これは敬語のもつ基本的な性格（敬のことばであっても、礼のことばであっても）の応用といえる。この応用は、文法的にも意味的にも、敬語のはたらきを理解させるのにおおいに役立つ。いわゆる軽卑語が、「近づき」や「親愛」のはたらきをもっているのとウラハラである。

7. BrownとLevinsonの考察

敬語のはたらきの特徴を知るためには、できるだけ広く言語行動のなかに位置づけてみる必要があるだろう。

世界の諸言語を「Respect 敬意」や「Politeness 丁寧さ」の観点から分析し、敬語行動の理論的枠組みを提示しようとした研究はいくつかあるが、そのなかでもっとも詳細なものは、Brown and Levinson, Politeness: Some universals in language usage (1987、初版は1978)である。この研究の要点は、III章でふれたようにすでに井出祥子・他『日本人とアメリカ人の敬語行動』(1986)に紹介されている。同じ井出氏による紹介が金田一・他編『日本語百科大事典』(1988)にもある。また北尾謙治、北尾・S・キャスリーン「ポライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段—」(1988)にも応用的に紹介されている。それだけでなく、敬語や言語行動の社会言語学的研究ではきわめてしばしば言及される。

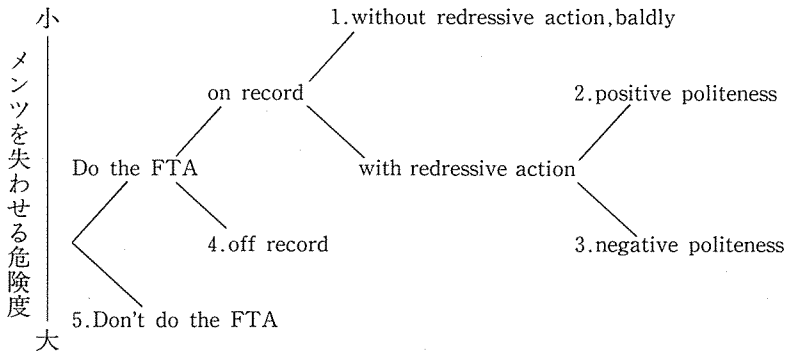
Brown and Levinsonは、言語行動をpolitenessの観点から研究するにあたって、英語・ツェルタル語 (Tzeltal、メキシコ、マヤインディアン^①のテネジャ族の言語)・タミル語 (Tamil) の例を多量に用い、日本語をふくめた他の多くの言語に言及している。そこでは言語行動の主要な原理を「人間関係を円滑に保持するためのコミュニケーションのストラテジー」と見ている。むろん、狭義の敬語行動だけをあつかっているものではない。このことを井出祥子・他 (1986) はつぎのように紹介している。

かれらによれば、言語使用は、普遍的な原則にもとづいておこなわれるが、その原則のひとつがpolitenessである。敬語行動とはpolitenessの原則にもとづいた言語行動である。人間が言語行動をおこすと、相手のface(尊厳や面子)を脅かすことになるが、敬語行動とはそのfaceを守るために発話の状況に応じたさまざまなストラテジーをとることを指す。

Brown and Levinsonは “Do the FTA” および “Don't do the FTA” (FTAはFace Threatening Actの略)、つまり「相手のface (かお、メンツ、自尊心) を脅かすか否か」ということを言語行動の理論的枠組みの設定およびストラテジーを抽出するさいの出発点としている。この「ストラテジーの

選択を決定する状況」は次のように図示されている。

ストラテジーの
選択を決定する
状況



これらの分類および概念について以下に簡単に紹介するが、詳細は原著を見ていただきたい。図のなかの1～5の番号のつけられている分類がストラテジーの選択に直接かかわる五段階の丁寧さを示し、同時に、番号の大きいほど丁寧さのレベルが高いことを示している。人は一般に必要なかぎり低いほうのレベルでコミュニケーションを行うとってさしつかえないと思われるから、日本人がしばしば高いレベルのストラテジーを使用するとすれば、上記五段階のいずれを特徴的に使用しているかを考えることになる。

これら五段階に属するストラテジーは極めて詳細に分類されているが、なかでも敬語行動の分析にかかわる中心的なモデルは、二種類のfaceにもとづく“positive politeness”と“negative politeness”という仮説である。パラフレーズすればつぎのようになる。

positive politeness：積極的丁寧さ。つまり相手のfaceにかなう言語行動を

とる。つまり聞き手の自尊心を満足させ、いい気分させるように積極的な配慮で話しかける。

この場合のメンツ（積極的メンツ）は、対話者双方が求める恒常的な自己像あるいは〈人格〉をふくみ、自己のイメージが評価され、受け入れられ、自己の期待が望ましいものであってほしいという「欲求」をふくんでいる。したがって、積極的丁寧さは、話し手が聞き手の「欲求」のいくつかを自分も欲していることを示して——たとえば聞き手を、グループの一員、友人とみなす、あるいは聞き手の欲求や人格が理解され、好かれているとみなすことによって——、聞き手のメンツを守ろうとする戦略である。

negative politeness：消極的丁寧さ。つまり相手のfaceを脅かさないような言語行動をとる。相手の自尊心を傷つけないように配慮した話し方をする。

この場合の消極的メンツとは、自己の領域を侵害されない権利——つまり、行動の自由と強制からの自由——への基本的な「欲求」である。したがって、消極的丁寧さは、本来相手に負担をかけることの回避を基本とし、話し手が聞き手の消極的メンツの欲求を認め、聞き手の行動の自由を妨げないことを保証する戦略である。これは、卑下、礼儀、遠慮によって特徴づけられる。

この二つの型は、談話行為の性質、および話し手と聞き手のあいだの相対的ステイタスに応じて、複雑に影響しあうのが実態であるが、Brown and Levinsonは「積極的丁寧さ」に15種類の戦略を、「消極的丁寧さ」に10種類の戦略を設定している。簡略化して紹介すればつぎのようである。

積極的丁寧さの戦略は、大きく3つにわけられる。

第一は、「見解の一致を主張する」ことである。いいかえれば、話し手が、

自分と相手とはなんらかの特定の欲求を共有する一組に属していることを示し、同じ立場にあることを要求する。その戦略は、

聞き手の欲求あるいは目的が、話し手にとってもまた関心の深いものであることをおおげさに示す。隠語、俗語、短縮、省略など集団内アイデンティティ・マーカーを使用する。相手の持ち物に関心を示したり、みせかけだけでも相手のいうことに同調したりする。罪のない嘘をついたり、冗談をいったり、意見を曖昧にして相手の意見との相違を避けたりする。聞き手の要望や態度や知識、あるいは聞き手の価値観が話し手と同じであると仮定して、見解の一致を主張する。

などがある。

第二は、「話し手は聞き手の協力者であることを伝える」ことである。すなわち、話し手がある活動を聞き手と協力して行い、その領域で目的を共有することを伝えたい欲求から生まれる。その戦略は、

話し手が聞き手の欲求を知っており、それを考慮していることを示す。協力を申し出る、約束する、楽観的であることを示す。欲求の理由を言ったり聞いたりする。協力は相互的であることを想定したり主張したりする。

などがある。

第三は、「何かに対する聞き手の欲求をいくぶんでも実際に満たす」ことである。聞き手の望んでいることを実際に満たしてやることによって、聞き手の積極的メンツを直接守ることである。その戦略は、

実際に贈り物をしてよいし、共感や理解を示したり協力したりする。

ことである。

Brown and Levinsonによれば、こうした積極的丁寧さは親密な行為の核をなすものであるのに対し、もうひとつの消極的丁寧さは表敬行為の中心をなす「礼儀作法集」のようなものであるという。

ではこの消極的丁寧さを示すストラテジーはどのように分析されているだろうか。抽出されている10種のストラテジーを列挙すればつぎのようである。(各ストラテジーの第二文以下は簡単な解説である。)

ストラテジー1：しきたりどおりに(きまり文句的に)間接的な表現をとる。間接的発話行為は丁寧さの普遍性を示している。

ストラテジー2：質問あるいは確言を避けた言い方をする。小辞(終助詞ネなど)の使用や、確信のなさをあらわす副詞(どちらかといえば、たぶん、おそらく、など)の使用。呼びかけなどにためらいの言い方をする。

ストラテジー3：悲観的な言い方をする。否定表現(付加疑問文とともに)や仮定法や可能性の少ないことを示す言い方をつかう。

ストラテジー4：負担を最小限に抑える言い方をする。(ほんのちょっとで結構ですが…など)

ストラテジー5：敬意を表明する。フォーマルな表現を使って相手を高める。敬意表現のうち、これが言語に課せられた社会的要因のうちでもっとも顕著なものである。

ストラテジー6：謝罪する。侵害を認める、不本意を表明する、そうせざるを得なかった理由を述べる、許しを請うなど、聞き手を侵害しないという話し手の要望をつたえる。

ストラテジー7：話し手や聞き手を非人称化する。“I”や“you”などの代名詞を避ける、あるいは複数化する、非人称動詞を使用する、受け身や状況的な態(ヴォイス)を使用する、見解に距離のあることを示す、など。

ストラテジー 8: FTA (相手の要望どおりにならないこと) を一般論として述べる。話し手の言いたくないことを、社会的ルールや約束事であるように述べる。代名詞を回避する傾向がある。

ストラテジー 9: 名詞化された語句を使用する。かたくなしい文章語的表現を用いる。

ストラテジー 10: 恩を受けることをはっきり言う、負担をかけないことを述べる。(～していただければ、これ以上うれしいことはありません、など)

以上紹介した「積極的丁寧さ」と「消極的丁寧さ」には大きな差異のあることがわかる。けれどもその差異に侵しがたい明瞭な境界線があるにとらえるべきものではなく、言語文化によってどちらの特徴をより多く持っているかという相対的なものとしてとらえるべきものであろう。日本語は「消極的丁寧さ」の特徴を多分にもっている言語だということは明らかである。III章で触れたが、井出祥子・他(1986)では、この相対性を重んじて積極的配慮に基づく敬語行動を「働きかけ方式」と呼び、消極的配慮にもとづく敬語行動を「わきまえ方式」と呼んだわけである。日本人にとっては「働きかけ方式」よりも「わきまえ方式」の比重が大きく、アメリカ人にとってはその逆が重視されるということである。また、日本人の「わきまえ方式」には〈相手〉と〈場面〉という要因が強くはたらき、「働きかけ方式」ではその要因のはたらきは比較的弱いとみられている。

Brown and Levinsonは、相手の欲求に逆らう行為は、本質的にメンツを脅かす行為であるから、理性的に行動しようとする人はだれでも、こうしたメンツを脅かす行為を回避するか、その脅かしを最小限におさえる何らかのストラテジーを採用しようと努める、という。その一つの方法がoff record(直接的な言い方をしない、ほのめかす、ヒントをあたえる)である。つまり、行為者がある特定の意図にしばられないように配慮することである。この場合、あからさまに言わずに意思伝達をはかろうとするあらゆる種類のほのめ

かしや含意というストラテジーをとる。Brown and Levinsonはこれについて15のストラテジーをあげているが、その主なものは比喩・暗喩、婉曲、皮肉、修辞疑問、重複、假定、誇張、省略などである。

一方、行為者がon record (直接いう、負担をかける) にしようとするときは、メンツをあまり考慮せずにあからさまに (without redressive action, baldly) 発話行動をする。これは一般に話し手が聞き手の報復をおそれないときで、たとえば緊急な事態に効果的な伝達が必要なとき (どなる、命令する、など) や、聞き手に利益となる提案・申し出・依頼や、話し手が聞き手より立場がひじょうに上、などの場合である。一方、何らかの配慮にもとづいて発話行動をとろうとする (with redressive action) と、上で見たような積極的か消極的かの二面に分かれる。faceに配慮する行為は、聞き手にfaceをあたえ、FTAによっておこるfaceの危険を中和しようとする行為である。それが積極性にウェイトをおくか (働きかけに価値観をおくか)、消極性にウェイトをおくか (わきまえに価値観をおくか)、あるいはもっと他の面にウェイトをおくかは、言語文化の伝統のちがいということになる。

なお第II章で紹介した「外国人のみた敬語」をふりかえっていただきたい。日本人のことばづかいに対する学習者のとまどいや違和感のよってきたる理由のいくつかは、上記の考察からも理解されると思う。

VI 日本人の話し方の論理

外国人学習者がしばしば指摘する、日本人の話し方はあいまいだとか、無意味なくいかえしや言いわけばかり多くて中身がないとか、相手中心の論理だとかと言われることについて、どのように整理をしておいたら、外から見た特徴の理解に役立つだろうか。個々の人間関係や場面からくる差異にあまりとらわれることなく、日本人一般に共通している傾向を指摘するとすれば、どのようなことが言えるだろうか。日本人の話し方や応答の仕方などについては、すでに多くのことが言われているが、ここでは、堀川直義(1970)、水谷修(1979)、直塚玲子(1980)、杉戸清樹(1983)などの諸論、およびそれらに H. P. Grice の「協調の原理」や、J. N. Leech の「丁寧さの原理」などを照らし合わせてみて、多少のまとめを試みておく。

1. 会話のルール

すでによく知られているが、Grice (1975) は会話を哲学的側面から考察して、会話がスムーズに運ぶための一般原則を抽出し、これを「協調の原理」(cooperative principle)と呼んだ。この原理は次のような四つの原則(Maxim)から成り立っている。

- 量 (Quantity) の原則 : a 必要とされる量の情報を提供せよ。
b 必要とされる量以上の情報を提供するな。
- 質 (Quality) の原則 : a うそだと思うことを言うな。
b 十分な証拠のないことを言うな。
- 関係 (Relation) の原則 : 会話の内容と関係のないことを言うな。
- 様式 (Manner) の原則 : a 分かりにくい表現を避けよ。
b あいまいな表現を避けよ。
c 簡潔に話せ。
d 順序よく話せ。

これらの原則は、会話の原理の普遍性を追究するひとつの仮説であり、会話参加者相互の〈信頼と理解の基本〉にとって不可欠のものと考えられる。その意味では理想化ないし抽象化された言語伝達の原理である。したがって、こうした原則を基準として実際の会話をみれば、原則との異同を考察することができる。一文化・一地域内の会話の特徴の抽出のみならず、他文化・他地域との比較も可能になる。実際、日常の会話がこの原則だけに則って行われているわけではなく、はずれていることも少なくない。問題はどのように合致し、どのようにはずれているかである。

たとえば日本人は、たくさんのご馳走をだしながら、しばしば「何もありませんが、ご遠慮なく（召し上がってください）」という言い方をする。文字どおりに解釈すれば、うそを言っていることになり、「質」の原則に反していることになる。他との意見の衝突やあつれきを恐れて本当のことを言わないのも日常的なことである。「量」の問題にしても、必要以上にくどくどおしゃべりをしたり、反対にことば足らずで誤解をまねいたりして、とかく両極端になりやすい。「関係」の問題にしても、話の本筋からはずれやすいし、憶測から憶測へと発展して会話がすすむこともある。「様式」（方法）については、特に日本人は明晰性に欠けると言われる。文が完結しない形を好んだり、「思います」と言えばよいところを「思われます」と言ったりする。

しかし、協調の原理が事実とずれているように見えるのは、日本語の場合、主としてソトの人間との会話、つまり改まりがはげしい場合であり、ウチの関係ではかなりよくあてはまるということも考慮しなければならない。

むろん、これらの原則はいずれも〈意図的に〉違反して利用されることもめずらしくない。その場合はレトリックとして考察される。

こうしたことから分かるように、上の四つの原則は、会話の骨格をなす部分、比喩的にいえば会話という木の幹にあたる部分であり、現実の会話は枝や葉やあるいは花にあたる部分を多量にまといつかせることによって成り立っている。四つの原則が普遍性をもつとすれば、各言語によって違いが出てくるのは、この枝葉の生い繁り方によってである。この違いは地域や文化

によって著しい。Leech (1983) はこのことに着目し、社会語用論 (socio-pragmatics) の観点から各言語社会での差異や特徴を、特に対人関係における〈気配り〉の在り方を考察して、グライスの協調の原理に「丁寧さの原理」 (politeness principle) をつけくわえた。会話をスムーズに運ぶためには、協調の原理と丁寧さの原理が車の両輪のごとく必要であるというわけである。リーチはさらに「アイロニーの原理」 (irony principle) もつけくわえているが、これは二次的存在であるとしている。

2. 丁寧さのルール

リーチによれば、丁寧さの原理に属する原則 (Maxim of politeness) には次のようなものがあり、〈対〉をなして機能する傾向があるという。a と b は副原則である。

- (I) 気配り (Tact) の原則： a 〈他者〉 に対する負担を最小限にせよ。
[b 〈他者〉 に対する利益を最大限にせよ。]
- (II) 寛大性 (Generosity) の原則： a 〈自己〉 に対する利益を最小限にせよ。
[b 〈自己〉 に対する負担を最大限にせよ。]
- (III) 是認 (Approbation) の原則： a 〈他者〉 の非難を最小限にせよ。
[b 〈他者〉 の賞賛を最大限にせよ。]
- (IV) 謙遜 (Modesty) の原則： a 〈自己〉 の賞賛を最小限にせよ。
[b 〈自己〉 の非難を最大限にせよ。]
- (V) 合意 (Agreement) の原則： a 〈自己〉 と 〈他者〉 との意見の相違を最小限にせよ。
[b 〈自己〉 と 〈他者〉 との合意を最大限にせよ。]
- (VI) 共感 (Sympathy) の原則： a 〈自己〉 と 〈他者〉 との反感を最小限にせよ。
[b 〈自己〉 と 〈他者〉 との共感を最大限にせよ。]

(I)と(III)、(III)と(IV)、(V)と(VI)は互いに対をなしているが、リーチによれば、これらの原則はすべて同じように重要なのではなく、「気配りの原則」のほうが「寛大性の原則」よりも、「是認の原則」のほうが「謙遜の原則」よりも強力な制約としてはたっている。それは、丁寧さというものは〈自己〉よりも〈他者〉の側に関心が強く集中するという一般原則を反映しているからだろうと述べている。また、副原則のaとbとでは、bのほうが重要性が低いように思われ、これもまた消極的丁寧さ（不一致を避けること）のほうが積極的丁寧さ（一致を求めること）よりも重要な考慮であるという一般原則からきている、と述べている。

また、協調の原理と丁寧さの原理とは、すべての社会で同じように機能しているわけではなく、ある社会では丁寧さの原理のほうが優位にはたっているし、またその丁寧さの原理のなかでも、ある原則に他の原則よりも優先権が与えられている場合もある。日本語の場合、協調の原理に比べればかなりの程度まで丁寧さの原理に優先権が与えられていると見ることに異論は少ないだろうと思われる。日本人の言語行動に占める「敬語行動」の役割の重要性が何よりもこのことを証明している。

なお、丁寧さの原則はたがいに衝突することがあるが、その場合は、一方の原則が他方の原則に優先権をもつことが許されなければならないとしている。特に謙遜の原則は他の原則と衝突しやすいという。リーチはお世辞とそれを否認しつづける日本語の会話例（女性）をあげ、「日本の社会では、そしてもっと特定的には日本人の女性の間では、謙遜の原則の力は英語圏社会における通常の場合より一層強力である。英語圏社会では、お世辞を否認し続けるよりも、お世辞を（例えば、それを言ってくれたことを話し手に感謝することによって）「丁寧に」受け入れることの方が、慣例的により丁寧であろう。ここで、英語圏の話し手なら、謙遜の原則を破ることと合意の原則を破ることとの間に、何らかの歩み寄りを見つけない気になるところであろう」と述べている。また、日本人が「おひとつどうぞ」ということがあるのは、外見上は（逐語訳の意味では）寛大性を犠牲にしていることになるが、これ

は謙遜に対してより大きな関心を寄せていることの結果であり、二つ以上を提供することは、それが食べるに値することを示唆することになるからだとして述べて、Have as many as you like. (好きなだけ召しあがれ) というように、量をより多く差し出すほうが普通はより丁寧であると考えられている英語社会との対照を指摘している。

このように丁寧さの原理は、しばしば、協調の原理を無効にすることによって成り立っている。つまり、丁寧さの原理は言語伝達の原理にとどまらず、人間の社会活動全般の理想的な在り方についての原理であることを示していると言える。このことはまた、協調の原理が言語伝達で最低限守るべき基本線についての調節機能を果たす役目を担っているとすれば、丁寧さの原理は友好的な対人関係を維持するために、協調の原理を包みこみ、かつそれ以上の高次の調節機能の役目を果たしているということができる。

対人関係における〈気配り〉という丁寧さを計る語用論的尺度は、リーチの場合、三つあげている。一つは「利益・負担」の尺度であり、これはある行為が話し手または聞き手にとってどの程度の負担または利益をもたらすかということと関連する。聞き手に負担が大きければ丁寧さは減少し、利益が大きくなれば丁寧さは増加する。話し手からみた利益・負担と聞き手から見た利益・負担とは、しばしば、反比例する。二つ目は「選択性」の尺度であり、話し手が聞き手の反応に対して選択の余地をどのくらい残した表現をするかである。命令文のように選択の余地が少なければ丁寧さは減少し、相手の意向を尊重するような表現ならば、丁寧さは増加する。三つ目は「間接性」の尺度であり、表現の婉曲性の問題とも言い換えられる。表現が間接的なにつれてその発話効力は弱くなるが、一方、一般的には丁寧さが増す。しかしここにも協調の原理ははたらく。

上述で単に「表現」と呼んだものは、正確には、Searle (1975) の「発語内行為」(illocutionary act ——ある発話をするのが、すなわちある行為をすることになること——) を指す。リーチによれば、丁寧さの原理はサールの発話内行為の型の分類と、次のような対応関係を見いだすことができるとい

う。

1) 「気配りの原則」と「寛大性の原則」は、一般的に、〈命令すること・指揮すること・要請すること・助言すること・推奨すること〉といった、聞き手の行為によって何らかの効果が生み出されるような《行為指示型》(directive) (リーチは〈行為賦課型〉impositiveと呼ぶ) の発語内行為の場合や、〈約束すること・誓うこと・提供すること〉といった、話し手の未来の行為に対して責任をもたせるような《行為拘束型》(commissive) の発語内行為の場合に適用されやすい。

2) 「是認の原則」と「謙遜の原則」は、一般的に、〈感謝すること・詫びること・とがめること・賞賛すること・弔慰すること〉といった話し手の心理態度を示す《表出型》(expressive) の発語内行為や、〈陳述すること・暗示すること・自慢すること・不平をいうこと・権利を主張すること・報告すること〉といった《断定型》(assertive) の発語内行為の場合に適用されやすい。

3) 「合意の原則」と「共感の原則」とは、上記の《断定型》の発語内行為の場合に適用されやすい。

これらの適用は常に一般化して考えられるわけではないが、消極的な丁寧さは目立って《行為賦課型》のクラスに属しており、積極的な丁寧さは目立って《行為拘束型》と《表出型》に見られるという。これがどの程度まで日本語にあてはまるかは、今後の研究にまたねばならない。

なお、上記の〈自己〉と〈他者〉は、リーチによれば〈自己〉は話し手に、〈他者〉は聞き手に相当するが、〈他者〉は第三者にも適用されるという。この場合第三者に対して示される丁寧さの重要性にはいろいろあるが、鍵となる要因は、ひとつはその場にいるかどうかということであり、もうひとつは第三者が話し手の勢力圏に属していると感じられるか、聞き手の勢力圏に属していると感じられるかということであるという。たとえば、話し手は自分

の配偶者に言及する場合よりも、聞き手の配偶者に言及する場合のほうが丁寧でなければならないが、これにも異文化相互間に相違がみられ、ある社会では自分の妻を〈自己〉として扱い、それゆえ、彼女の名誉を傷つけることも自由にできる、あるいはそうせざるをえないとを感じるが、別の社会では自分の妻であっても〈他者〉として扱おうとするという。日本社会は明らかに自分の妻を〈自己〉として扱うタイプに属しているといえることができる。妻だけでなく、配偶者が相互に相手を〈自己〉として扱うのが日本社会であろう。「主人がいつもお世話になりました」などといえるのは、そのひとつの例証であろう。

3. 日本人の話し方の論理—ソトに対する場合—

前章で見た Brown and Levinson による「コミュニケーションのストラテジー」の指摘や、前節で紹介したグライスやリーチの考察は日本人の話し方の特徴を考えるさいにも、有益なヒントを与えてくれる。

日本人の言語伝達のストラテジーは、すでに述べたように「消極的丁寧さ」の要因を多分にもっていることは明らかである。「消極的」という用語は、ともすれば、丁寧さの程度が弱々しいという誤解を与えやすい。相手に対して説得的であろうとするよりも、「相手との不一致を避けようとする傾向が強い」というのが消極的の意味である。一步近づくよりも一步さがって、相手を立てようとする心的態度においてはたいへん積極的なのである。

では日本人の会話行動には、この「消極的丁寧さ」あるいは「わきまえ方式」はどのように現れているのだろうか。特に外国人が違和感を感じる話し方にはどんなものがあるのか。原理や原則ではなく、学習者の質問に答えるなどの教育現場の実用的な問題として、いくつかの項目にまとめてみる。必要なのは日本人のコミュニケーションのストラテジーを理解する場合に有効なものかどうかである。

日本人の対人意識がウチ・ソトの区別をし、それが言語行動に大きな差異をもたらしていることはIV章で見たが、ここでもその区別が必要である。先

に触れた、日本人の発話行動がグライスの「協調の原理」からはずれやすいのは、主としてソトの人間に対する場合であり、同様にリーチの「丁寧さの原理」の原則がもっとも典型的にはたらくのも、主としてソトの人間に対する場合である。リーチの考察はたいへん示唆的だが、この人間関係の意味では、日本語社会への適用には不足している。ただし、多くの場合、リーチのいう〈他者〉をソトの人間として、〈自己〉をウチの人間として扱うことができる。「丁寧さ」は話し手が社会的にも心理的にも〈自・他〉の区別を強く意識するときに現れるものだからである。言いかえれば、ウチは協調の原理を重んじて本音で実質的会話のできる世界であり、ソトは丁寧さの原理に則って建前で会話をする世界である。

堀川直義(1970)は、日本人の話しことばの論理を考察して、①無論理の論理、②否定の論理、③相手中心の論理、④オーム返しの論理、⑤あいまいの論理、⑥非断定と回避の論理、⑦言いわけの論理、⑧T.P.O.の論理、の8分類を試みている。これはたいへん興味ぶかい分類である。また、直塚玲子(1980)は、「この間はどうも」など日常よく使われる言い方で日本の特徴を表しているあいさつ表現を取り上げ、それが在日外国人にどのように受け取られているかをアンケート調査をして興味ぶかい結果を報告している。そこには異文化間ギャップの実態が見事に浮彫りにされている。水谷修(1979)は、言語行動から見た日本人の意識構造の解明を試みている。

ここでは主として、堀川氏の分類のいくつかの用語や概念を借りながら、筆者なりに学習者に指摘しておきたい日本人の話し方の特徴(論理)をあげてみる。それぞれが切り離しがたい関係にあることは明白なので、分類は便宜的なものである。

①**否定の論理**：これは堀川氏の内容とは異なる。堀川氏は「ハイ」「イエ」の使い方が西欧語と異なる文法を問題にしているが、ここではリーチの謙遜の原則に含められる概念として用いる。

1. 何もありませんが／特別の用意はいたしませんでしたが／お口に合うかどうかかわかりませんが／むさくしいところですが／……

2. 「ぼっちゃん、よくおできになるんですってね」

「いえいえ、できは悪いし、きかん坊だし……」

3. 「このスーツ、よくお似合いよ」

「いえ、安物なの」

4. 「何から何までお世話になりました」

「いえ、お安いご用ですよ」

どのように心をこめて用意したものであっても、そのことが相手に明瞭にわかって、なお相手にとっては不十分であろうという表現をとること、ほめられたら、とにかく一度は否定すること、類似の状況に遭遇したらまた類似の否定をくりかえすこと、これが伝統的態度である。質の原則には明らかに反する。ほめられたらすなおに受け入れる文化も多いから、この否定は外国人にしばしば違和感や拒絶感を与える。文字どおりに解釈して「謙虚さを売り物にしている」(直塚1980)という感想を述べる外国人もある。しかし、世代が下がるにつれてこの否定的言い方は次第に減り、率直に気持ちを表現する傾向が強くなってきていると指摘されるのは事実であろう。

なお、対人関係に関係なく文法上の否定がそのまま事柄の否定として使えるのは(つまり、質の原則に則っているのは)、数学のような事実の正誤や事物の存否が明らかな場合であることを水谷修(1979)が指摘している。

②**バランスの論理**：否定の論理と〈対〉をなす、あるいは否定の論理を〈包み込む〉もので、対人関係における感情のバランス機能を果たすものである。

1. 「つまらないものですが……」

「いいえ、けっこうなもの」

2. 「きょうは何もおかまいできなくて」

「いえ、ずいぶんごちそうになったし、お話しできて、たのしかったわ」

3. 「遠くて不便なところなのに、よくいらしてくださいました」

「いいえ、静かでよいところですね、緑も多いし。私のところなど、ごみごみしていて、うるさいし……」

否定の論理がほめに対する打ち消しの応答だとすれば、これは謙遜に対するほめの応答である。話し手が自分のことを謙遜して話すときは、その聞き手は何らかのほめことばを返さなければならない。これは一種のバランス・ゲームであり、日本式礼儀である。応答の決まり文句のカテゴリーに属すると言ってさしつかえないと思われる。これに違反すると、無愛想や無礼であると評価されやすい。ただし、質の原則に違反したとしても関係の原則に違反があってはならないという性質を持っている。

このバランスの論理は、ふつう次のように、ほめる—打ち消す—ほめる—打ち消す、という往復作業をする傾向が強い。

4. 「ぼっちゃん、よくおできになるんですってね」

「いえいえ、できは悪いし、きかん坊だし……」

「あら、いつも先生にほめられてるって、うちの子が言っていましたわ」

「とんでもない。あそんでばかりいて、勉強なんか、さっぱり……」

③言いわけの論理：発言は言いわけをしてから始めることが極めて多い。

①の否定の論理も一種の言いわけの論理と考えることもできる。

1. 突然のご指名で何を申し上げたらよいかわかりませんが／ばたばたしていたものですから、何の用意もいたしませんで／まことに不勉強で申しわけありませんが／このような格好で失礼なことは承知しておりますが／……

2. 夜おそくお電話して、すみません／せっかくの日曜日におしかけまして／私のことを申して、なんですが／かぜをひいておりますので、お聞きぐるしいかもしれませんが／自慢するわけではありませんが／

……

何か行動を始めるとき、それが改まった場であればあるほど、準備不足その他の理由をあげて、だから聞き手に満足がいけないかもしれない、失礼になるかもしれない、というポーズを示す。そしてこれは、理由が分明であってもなくても、相手が是認してくれるという前提に立っている。この前提に反する反応を聞き手が示すことも礼儀に反することになる。リーチに照らせ

ば謙遜の原則と合意の原則の融合であると言えるかもしれない。後に述べる杉戸清樹（1983）の待遇表現における〈注釈〉という視点はこれに深い関係をもっている。杉戸氏は〈注釈〉は待遇表現が典型的に現れやすいところであると指摘している。

④**相手中心の論理**：相手の顔色を読んで表現を選択する傾向を指す。へつらいの論理ともいえる。次は堀川氏のあげている例である。

「この際、大鵬には退陣してもらい……」実は〈退陣してもらいたい〉と言いたいところなのだが、相手がいかにも大鵬ファンの顔色だったので、文末で「……もらいたくないものですね」と主旨を変えることもできる。あるいは「退陣してもらいたいという人もあります」などと、最後のところで他人の意見のようにすりかえることもできる。

これについて堀川氏は、「悪くいえば自主性のない言い方ということになるが、社交の場面では、別に自分のオピニオンを通さなければならないということもないのである」と述べている。この考え方は合意の原則に当てはまる。これが外国人に問題になるのは、日本語の文構造（語順）が不自然に利用され、聞き手の当初の予測が文意の進行についていけないことがあるからである。肯定、否定、疑問、その他の表現意図は、文がどんなに長くても、完結するまで未解決のままに保留しておけるという日本語の構造をよく知っていても、聞き手もまた話し手の顔色を読まなければならない緊張を強いられるからである。文構造に限らず表現の問題でも、たとえば、自分の意志で決めた事柄であっても「……することになっています」というような他律的・自発的（自然発生的）と言われる表現が外国人にわかりにくいのも、相手中心指向の言い方であるからだと言うこともできる。

⑤**あいまいの論理**：断定回避の論理とも言える。はっきり言うことはとかく角が立ちやすい、あるいは妥協がしにくくなると考える傾向を含意する。

1. 「紅茶とコーヒーとどちらにしますか」

「どちらでも」

2. 「あした、映画にでも行きませんか」

「あしたは、ちょっと……」

3. 分からないというわけでもありません／不可解だと言えなくもない／
できないものはできないと言いたくても言えないんです／……

4. インフレであるのご断定でありましたが、政府といたしましては、
現段階では必ずしもインフレであるとは考えていないのでありますが、
インフレとなる心配もないわけではないのでありまして、その点につき
ましては十分の対策を立てまして善処いたしたい所存であります。(堀
川1970)

様式(明晰性)の原則に違反する典型的な言い方である。丁寧さの原理では気配りの原則と寛大性の問題であり、その尺度は選択性と間接性であろう。日本語文法でも、意思をはっきり表明しないのは、相手に選択の余地を残すための配慮であると説明されることが多い。言語形式では否定的要素が深くかかわる。二重否定、三重否定もめずらしくない。ほとんど終助詞化している「ではないか／じゃないか」(あの映画、おもしろくないんじゃない?)についても、しばしば学習者は二重否定と混同する。思考の主体をはっきりさせない「れる／られる」の使用も明晰性を弱めやすい。原因・理由をあらわす「から」「ので」「て」のなかでは、もっともあいまいな「て」が好まれると言われるのも、「て」自体は原因・理由を表すのが本来の役目でないからであろう。文を言い切りにしない「が」「けれど／けど」は、断定を避けるもっとも端的な例であることは言うまでもない。また、「考えておきます」「善処します」という言い方が外国人に評判が悪いのも、質の原則と様式の原則に反しているからである。日本語の丁寧さは、相手に不快感を与えない範囲内において、表現(発語内行為)をあいまいにするところに特徴があると言えるようである。

⑥**是認先行の論理**：相手の意見をまず是認し、意見が異なれば徐々に表明する。自分の真意はその場ではただちに理解されなくてもかまわない。堀川

氏のオーム返しの論理をふくむ。

1. 「寒いですね」

「そうですね」（自分は汗ばむほどだと思っていても）

2. 「娘さんがご結婚なさって、おさびしくありませんか」

「やっぱり、親ですねえ。喧嘩ばかりしていたんですけど」（実は大喜びしているが、社会通念を装う）

3. 「ではこの件はご了承願えたと思ってよろしゅうございますね」

「はい、会社に帰りまして、上司と相談のうえ、のちほどお電話でご返事を申し上げます」（断るつもりでいる）

4. 「いいお天気ですね」

「はい、まったくいい天気です」

「少々暑くなってきました」

「暑くなりましたねえ」（堀川1970）

質の原則にも量の原則にも違反するこのような言い方は、日本人にとってはソトの人間に対するありふれた日常言語であろう。事実と反することであっても直接に否定しないのは、日本語社会における対人関係の優位性を示しているものと言える。この妥協の姿勢は多くの外国人に自主性のなさやずるさとして映りやすい。日本人にとっては角が立たないという特徴によって丁寧さの上位に位置づけられるものであろう。これは水谷修(1979)のいう「共存・同一化志向」の一側面である。例4. はオウムのように同じことばをくりかえす例で、社会的距離の遠い間柄の会話できわめて多い。堀川直義(1970)によれば、患者に対して同調をくりかえす「オーム返し法」は、アメリカでカウンセリングの高度な技術として用いられているという。頻繁に用いられる「あいづち」（言語的・非言語的）もこの是認先行の論理のカテゴリーに含まれるだろう。

⑦くりかえしの論理：再三再四の論理とでも呼びたい特徴である。理屈としては一度で充足される事実を再三くりかえす。

1. この間はとも/ゆうべはとも/さきほどはとも/去年はとも/……

2. あの節は/いつぞやは、いろいろとお世話になりました/……

相手に世話になったり迷惑をかけたりすれば、だれでも一度はかならず丁寧に謝辞や詫びのことは述べるにもかかわらず、その後の再会ではまたかならず札や詫びのことはをくりかえす。そうしなければ気がすまないのが多くの日本人であろう。これは多くの外国人とまったく異なる。謝辞は二度(以上)言うのが、日本の文化である。外国人は数ある日本語のあいさつのなかでも、この「この間はどうも」はもっとも不可解であり、苦手であると言う。直塚玲子(1980)によれば、欧米人は「この間 last time」と言われても、いつのことかからないし、なによりも再度謝意を述べられる理由が分からないという。

(欧米人は)よほどのことがない限り、過去に受けた恩恵に対しては再度謝意を述べないのが原則であるから、この原則を破ると、「あの人は勘定高い人、だと思われる。

「人にしてやった親切・人から受けた親切をいちいち家計簿につけて、収支決算を合わせようとしている。」

「私はあなたから受けた親切をよく覚えていて、こんなに感謝しているのですから、あなたも私から受けた親切を思い出して、足りない部分は補ってくださいよ。」

と、一種の心理的ゆすりにかけられたような気にさせられる。日本人の立場から見るととんでもない誤解だと思うが、彼らの心理的反応は、そうなのである。

一見小さなあいさつことばであるが、異文化間の大きなギャップを垣間みせてくれる。タイ人の学生も同じ反応を示した。直訳的解釈は妥当ではなく、日本人が気楽に使うこの「この間はどうも」は、感謝のことばというよりも、むしろ再会での会話開始の合図として解釈すべきものかもしれない。初回での「はじめまして」、久しぶりの「しばらくでした」などと同系統のものとし

て解釈できる機能をもっていると考えられる。

日ごろの天候のあいさつでも、手紙でも、ときには電話でも、謝辞や詫びのことはのくりかえしは少なくなく、実質的中身は一行ですんでしまうようなことはよくある。日本語社会でのレトリックの特徴的な側面であろう。

以上の7つの分類のいくつかは合体させたり、再構成したりすることができるだろう。別につけ加えたほうがよい項目もあるかもしれない。たとえば、〈見せかけの論理〉を設定できるかもしれない。「お近くにお越しの節はぜひお立ち寄りください」「暇なとき遊びにきてね」「いずれ食事でもごいっしょに……」などを、文字どおりに信じて失敗する外国人の例はよく聞く。このむずかしさは、日本人どうしても、話し手の真意を判断できない場合が多いからである。地域文化による違いもからんでくる。「京の茶漬け」は特に有名である。

4. クッション行動から注釈行動へ

前節の話し方の論理にすでに提出されているが、話しかける、許可を求める、依頼する、断る、などの会話行動にさいして、日本人が多用する表現がある。あいさつにしては実質的会話に近く、実質的会話にしてはあいさつに近い中間的存在である。次のようなものである。

すみませんが

失礼ですが

早速ですが

恐れいたしますが

お疲れでしょうけど

お邪魔してすみませんが

お忙しいところすみませんが

ちょっとよろしいでしょうか

……

この形式は多様であり、実際には冒頭に話し手に注意を向けさせる「あの一」などがつきやすい。自然な日本語というとき、インフォーマルな形式もふくめて（「悪いけど」など）、このような表現は重視されやすい。外国人はこうした〈枕ことば〉は意外に苦手であり、いきなり本題（実質的会話）にはいる傾向が強い。適切な待遇表現にとっては最も大切な要素のひとつであり、本論に入るまえの心理的地ならしの効用を持っている。これがないと〈うるおい〉のない、あるいは礼儀にかける人間だという印象を与えやすい。この前置きことばは、聞き手に対してショック・アブソーバーの役目を果たすので、クッション行動と呼んでおく。

前節の③言いわけの論理はこのクッションことばの延長線上にあるが、このクッションことばは「〈他者〉に対する負担を最小限にせよ」という気配りの原則を適用するさいのまず最初にくるべきものである。日本語におけるこのことばの大切さは、聞き手に礼儀正しい人間だという印象を与える実質的標識になっているからである。

杉戸清樹(1983b)は、これに関連し、これを包み込んで、示唆に富む論点を提出した。氏は次のような12の言語行動の成立要素を設定したうえで、その言語行動の成立要素に言及の焦点を合わせた言語行動、つまり言語行動の成立要素についての「注釈」という言語行動のあることを指摘した。これは、待遇表現を考えるさいの重要な核になる視点である。まず、杉戸氏の例を引用する。

①言語行動の主体

ワタクシナドガシャシャリデテ不躰ケデスケレドモ……。

②言語行動の相手

ホカナラヌ、キミニコソ言イタカッタダケレドネ……。

③言語行動の機能上の種類

コレハオ尋ネシテイルノデシテ、ケッシテ命令シテイルノデハアリマ

セン。

④言語行動のジャンル

コンナ簡単ナメモデハ失礼デスノデ、アラタメテ正式ノ文書ニイタシマス。

⑤言語形式・言語表現

アナタト呼ブノハ氣ガヒケマスノデ、先生ト呼バセテイタダキマス。

⑥言語行動の素材・話題

コンナコト言ウベキカドウカワカリマセンケレド……。

⑦言語表現の調子

ザックバランニ申シアゲマシテ……。

⑧物理的場面

コンナニ夜分遅ク申訳アリマセンガ……。

⑨心理的場面

オトリコミノトコロ申訳アリマセンガ……。

⑩接触状況・媒体

本来ナラバオ目ニカカッテ申上ゲルベキトコロ、オ電話デ失礼イタシマス。

⑪言語行動の目的・動機

細カナトコロマデオワカリイタダキタクテ、クドクド言ッたワケデスノデ……。

⑫言語行動の結果・効果

(アンナコト言ッたモノデ、) トンダ御迷惑ヲオカケスルコトニナッテシマッテ申訳アリマセン。

指摘されてみると、このような注釈行動は、われわれの言語行動にいかにか多いかにおどろく。注釈とは、言語行動の要素についての〈選択・評価・判断〉だという。杉戸氏自身も言うように、注釈行動がそのまま待遇表現行動に結びつくかどうかは分からないけれども、気配りの度合いが大きいほど注

釈の必要性を感じるのは事実であろう。日常の言語生活のなかには、一定の条件のもとに、狭義の敬語が網の目のように入り込んでいるように、注釈行動も構造をなして、われわれの待遇表現行動を支えているものと思われる。敬語の多用とおなじように、この注釈行動は他言語にくらべて、日本語的特徴が際立って存在しているところと思われる。さきの言いわけの論理はどのような注釈の一種であると言える。

リーチの丁寧さの原理のそれぞれの原則が日本語にどのようにあてはまるか、あるいはどの程度にずれているかは、逐一の検討が必要であるけれども、この注釈という側面からも異言語間の対照研究がなされれば、興味ぶかい結果を提供してくれるだろうと思う。たとえば、上記の引用例だけでも、言語によってすなおに理解できるもの、そのまま翻訳できるもの、そうでないものがあるだろうが、その比較考察は待遇表現における異文化間の異同について具体的なことを教えてくれるはずである。そしてそれは、学習者にとって日本人の言語行動の理解に直接役立つだろうと思う。

参考文献（本書で言及したもののみ）

- 荒木博之（1983）『敬語日本人論』 PHP 研究所
- 井出祥子（1977）「英語敬語の理解と翻訳」（『英語文学世界』1977年1月号）
英潮社
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動——大学生の場合——』南雲堂
- 井出祥子（1988）「欧米語の敬語」（金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』敬語の部）大修館書店
- 井出祥子・申恵璟・川崎晶子・荻野綱男・Åke Daun・Beverly Hill（1988）
「くわきまえ方式」による敬語行動の国際比較」日本言語学会第97回大会
発表ハンドアウト
- 大野晋・柴田武編（1977）『岩波講座日本語4 敬語』岩波書店
- 王秀文（1982）「敬語よくたばれ—外国人の体験的日本文化論—」（『国際交流基金創立十周年記念論文集』）国際交流基金
- 大石初太郎（1974）「敬語の本質と現代敬語の展望」（林四郎・南不二男編『敬語講座①敬語の体系』）明治書院
- 大石初太郎（1975）『敬語』筑摩書房
- 大杉邦三（1982）『英語の敬意表現』大修館書店
- 奥山益朗（1969）『日本語は乱れているか』東京堂出版
- 荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松・福田麻子（1988）「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」日本言語学会第96回大会
発表要旨
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1988/1989）『言語学大辞典 第1巻／第2巻』三省堂
- 北原謙治・北尾 S.キャスリーン（1988）「ボライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段—」（『日本語学』7-3）明治書院
- 北原保雄（1988）「現代敬語のメカニズムはどうなっているか」（『国文学—解

- 釈と教材の研究』33-15) 学燈社
 キーン, ドナルド (1970) 「日本語のむずかしさ」(梅棹忠夫・永井道雄編『私の外国語』) 中央公論社
 キーン, ドナルド (1983) 『日本人の質問』朝日新聞社
 金東俊 (1988) 「朝鮮語の敬語」(金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』敬語の部) 大修館書店
 小泉保 (1984) 「外国語の敬語」(『研究資料日本文法⑨敬語法編』) 明治書院
 国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』(国立国語研究所報告11) 秀英出版
 国立国語研究所 (1982) 『企業の中の敬語』(国立国語研究所報告73) 三省堂
 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』(国立国語研究所報告77) 三省堂
 国立国語研究所 (1986) 『社会変化と敬語行動の標準』(国立国語研究所報告86) 秀英出版
 国立国語研究所長・野元菊雄 (1987) 『日本語教育映画基礎編 総合文型表』日本シネセル株式会社
 柴田武 (1988) 「日本人の敬語」(『国文学—解釈と教材の研究』33-15) 学燈社
 柴田武監修、荻野綱男・藤田克彦・尾崎秩子・御園生保子 (1980) 『都市の敬語の社会言語学的研究—昭和53年度札幌における敬語調査報告—第1部・第2部』文部省特定研究「言語」総括班
 杉戸清樹 (1979) 「職場敬語の一実態—日立製作所での調査から—」(『言語生活』328号) 筑摩書房
 杉戸清樹 (1983a) 「〈待遇表現〉—心配りの言語行動—」(水谷修編『話しことばの表現』) 筑摩書房
 杉戸清樹 (1983b) 「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」(『日本語学』2-7) 明治書院
 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
 辻村敏樹 (1956) 「現代の敬語意識」(『国文学解釈と鑑賞』昭和31年5月号) 学燈社

- 辻村敏樹 (1967) 『現代の敬語』 共文社
- 直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき—異文化間のコミュニケーション—』
大修館書店
- 西田直敏 (1987) 『敬語』 (国語学叢書⑬) 東京堂出版
- ネウストプニー, J.V. (1974) 「世界の敬語」 (林四郎・南不二男編 『敬語講座⑧世界の敬語』) 明治書院
- ネウストプニー, J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波書店
- ネウストプニー, J.V. (1983) 「敬語回避のストラテジーについて」 『日本語学』 2-1, 明治書院
- 林四郎・南不二男編 (1974) 『敬語講座⑧世界の敬語』 明治書院
- フィッシャー, C.他 (1980) 「話しことばと話し方教育、その諸問題」 (シンポジウム) 『解釈』 26-11、解釈学会
- 文化庁 (1971) 『日本語教育指導参考書2 待遇表現』 大蔵省印刷局
- 堀川直義 (1970) 「話しことばにおける日本人の論理」 (依田新・築島謙三編 『日本人の性格』) 朝倉書店
- 水谷修 (1979) 『日本語の生態—内の文化を支える話しことば—』 創拓社
- 南不二男・林大・林四郎・芳賀綏 (1974) 「敬語の体系」 (『敬語講座①敬語の体系』) 明治書院
- 南不二男 (1987) 『敬語』 岩波書店
- 宮地裕 (1983) 「敬語をどうとらえるか」 (『日本語学』 2-1) 明治書院
- 森下喜一・池景来 (1989) 『日本語と韓国の敬語』 白帝社
- 山崎久之・三宅武郎 (1957) 『敬語とその教育』 (文部省国語シリーズ34) 光風出版
- Brown, P. and Levinson, S. (1978) "Universals in language usage: politeness phenomena" in N. Goody ed. Question and Politeness: strategies in social interaction, Cambridge University Press. (増補新版 Politeness: Some universals in language usage, 1987, Cambridge University Press)

- Brown, R. and Gilman, A. (1960) "The Pronouns of Power and Solidarity"
in Sebeok, T. ed. Style in Language, Cambridge, Mass, MIT Press.
- Goffman, E. (1956) "The Nature of Deference and Demeanor", American Anthropologist 58
- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation" in Cole and Morgan eds.
Syntax and Semantics, Vol. 3: Speech acts, New York, Academic Press
- Lakoff, R. (1973) "The logic of politeness; or Minding your p's and q's".
Chicago Linguistic Society 9
- Leech, J. N. (1983) Principles of Pragmatics, Longman(池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』1987、紀伊国屋書店)
- Searle, J. R.(1975) "A taxonomy of illocutionary acts", in Searle(1979),
Expression and Meaning, Cambridge University Press
- Seward, J. (1973) Japanese in Action, Weatherhill (荻原純夫訳『スワードさんの日本語ノート』1976、英潮社)

日本語教育指導参考書 17
敬語教育の基本問題(上)

平成2年4月20日 初版発行
平成10年8月31日 3刷発行 定価は表紙に表示してあります。

著作権所有

国立国語研究所
〒115-8620
東京都北区西が丘3-9-14
電話 (03)3900-3111

発行

大蔵省印刷局
〒105-8445
東京都港区虎ノ門2-2-4
電話 (03)3587-4283~9
(業務部図書課ダイヤルイン)

落丁、乱丁本はお取り替えます。

ISBN4-17-311417-6

政府刊行物販売所一覽

政府刊行物のお求めは、下記の政府刊行物サービス・センター又は政府刊行物サービス・ステーション《官報販売所》を御利用ください。

◎政府刊行物サービス・センター（大蔵省印刷局直営）

	〈電話番号〉	〈FAX番号〉		〈電話番号〉	〈FAX番号〉
札幌	(011) 709-2401・2402	709-2403	名古屋	(052) 951-9205・9341	951-9207
仙台	(022) 261-8320・8321	261-8321	大阪	(06) 942-1681・1682	942-1683
霞が関	(03) 3504-3885	3504-3889	広島	(082) 222-6012・6013	222-6013
大手町	(03) 3211-7786	3211-7788	福岡	(092) 411-6201・6204	411-6509
金沢	(076) 223-7303・7304	223-7304	沖縄	(098) 866-7506・7508	866-7507

◎政府刊行物サービス・ステーション《官報販売所》（大蔵省印刷局指定）

〈名 称〉	〈電話番号〉	〈名 称〉	〈電話番号〉
札幌 北海道官報販売所 （北海道官書）	(011) 231-0975	名古屋 愛知県第1官報販売所	(052) 264-9155
青森 青森県官報販売所 （今泉書店）	(0177) 76-3611	名古屋駅前 愛知県第2官報販売所	(052) 561-3578
盛岡 岩手県官報販売所	(0196) 22-2984	豊橋 (豊川堂内)	(0532) 54-6688
内丸 岩手県官報販売所	(0196) 53-4163	津駅前 三重県官報販売所	(059) 228-4812
仙台 宮城県官報販売所	(022) 222-6486	大津 滋賀県官報販売所	(059) 227-7526
秋田 秋田県官報販売所 （石川書店）	(018) 862-2129	大津 (澤五車堂書店)	(0775) 24-2683
山形 山形県官報販売所 （八文字屋）	(0236) 22-2150	京都 京都府官報販売所 （京都官書）	(075) 221-4444
福島 福島県官報販売所 （福島西沢書店）	(0245) 22-0161～3	大阪 大阪府官報販売所 （かんぼう）	(06) 443-2171
水戸 茨城県官報販売所 （川又書店）	(029) 231-0102	神戸 兵庫県官報販売所	(078) 341-0637
宇都宮 栃木県官報販売所 （うちやま集英堂）	(028) 633-4094 -3533	奈良 奈良県官報販売所 （啓林堂書店）	(0742) 33-8001
前橋 群馬県官報販売所 （煥平堂）	(027) 235-8111	和歌山 和歌山県官報販売所 （宮井平安堂）	(0734) 31-1331
浦和 埼玉県官報販売所 （岩淵書店）	(048) 822-7633	鳥取 鳥取県官報販売所 （富士書店）	(0857) 23-7271
浦和駅前 (岩淵書店)	(048) 829-2345	米子 (本の学校今井ブックセンター)	(0859) 31-5000
千葉 千葉県官報販売所	(043) 222-7635	松江 島根県官報販売所 （松江今井書店）	(0852) 24-2230
横浜 神奈川県官報販売所 （横浜日経社）	(045) 681-2661～3	岡山 (山田書房)	(086) 223-7048
東京 東京都官報販売所 （東京官書）	(03) 3292-2671	山崎 岡山県官報販売所	(086) 222-2646
渋谷 (大盛堂書店内)	(03) 3463-7555	広島 広島県官報販売所	(082) 297-1300
池袋 (芳林堂書店内)	(03) 3964-1101	山口 山口県官報販売所 （文栄堂）	(0839) 22-5611
川崎 (オリオン書房立川ミナミ店)	(0425) 27-2311	徳島 徳島県官報販売所 （小山助学館）	(0886) 54-2135
新潟 新潟県官報販売所 （北越書館）	(025) 244-5297	高松 香川県官報販売所	(087) 851-6055・6
富山 富山県官報販売所 （Books なかだ本店）	(0764) 92-1192	松山 愛媛県官報販売所	(089) 941-7879
金沢 石川県官報販売所 （うつのみや）	(076) 234-8111	高知 高知県官報販売所	(0888) 72-5866
福井 福井県官報販売所 （勝木書店）	(0776) 24-0428	福岡 福岡県官報販売所	(092) 721-4846
甲府 山梨県官報販売所 （柳正堂書店）	(0552) 35-2201	福岡県庁内 (福岡市役所内)	(092) 641-7838
中央 (柳正堂セントラル)	(0552) 35-2202	北九州 (北九州市役所内)	(092) 722-4861
長野 長野県官報販売所 （長野西沢書店）	(026) 233-3187	佐賀 佐賀県官報販売所	(093) 582-4124
岐阜 岐阜県官報販売所 （都文堂書店）	(058) 262-9897	長崎 長崎県官報販売所	(095) 223-3722
静岡 静岡県官報販売所	(054) 253-2661	熊本 熊本県官報販売所 （長崎次郎書店）	(095) 822-1413
		大分 大分県官報販売所	(096) 352-5069
		宮崎 宮崎県官報販売所 （田中書店）	(0975) 32-4308
		清武 (見聞読タナカ)	(0985) 24-0386
		鹿児島 鹿児島県官報販売所	(0985) 85-8400
		那覇 沖縄県官報販売所 （文政図書）	(099) 285-0015
			(098) 863-5288